

福 岡 市

野 多 目 遺 跡 群

— 稲作開始期の水田遺跡の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第159集

1 9 8 7

福岡市教育委員会

福 岡 市

野 多 目 遺 跡 群

— 稲作開始期の水田遺跡の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第159集



遺跡略号 NTM
遺跡調査番号 8443

1 9 8 7

福岡市教育委員会

序 文

住宅・都市整備公団は、福岡市南区野多目地区に大橋南開地の建設を計画し、福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では、現地踏査の上、試掘調査を実施し、予定地内に弥生時代開始期の溝二条を確認し、昭和58年11月から発掘調査を開始し、昭和59年5月に完了しました。

本書はその調査成果を収録したものです。

調査によって、弥生時代開始期の水田址が確認され、板付遺跡とならび弥生時代開始期を考えるには貴重な資料を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるとともに、研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から出土資料の整理・報告書作製に至るまで、住宅・都市整備公団、調査指導委員の先生方をはじめ、多くの人々のご協力、ご助言に対し深甚の謝意を表するものです。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例 言

1. 本書は住宅・都市整備公団が計画した福岡市南区野多目の大橋南団地建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化部文化課（現埋蔵文化財課）が1983年11月から1984年5月にかけて発掘調査した野多目遺跡の調査報告書である。
2. 本書の内容は弥生時代開始期（突帯文土器単純期）の水田を主とし、一部、中世遺構を含んでいる。
3. 本書の執筆には山崎純男があたった。
4. 本書に使用した図の作成には第1章に示した調査補助員および山崎・杉山富雄があたった。
5. 本書に使用した図の製図は山崎、平川祐介、内野 正、角 浩行、今津啓子、奈良崎和典、永田留美があたった。また、松村道博氏の援助を受けた。
6. 本書に使用した写真は山崎、松村によるものである。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
8. 本書の編集は山崎がこれにあたった。

本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 遺跡の立地	3
3. 周辺の遺跡と歴史的環境	5
第3章 調査の概要	11
1. 発掘区の設定	11
2. 調査の概要	11
第4章 弥生時代開始期の遺構と遺物	13
1. 発掘区の層序	13
2. 遺構の概要	16
3. 遺構	16
(1) 水路1 (SD-01)	16
(2) 水路2 (SD-02)	31
(3) 水路3 (SD-03)	32
(4) 水路4 (SD-04)	35
(5) 水路5 (SD-05)	37
(6) 1号井堰	37
(7) 2号井堰	39
(8) 3号井堰	41
(9) 水口1	43
(10) 水口2	43
(11) 水口3	47
(12) 水口4	47
(13) 水口5	49
(14) 水口6	49
(15) 水口7	49
(16) 水口8	50

07 土壌 (SK-01~05)	50
08 畦畔	53
09 水田区画	55
4. 遺物	55
(1) 水路2 (SD-02) 下層出土の土器	55
(2) 水路1 (SD-01) と水路2 (SD-02) 上層出土の土器	78
(3) 水路5 (SD-05) 出土の土器	87
(4) その他の土器	88
(5) 野多目遺跡出土の石器	88
第5章 中世の遺構と遺物	93
1. 遺構	93
(1) 溝	94
(2) 掘立柱建物	94
2. 遺物	94
第6章 総括	95
1. 水田遺構の復原と他遺跡との比較	95
2. 出土遺物に関する諸問題	101
第7章 プラント・オパール分析	103

挿 図 目 次

Fig. 1.	遺跡の位置と周辺の遺跡	4
Fig. 2.	遺跡の立地	6
Fig. 3.	調査区の設定	10
Fig. 4.	発掘区土層断面実測図 I	14
Fig. 5.	発掘区土層断面実測図 II	15
Fig. 6.	遺構全体配置図	17
Fig. 7.	S D-01木材出土状況実測図 I	19
Fig. 8.	S D-01木材出土状況実測図 II	20
Fig. 9.	S D-01木材出土状況実測図 III	21
Fig. 10.	S D-01木材出土状況実測図 IV	22
Fig. 11.	S D-01木材出土状況実測図 V	23
Fig. 12.	S D-01木材出土状況実測図 VI	24
Fig. 13.	S D-01木材出土状況実測図 VII	25
Fig. 14.	S D-01木材出土状況実測図 VIII	26
Fig. 15.	S D-01木材出土状況実測図 IX	27
Fig. 16.	S D-01木材出土状況実測図 X	28
Fig. 17.	S D-01木材出土状況実測図 XI	29
Fig. 18.	S D-01・02断面実測図	30
Fig. 19.	S D-03実測図	33
Fig. 20.	支線水路 (S D-04)・堰実測図	34
Fig. 21.	S D-05実測図	36
Fig. 22.	1号井堰実測図	38
Fig. 23.	2号井堰・水口 3 実測図	40
Fig. 24.	3号井堰・水口 4・5 実測図	42
Fig. 25.	水口 1 実測図	44
Fig. 26.	水口 2 実測図	45
Fig. 27.	水口 7 実測図	46
Fig. 28.	水口 8 実測図	48
Fig. 29.	土壌 (S K-03・04) 実測図	51
Fig. 30.	土壌 (S K-05) 実測図	52

Fig. 31. 水田区画想定図	54
Fig. 32. 遺物実測図 I	56
Fig. 33. 遺物実測図 II	59
Fig. 34. 遺物実測図 III	60
Fig. 35. 遺物実測図 IV	61
Fig. 36. 遺物実測図 V	62
Fig. 37. 遺物実測図 VI	64
Fig. 38. 遺物実測図 VII	65
Fig. 39. 遺物実測図 VIII	67
Fig. 40. 遺物実測図 IX	68
Fig. 41. 遺物実測図 X	71
Fig. 42. 遺物実測図 XI	72
Fig. 43. 遺物実測図 XII	74
Fig. 44. 遺物実測図 XIII	75
Fig. 45. 遺物実測図 XIV	76
Fig. 46. 遺物実測図 XV	77
Fig. 47. 遺物実測図 XVI	80
Fig. 48. 遺物実測図 XVII	81
Fig. 49. 遺物実測図 XVIII	82
Fig. 50. 遺物実測図 XIX	83
Fig. 51. 遺物実測図 XX	84
Fig. 52. 遺物実測図 XXI	86
Fig. 53. 遺物実測図 XXII	87
Fig. 54. 遺物実測図 XXIII	89
Fig. 55. 遺物実測図 XXIV	90
Fig. 56. 遺物実測図 XXV	91
Fig. 57. 掘立柱建物 (SB-01) と溝 7 (SD-07) 断面実測図	93
Fig. 58. 中世遺物実測図	94
Fig. 59. 板付遺跡 G-7 a 調査区水田 (夜白 I 式期)	96
Fig. 60. 板付遺跡 G-7 a 調査区水田 (板付 I 式期)	97
Fig. 61. 三筑遺跡水田 (5 世紀)	99

図版目次

PL. 1.	(1) 調査区全景 (南から)	105
	(2) SD-02全景 (南西から)	105
PL. 2.	(1) SD-01全景 (南から)	106
	(2) SD-01 (南から)	106
PL. 3.	(1) SD-01近景 (南から)	107
	(2) SD-03近景 (西から)	107
PL. 4.	(1) SD-02断面 (北から)	108
	(2) SD-01断面 (南から)	108
PL. 5.	(1) SD-01プラント・オパール分析資料採取	109
	(2) SD-01断面 (南から)	109
PL. 6.	(1) SD-01木材出土状況	110
	(2) SD-03杭列	110
PL. 7.	(1) SD-01水口3近景 (南から)	111
	(2) SD-01水口4, 5近景 (西から)	111
PL. 8.	(1) SD-01, 3号井堰と水口4, 5近景 (南から)	112
	(2) 水口7近景 (西から)	112
PL. 9.	(1) 中世遺構全景 (西から)	113
	(2) SB-01近景 (北から)	113
PL. 10.	(1) 中世溝 (SD-07) 近景 (西から)	114
	(2) 中世溝 (SD-07) 断面 (北から)	114
PL. 11.	(1) SD-04, 堰近景 (南から)	115
	(2) SD-02下層出土石器	115
PL. 12.	(1) SD-02下層遺物出土状況 (東から)	116
	(2) SD-02下層異物出土状況 (南から)	116
PL. 13.	(1) SD-02下層遺物出土状況	117
	(2) SD-02下層遺物出土状況	117
PL. 14.	石包丁出土状況と石包丁	118
PL. 15.	下層出土石器	119
PL. 16.	(1) 石鏃I (a面)	120
	(2) 石鏃II (a面)	120

PL. 17. (1) 石鏃 I (b面)	121
(2) 石鏃 II (b面)	121
PL. 18. 打製石斧, 磨製石斧	122
PL. 19. 繩文式土器	123
PL. 20. 下層出土土器 I	124
PL. 21. 下層出土土器 II	125
PL. 22. 下層出土土器 III	126
PL. 23. 下層出土土器 IV	127
PL. 24. 下層出土土器 V	128
PL. 25. 下層出土土器 VI	129
PL. 26. 下層出土土器 VII	130
PL. 27. 下層出土土器 VIII	131
PL. 28. 下層出土土器 IX	132
PL. 29. 下層出土土器 X	133
PL. 30. 下層出土土器 XI	134
PL. 31. 下層出土土器 XII	135
PL. 32. (1) 下層出土紡錘車	136
(2) 下層出土高坏, 浅鉢	136
PL. 33. (1) 下層出土土器 XIII	137
(2) 上層出土土器 I	137
PL. 34. (1) 上層出土小壺	138
(2) 上層出土甕	138
PL. 35. 上層出土土器 II (一部下層出土土器)	139
PL. 36. 上層出土土器 III	140
PL. 37. 上層出土土器 IV	141
PL. 38. 上層出土土器 V	142
PL. 39. 上層出土土器 VI	143
PL. 40. 下層, 上層出土壺	144

第1章 序 説

1. はじめに

1980年、住宅・都市整備公団による福岡市南区野多目における大橋南岡地建設の開発計画が市に提出された。これを受けた福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係（現・埋蔵文化財課第1係）は、計画地内の現地踏査を行い、周辺の遺跡分布の状態からみて、未開発地内にも遺跡が存在することを予想した。

1981年2月8日、文化課埋蔵文化財第2係から横山邦継が現地へ赴き、試掘調査を実施した。その結果、現水田耕作土下に黒褐色土層の薄い遺物包含層を認め、さらに下層に幅2m前後の南北に走る溝二条を検出した。包含層、溝からは縄文時代晩期終末の突帯文土器、木材が出土し、有望な遺跡であることを確認するにいたった。

試掘調査の結果をふまえて、市文化課は住宅・都市整備公団との間で協議を重ね、遺跡の保存に務めたが、諸般の事情から、発掘調査のやむなきにいたった。文化課埋蔵文化財第1係では造成工事に先行して記録保存のための発掘調査を1983年11月より実施した。発掘調査は試掘結果の予想をはるかに上まわり、包含層とみていた黒褐色土層は水田耕作土で、溝は水田に伴う水路であることが判明し、弥生時代開始期の数少ない水田遺構を明らかにする大きな成果を得た。1984年4月に現地の発掘調査を無事に終了した。以後、整理作業を進めてきたが、度重なる緊急調査によって中断を余儀なくされ、報告書の刊行に遅延をきたしたが、ようやくここに公にすることができ、その責をはたすことができた。

発掘調査および整理にあたっては、住宅・都市整備公団をはじめ、地元各位の多大な御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

2. 調査体制

以下に示す調査体制を組織した。相次ぐ緊急調査のため充分なる体制ではないが、関係各位の協力と調査補助員諸氏の献身的な努力で調査が進行し、無事終了したことを明示しておきたい。

調査地区 福岡市南区野多目字古古賀522他

調査対象面積 8,521m²

調査面積 約5,000m²

調査期間 1983年11月1日～1984年5月31日

調査委託者 住宅・都市整備公団九州支社

調査主体 福岡市教育委員会文化財課埋蔵文化財第1係（現 埋蔵文化財課第1係）
教育長 西津茂美（前） 佐藤善郎（現） 教育次長 草場 隆（前） 野田養一
（前） 尾花 剛（現） 文化部長 中田宏（前） 河野清一（現） 文化（埋蔵
文化財）課長 生田征生（前）
柳田純孝 埋蔵文化財第1係長 柳田純孝（前） 折尾 学（現）

調査指導・協力 森貞次郎（九州産業大学教授） 岡崎 敬（九州大学教授） 横山浩一（九
州大学教授） 下條信行（愛媛大学教授） 西谷正（九州大学助教授） 甲
元真之（熊本大学助教授） 春成秀爾（国立歴史民俗博物館助教授） 後藤
直（福岡市埋蔵文化財センター所長）

調査担当者 山崎純男（福岡市教育委員会文化財埋蔵文化財課）

事務担当 岡島洋一（前） 岸田 隆 松延好文（現）

調査補助員 伴野幸一（滋賀県教育委員会） 中島達也 平川祐介（現・小郡市教育委員会）
吉武 学（現・福岡市教育委員会） 山田元樹（現・大牟田市教育委員会） 古
野徳久 池田祐司（九州大学文学部） 宮田昌之 角 浩行 高木裕之 仲田善
則 小路永智明 丸山明宏 餅田浩治 牧口 明（福岡大学歴史研究部） 宮原
千佳子（奈良大学文学部）

整理補助員 平川祐介（現・小郡市教育委員会） 角 浩行（奈良大学文学部） 内野 正（名
古屋大学文学部研究生） 今津啓子（九州大学大学院）

整理補助 澄川アキヨ 野村弥生 竹田洋子 藤 アイ子 西 裕子 下河純子 永田留美
堀田富美子 日永田泰子

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

福岡市の平野部は東、西、南の三方を三郡山地とそれにより派生する山塊、背振山地の背振山塊とその派生山塊によって囲まれ、北は博多湾に面する。背振山地に属する油山(標高569.4m)山塊は、その山麓に多くの丘陵が発達し、最高位標高100.5mの鴻ノ巣山を中心とする平尾丘陵を形成している。この平尾丘陵は福岡市の平野部を西の早良平野と東の福岡平野に二分している。

東の福岡平野は、東を前述の三郡山地とそれより派生した山塊である四王寺山(標高410m)とその山麓に形成された月隈丘陵(標高100~150m)によって限られ、西は前述の油山山塊、平尾丘陵に、南は背振山地とその派生山塊によって限られる。ただし、南部は一部低丘陵を介して筑後平野と連なる。

福岡平野は中央部の那珂、比恵の中位段丘を境にして東部に蛇行しながら三笠川が、西部に那珂川がそれぞれ南北に貫流し、その流域および下流域において、かなりの広さの沖積平野の形成がみられる。

野多目遺跡は福岡平野の西部を北流する那珂川左岸の中位段丘上に位置している。行政区画では福岡市南区大字野多目にあたる。那珂川河口から南へ8kmの地点で、調査地区の中心は国土地理院発行の五万分の一地形図「福岡」の南から8.8cm、東から13.5cmの所にあたり、福岡市の中心部に所在する福岡市役所より南南東5.7kmの位置にあたる。また、弥生時代開始期の遺跡として全国的に著名な板付遺跡は本遺跡の北東3.5kmの地点にあたり、後述するように本遺跡も板付遺跡と同様に晩期終末の水田遺構が検出され、水系の異なる両遺跡の関係は福岡平野における弥生時代開始期(縄文時代から弥生時代への過渡期)の状況を解明するにはきわめて重要である。

2. 遺跡の立地

遺跡は福岡平野の西部を蛇行しながら北流する那珂川の左岸に位置している。発掘区は現在の那珂川から西に約400m離れている。遺跡の立地する部分は段丘状をなしており、那珂川との間には那珂川によって形成された沖積地(標高11.6m~12m前後)が約250m幅で那珂川に沿って続いている。遺跡の立地する段丘面と沖積地との境は約1.5mの段差(崖面)をもって段丘面



Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 野多目遺跡(第4次)
2. 野多目前田遺跡
3. 野多目枯渡遺跡
4. 野多目古屋敷遺跡
5. 野多目川遺跡

2. 遺跡の立地

が高くなり、段丘面は標高13.5m前後の平坦面となっている。段丘面と沖積地の境界付近を老司川が蛇行しながら北流（ほぼ那珂川に平行して流れている）している。この老司川の左岸には部分的に自然堤防状の微高地が形成されていて、表面には黒曜石片、土器片、青磁器片等、弥生～中世にかけての遺物が散布しており、この微高地がある時期に集落地として利用されたことを知りうる。

本遺跡が立地する段丘面は基盤層として最上層に黄褐色の新期ローム層、次に黄褐色粘質土の鳥栖ローム層、さらにその下位に八女粘土層が厚く堆積していて、福岡平野における中位段丘Ⅱ面と考えられるが、確定しがたい。この段丘面は現在、そのすべてが開田され南から北に向ってゆるやかに傾斜する平坦面となっているが、微視的に見た場合は若干の高低差を各所に見出すことができる。元来から平坦ではあったが、開田等によってさらに平坦にならされたことがうかがえる。今回の調査や過去の発掘調査によって削平された部分がかなりあることから明らかである。遺跡の形成された当時の地形の復原および、遺跡立地を明らかにするには今後のさらなる調査・検討が必要である。しかし、いずれの場合においても本遺跡が段丘面の比較的安定した部分に立地していることは遺跡の内容からみて初期稲作農耕の水田立地の選地と関連して注目すべきである。

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

野多目遺跡群を含む周辺には古くから那ノ津屯倉に比定されていた三宅をはじめとして、初期横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である老司古墳などの著名な遺跡が存在している。しかし、遺跡の存在が知られているわりにはその実態は明らかでない。以下、那珂川中流域、野多目遺跡を中心としてみた周辺遺跡と歴史的環境について概観してみよう。

先土器時代の遺跡については良好な遺跡は知られていなかった。しかし、最近の発掘調査によって散発的に当該期の遺物が検出されている。野多目遺跡群内の南に位置する野多目前田遺跡（野多目小学校）からは古銅輝石安山岩製の三稜尖頭器、ナイフ形石器各1点が出土している。またさらに南に位置する野多目拮渡遺跡からは新期ローム層中から黒曜石製の三稜尖頭器、台形石器各1点が出土している。本遺跡を含んだ周辺に良好な遺跡が存在する可能性が強い。那珂川の対岸では田佐遺跡からナイフ形石器が表面採集されている他、1986年、福岡市教育委員会が調査した日佐遺跡からは自然流路の堆積土中よりマイクロ・コア1点が発見されている。福岡女学院校内からもナイフ形石器が採集されている。このように那珂川右岸においても先土器時代遺跡・遺物は散発的な発見にとどまっているが、やや離れた三笠川左岸の諸岡遺跡・諸岡館址遺跡・井尻遺跡では良好な包含層が調査されている。那珂川中流域の散発的な遺跡の存

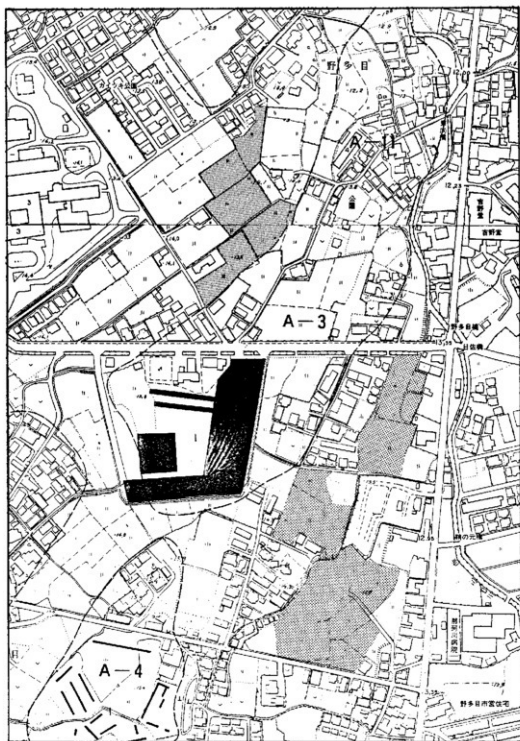


Fig.2 遺跡の立地

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

在は、この流域にも先土器時代の良好な遺跡が存在することを示唆している。

続く縄文時代も先土器時代と同様の状況であるが、最近の調査で良好な遺跡が存在することが明らかになりつつある。時期をおってみよう。

草創期の遺跡は同地域には発見されていない。しかし、本地域よりやや離れた油山麓の柏原遺跡群や同じ那珂川流域の門田遺跡において草創期の遺物が出土している。今後、増加する傾向にあり、同地域にも発見される可能性がある。

早期の遺跡は野多目池や老可池の池畔から押取文土器が発見されているがその数は少ない。最近、油山山麓部に集中して良好な押型文土器期の遺跡が発見されている。両遺跡の押型文土器もその一部を構成しているものと考えられ、今後の発掘調査でその内容が明らかになるものと考えられる。

前・中期遺跡は発見例はない。この地域で縄文遺跡が目立つのは後期前半以降である。野多目括渡遺跡では、後期前半の阿高系土器、中津式土器の時期のドングリの貯蔵穴50基が検出されている。さらに周辺に拡大することは疑いなく、遺跡北側の下水道工事による事前調査で3基の同時代の貯蔵穴、遺跡西側の農道工事に先行する発掘調査によって4基の同時代の貯蔵穴が発見されている。その数は100基前後になると考えられる。さらに遺跡東北部の野多目古屋敷遺跡でも当該期の遺物が出土している。現在、発見されている遺構はすべて貯蔵穴に限られているが、これは周辺部の削平による結果、深い遺構のみが残存したものと考えられる。住居址等の浅い遺構は削平され消滅した可能性が高い。しかし、貯蔵穴からみて、かなりの集落が営まれていたと想定される。

野多目括渡遺跡は後期前半で終り、続く時期の遺構は認められない。ただし、後期後半～晚期前半にかけての遺物（北久根山式土器、三万田式土器等）が今回の調査で少からず出土している。いずれも磨滅しているために他よりの流れ込みとみられるが、いずれにしても近くに同時代の遺跡の存在を暗示している。後期前半以降、この地域に連続して集落が営まれていたと考えられ、那珂川中流域における縄文時代遺跡の一つの核としての位置づけが可能であろう。、那珂川対岸では日佐遺跡で自然流路の堆積上中から並木式土器、阿高式土器、西平式土器、晩期土器が出土していて、周辺部に良好な遺跡が存在するものと思われる。

以上のように、福岡平野西側でも、最近まで不明であった縄文時代遺跡が序々に明らかになりつつあり、縄文時代の展開が明らかになるのはそう遠いことではないと考えられる。

縄文時代終末期、突帯文土器段階では、生産基盤の変化とともにその出現のあり方にも大きな変化を読みとることができる。本報告の野多目遺跡では水稲農耕を示す水田遺構を検出し、初期水田の選地、水田構造解明に大きな成果を得ることができた。本遺跡の南に位置する野多目括渡遺跡では突帯文土器、板付Ⅱ式土器の共存期の水路が検出されていて水田遺構の可能性があり、稲作農耕の流入以降のあり方を知ることができる。その他、野多目前田遺跡や、本発

掘区東側の自然堤防状の部分からも突帯文土器が出土しており、その分布範囲は広く、稲作開始期の拠点集落の可能性を秘めている。那珂川対岸の日佐遺跡でも突帯文土器が単純な姿で検出されている。今後、当該期の遺跡が増加することは疑いない。このような遺跡のあり方は、福岡平野東部の板付遺跡周辺の展開の仕方と類似した点を指摘することができる。弥生時代開始期の姿を追求する上できわめて重要な地域である。

弥生時代にいたって初期稲作受容期の姿と裏はらにその展開は著しくない。弥生時代遺跡も那珂・比恵の台地および福岡平野東部の状況と比較し散発的である。前期の遺跡として先にあげた野多目拈渡遺跡の水路の他、同遺跡から前期後半～終末の貯蔵穴2基が検出されている。調査が遺構検出のみであるために内容が明らかでないが、これら貯蔵穴は古墳時代住居址および弥生時代住居址の下部に検出されており、調査を進ませればその数はさらに増加すると考えられる。しかし、稲作開始期から大きく発展したとは考え難い。中・後期にいたっても大きな発展を認めることはできない。中期の住居址として野多目拈渡遺跡から円形住居址1基が検出されている他、同地域の北部にあたる南大橋遺跡や和田遺跡において甕棺墓の存在が知られているにすぎない。弥生時代遺跡の濃密な福岡平野において特異な地域としての感じを受ける。ただし、周辺地域の調査が進めば、ある程度の遺跡が出現することは疑いなく、今後の調査の進展に期待したい。

古墳時代は弥生時代の状況とことなり、福岡平野における有力な地域の一つとしての位置づけが可能である。同地域の南に位置する老司古墳は全長90mの前方後円墳で福岡平野では最大規模をほこっている。後円部に3基、前方部に1基の石室が構築され、各石室より豊富な副葬品が出土している。また、老司古墳の北には卯内尺古墳が位置し、墳形は不明であるが、三角縁神獸鏡、銅鐻の出土が知られている。その他、老松神社古墳群、卯内尺古墳群、野多目古墳群などがある。老松神社、卯内尺古墳群は箱式石棺等を内部主体とする低墳丘の小円墳で5世紀代に比定される。野多目古墳群は横穴式石室を内部主体とする後期古墳である。同地域内には後期群集は存在せず、油山東麓部に形成される後期群集墳との関連性を考慮する必要がある。

古墳時代の集落については野多目拈渡遺跡で竪穴住居址64基が確認されている。5世紀代～6世紀にわたる住居址と考えられるが、竪穴内部の調査が行われていないので、内容については明らかでない。周辺部の調査が進めばさらに集落の実態は明らかになる。

古墳時代後期には有力な遺跡の存在が考えられる。太宰府の前身であったとされる三宅官家は同地域の北側にあたる三宅小学校周辺に比定されていた。しかし、最近、博多区比恵遺跡群において方形区画の建物、倉庫群、櫓列が発掘され、小字名等を加味して三宅官家とされ物的証拠とともに有力視されている。ただし、これをもって三宅説が後退するものではない。同地域はいまだ未調査であり、今後の発掘調査を経た結果、決定されるべきものであろう。

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

この他、野多目前田遺跡では自然流路より内行花文鏡片が出土している。出土状態からは使用目的、所属遺構は明らかにできないが、周辺にミニチュア土器の一群、土製勾玉、有孔円盤が出土していて祭祀関連の遺跡の存在が想定されている。

古代についても古墳時代に引き続き有力な遺跡が認められる。三宅には三宅官家想定地の他、その西側に三宅庵寺の存在があげられる。寺院の伽藍配置等については不明であるが、礎石の存在が確認されており、青柳種信の筑前国統風土記拾遺の中にも若八幡と地縁神社に礎石を寄進したことが記されていて(享保12年)現在も残存している。三宅庵寺の隣接地の調査において掘立柱建物2棟が検出されている。三宅庵寺の関連遺構と考えられる。出土遺物には老司Ⅰ、Ⅱ式の古瓦をはじめとして石帯、富寿神宝、黄銅製の匙、箸、木簡、墨書土器が出土していて寺院である確証は高い。この三宅庵寺の性格は明らかではないが郡寺あるいは有力者の私寺と考えることができる。寺院に関連する遺跡として、周辺に三宅瓦窯址、岩野瓦窯址、さらに南に下って老司瓦窯址の存在があげられる。

和名抄によれば那珂郡には田来、臼佐、那珂、良人、海部、中嶋、三宅、山田(口)、板引(板曳)の9郷の存在があげられている。今その各郷を地域別にみてゆくと臼佐は現在の臼佐周辺、那珂は現在の那珂、比恵の周辺、海部は現在の住吉、美野島、博多周辺、中嶋は現在の井相田、大野城市の中嶋、三宅は現在の三宅、野多目周辺、板引(板曳)は板付、井尻、三筑の周辺に比定される。田来、良人、山田の3郷については不明。

本遺跡を含む地域は三宅郷に含まれる。古代遺跡として野多目枯渡遺跡に掘立柱建物24棟、柵列1列、土壇39基が検出されている。また、野多目前田遺跡では布目瓦、土管、墨書土器等が出土し、また、野多目枯渡遺跡や野多目古屋敷遺跡の自然流路からも多量の布目瓦が出土しており、周辺に瓦葺き建物の存在が想定できる。このように内容は明らかでないが出土遺物等から、この地域が古代において那珂郡の中で有力な地域であったことを知りうる。この地域、特に三宅に関連しては文献資料も散見され、宣化元年(536年)の那ノ津官家をはじめとして、延暦12年(793年)三宅連真継、延喜16年(916年)三宅春則等の人名が登場している。

中世については良好な遺跡、遺構は検出されていないが、過去の調査区や表面採集資料によってこの地域全体にその痕跡を認めることができる。本調査においても掘立柱建物1棟の外、溝等が検出されている。明確な集落地は検出されていないが、その姿は市街化する以前の状態に近いものであったろう。

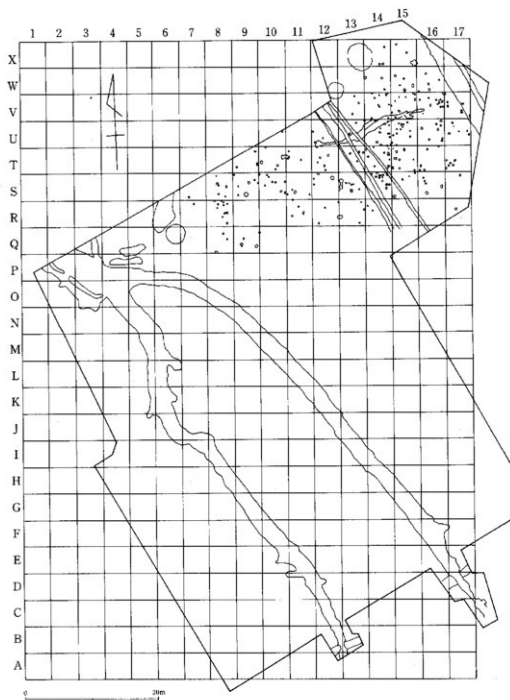


Fig.3 調査区の設定

第3章 調査の概要

1. 発掘区の設定

調査対象地の敷地面積は8,521㎡におよんでいた。しかし、発掘調査に先行した試掘調査によって、対象地の南半部は削平され遺構の存在が認められず、発掘調査は遺構が検出された北半部を対象とした。

発掘区は遺構、遺物の状況を考えて、磁北に軸線をとリ、それに直交して4m四方のグリッドを北半部全面に設定した。南北方向軸を南よりA、B、Cの順に区画し北端部がZ区となる。東西方向の軸を西端から1、2、3の順に区画し東端部は20になるように区画した。各グリッドの呼称は南北軸-東西軸、すなわちA-1区、A-2区、…とする地区表示になる。なお遺構の表示は遺構をS、掘立柱建物をB、溝（水路）をD、土壌をKとして表示した。遺構番号は現場で発掘順に従った。よって各遺構の表示は例えば、溝の1はSD-01という表示になる。なお水田、水口、井堰については記号表示はやめて名称で表示している。標題は各遺構の名称と表示記号を併記している。

2. 調査の概要

調査は1983年11月から1984年5月の二年次にわたって実施した。調査時期が冬期であったために、天候不順でさらに積雪等によって困難をきわめた。

試掘調査の結果では現水田耕作土下に薄い包含層が存在し、その下面において遺構が検出されるということであった。遺構としては溝、土壌があり、包含層中には遺物はきわめて少いことや、遺構の性格が不明であるために、一部セクションベルトを除き遺構の明確に判明する地山面まで重機をもって除去した。

地山は薄く烏朽ローム層が残存し下部は八女粘土層となっている。遺構は黒色土で埋まり、その判別は容易であった。

表土層除去後、遺構検出のため清掃したが遺構は意外と少なく、発掘区の中央および西部を南北に走る溝二条と発掘区東側に片寄って径20cm前後の柱穴群および数条の溝を確認したにとどまる。次いで遺構の表面的な観察や出土遺物の分布や検討から発掘区全体が水田遺構とするのが最も妥当性があるものと考えられた。特に溝に水口の掘り込みが認められ、そのあり方は板付遺跡と共通するものであった。ただし、試掘段階で遺物包含層と認定されたものが、水

田耕作土にあたりとみられるが、重機による除去作業においても畦畔等の遺構は認められなかった。水田上層の土層堆積が極端に少ないことや、後述するプラント・オパール分析でも遺跡地内の大きな削平が考えられる。

水田に伴う水路は西側のSD-01と中央部のSD-02が主要なものである。両水路は発掘区北端部で合流し、一本の水路となる。両者には前後関係があり、まず、SD-02が掘削され、次いでSD-01が新たに掘削されている。SD-01の掘削以後は両者が同時に使用されていることは、その埋土の状態が共通していることから判明する。また、SD-01、SD-02の上層は多数の流木が埋没していた。SD-01、SD-02は共に上流部である南側は削平によって消滅している。SD-01は断面V字形に近く、SD-02はU字形を呈している。共に人工的に掘削されたものと考えられる。SD-01には、二ヶ所、SD-02には、一ヶ所の井堰が設置されている。井堰は杭の保存状態が悪く、杭（矢板）の先端部、又は杭穴のみが検出される程度でその上部構造は明らかにできない。しかし、杭、矢板の状態からみて、水路を横断して10数本の杭（矢板）を打ち込み横木を渡した簡単なものを想定することができる。SD-01（SD-02の合流部も含む）に7ヶ所、SD-02に1ヶ所の水口が設置されている。SD-01とSD-02の合流部西側には水路と平行してSD-03が北流している。水口6からはSD-04が北に向かって延びていて支線支路としての役割を果たしている。SD-04の北側にはSD-05が存在するが、土壌になるか水路になるかは明らかにできない。水田畦畔は、北西部では杭（先端部のみが残存し、検出面では杭穴として確認できる）が打ち込まれ、ある程度水田区画が想定できる。杭は確認面で平面的に把握し、調査終了時に断面掘削してその存在を確認した。水口、杭から想定できる水田区画は8面以上である。水路から出土する遺物は土器、石器、土製品である。量的に多い。これは水田祭祀に用いられたもの以外に、生活用品が流れ込んだと推定することができる。これから、この水田経営を行っていた人々の集落は近くに存在することが考えられる。SD-02では下層と上層に遺物の違いが認められる。下層は突帯文土器の単純層で、上層は突帯文土器と板付I式土器の共伴である。SD-01はSD-02の上層と対比できる。

初期水田の1例を新たに加えたことは重要な成果であった。

中世の遺構は発掘区東北部に集中してみられる。溝、柱穴から構成されるが、その遺構の状態から集落の縁辺部にあたりと考えられる。無数の柱穴があるが、建物として把握できるのは1間×2間の建物1棟である。溝は6条を検出したが、発掘区東北部の二段掘りの溝を除いて、他は時期的にもやや新しく、現水田以前の畦畔に伴う側溝のような状態を示している。

第4章 弥生時代開始期の遺構と遺物

1. 発掘区の層序 (Fig. 4,5)

土層断面の観察は試掘調査および表土層除去段階における所見では、地点によってあまり大きな変化はみられない。よって、現水田区画にそって、発掘区中央部、および、発掘区北、南壁の観察で行った。発掘区の設定によって区画した各グリットの区画線とは一致しない。発掘区中央部のセクションはI-4, J-4, 5, 6, K-6, 7, L-7, 8, 9, M-9, 10, N-10, 11, 12, O-12, 13, P-13, 14, Q-15を対角線状に切るものである。また、発掘区北壁のセクションもQ-1, 2, R-2, 3, 4, S-4, 5, 6, T-6, 7, U-8, 9, V-9, 10, 11, W-11, 12を対角線状に切るものである。発掘区南壁も同様に各グリットを対角線状に切るが、南壁部では現水田耕作土、床土直下に地山層が存在する。層位は発掘区内でみるかぎり、東から西、西から東への傾斜をもっていて、SD-01の部分が最も低く浅い谷状になり、全体に南から西への傾斜をもっている。

Fig. 4は発掘区中央のセクション図である。基本的には大きな差はない。第1層は現水田耕作土で明灰色粘質土層をなす。厚さ15~20cm, 第2層は水田床土で酸化鉄の沈殿がみられる。厚さ4~6cmと比較的薄い。第3層は発掘区西半部, SD-02より西側, SD-01の東3mより始まる土層である。暗茶褐色粘質土層で黒色(マンガン)の斑点を含んでいる。現水田直前の水田床土と考えられる。厚さ2~8cm, 第4層は第3層同様に発掘区西半部に見られる土層であるが、第3層より範囲が広く、SD-02の西1mより始まる。明茶褐色粘質土層で、西に向かって徐々に厚くなる。厚さ2~20cm, 第5層は水田耕作土と考えられる土層である。黒褐色土層で灰色味がかっている。厚さ15~20cmである。水路SD-01, 02は第4層を切り込んで掘り込まれている。第4層以下は地山となり、黄褐色の鳥栖ローム層、その下が白色粘質土層の八女粘土層となっている。

Fig. 5は発掘区南壁部のセクション図である。基本的には中央部セクションと大差ない。第1層は現水田耕作土で明灰色粘質土層、厚さ10~15cmである。第2層は酸化鉄の沈殿がみられる黄褐色土層で現水田床土である。第3層は発掘区東側に広がる土層でSD-01の東2mから以東に存在する。マンガンの沈着が多量にみられる暗茶褐色粘質土層で現水田以前の水田床土と考えられる。第4層は明茶褐色粘質土層で西側が厚く20cm前後で、東に向かって徐々に薄くなり5cm前後となる。第5層は水田耕作土と考えられる土層で水路はこの土層を切り込んでつくられているが、水路の最上層の埋土との区別は困難である。黒褐色土層で灰色味がかっている。厚さ10~15cmである。第4層以下は中央壁と同様、鳥栖ローム層、八女粘土層となっている。

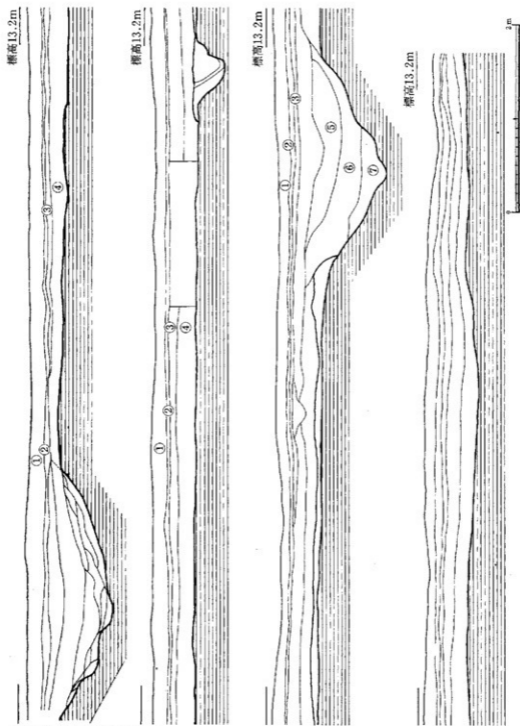


Fig.4 発掘区上層断面実測図 I

1. 発掘区の層序

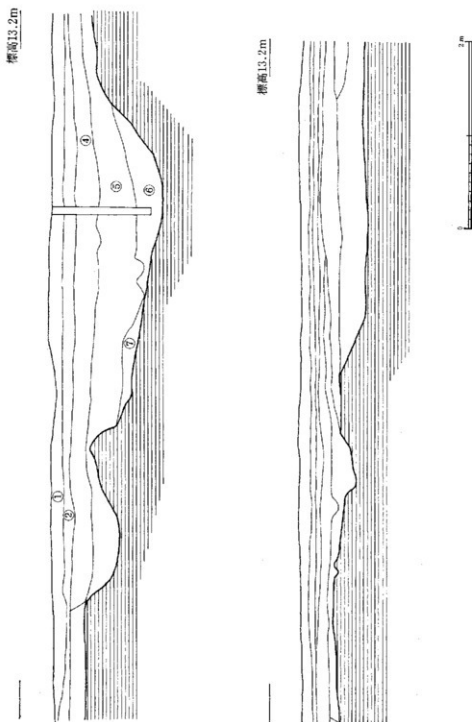


Fig.5 発掘区土層断面夾測区II

以上のように調査区内の土層堆積は比較的単純で水平層に近い。畦畔等の土層の高まりは観察したいが、SD-02の西側肩部に幅90cmのわずかな高まりが認められ畦畔の痕跡と思われる部分がある。また、同様の痕跡はSD-01西側肩部にも幅1.1mで認められる。

2. 遺構の概要

弥生時代開始期の水田遺構は発掘区の中央より西にその大部分を検出した。水田遺構は水路、井堰、水口、畦畔よりなっている。水路は幹線水路と考えられるSD-01, SD-02, 支線水路と考えられるSD-04, 水田より排水するための水路SD-03, 大部分が発掘区外にのびるため意味があきらかにできない溝状の遺構SD-05の5条を確認した。幹線水路SD-01, SD-02は発掘区北側で合流する。SD-01に2ヶ所, SD-02に1ヶ所の井堰が設置されている。井堰は杭が打ち込まれるものと、矢板が打ち込まれるものの二種類がある。水田水口(水尻)はSD-01に4ヶ所, SD-02に1ヶ所, 合流部に3ヶ所が設置されている。支線水路SD-04は発掘区内に3mを確認したにすぎない。水田より排水するための水路SD-03は発掘区に10mを確認した。その幹線水路に流れ込む部分は明らかにしていないが、板付遺跡と対比する上では重要である。水田畦畔は、大部分は土盛りであったと考えられるが、発掘区西北部では杭、矢板が多用されていて、杭穴の痕跡から水田区画の復原が可能である。水田区画は8面以上が考えられる。以下各遺構について詳細にみていこう。

3. 遺構 (Fig. 6)

(1) 水路1 (SD-01) (Fig. 6~18)

SD-01は発掘区西側に検出した。すなわち、B-12, 13, C-12, D-12, E-11, 12, F-10, 11, G-9~11, H-8~10, I-8, 9, J-6~8, K-5~8, L-5, 6, M-5, 6, N-5, 6, O-4~6, P-3~5, Q-2~4, R-2グリットに検出した水田用の幹線水路である。ほぼ南北に直線的に北流するが、J-8グリット近くで西に折れK-6グリットで元にもどり、N-5グリットで再びゆるやかに西部に曲り、わずかに蛇行している。水路幅は南が狭く、北に向って順次広がることは順当であるが、発掘区南側で極端に狭く、浅くなり、水路延長部分を確認するために拡張したグリットではその痕跡を残す程度になってしまう。このことは、水路開始部分を示すのではなく、削平によって水路の上面が削られ消滅しつつあることを示している。水路幅は発掘区南端部で幅約1m, 深さ20cmのU字形を呈している。発掘区中央部で幅2.6m, 深さ60cm, 合流する北端部で幅3.8m, 深さ70cmである。全長約

3. 遺構

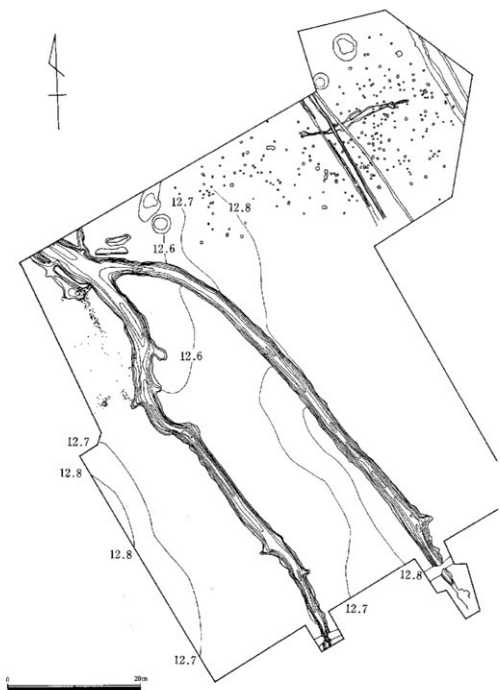


Fig.6 遺構全体配置図

75mを確認した。

SD-01の土層断面は Fig. 4, 5, 18 に示した。Fig. 4 は発掘区中央部分のセクションでSD-01の堆積は水田遺構を覆う第4層の明茶褐色粘土層以下は、自然に堆積したレンズ状を示している。上層より第5層、黒灰色粘質土層、厚さ30cm、第6層、黒褐色粘質土層（黄色粘質土混入）、厚さ20～40cmで東側からの流れ込みが多い。第7層、黒褐色粘質土層（黄白色粘質土混入）である。

Fig. 5 は発掘区北端部のセクションである。中央部セクション同様に自然に流入した堆積を示している。水田遺構を覆う第4層、明茶褐色土層の下の第5層は黒褐色土層で厚さ30～40cmと厚い。第6層は上層よりさらに黒色度の強い黒褐色土層で、溝底に30cmの厚さで堆積している。第7層は水路の西半部にみられる土層で、小石混じりの粗砂層である。SD-01, 02の合流部分にのみみられる層位で、SD-02の溝底部下層と同じである。出土遺物も突帯文土器単純期のものに限られるので水路SD-02の残存部分と考えられる。

Fig.18-1 は水路5, 6区（発掘区南側）のセクションベルト、南側の断面図である。この部分での土層堆積も他と大きな変化はない。水路の堆積土層は上より、第5層、黒褐色粘質土層が30cmの厚さでレンズ状に堆積し、その下に水路両側部から第6層、黒褐色粘質土（黄褐色、白色の粘土粒を含んでいる）が流れ込んでいるが水路中央部で接合していない。さらにその下部に第7層、灰黒褐色粘質土層（白色粘土粒を多量に含んでいる）が堆積している。溝底に接して部分的に灰褐色粘土層、暗黒褐色粘質土層、粗砂層（鉄分を含む）が堆積している。第5層下面、第6層、第7層上面に流木が存在する。

Fig.18-4 は水路3, 4区（井堰3の下流部分）のセクションベルト南側の断面図である。基本層位は他のセクションと同様で自然堆積を示している。第5層は黒褐色粘質土層で水路中央部にレンズ状にわずかに認められる。厚さ10cmである。第6層は第5層同様に黒褐色粘質土層の堆積であるが、上層に比較し、やや暗い。黄褐色、白色の粘土粒を含んでいる。この層はこの部分では厚く20～40cmである。第7層は灰黒褐色粘質土層で厚さ10cm前後である。白色粘土粒を多量に含んでいる。溝底には部分的にブロック層が認められる。東側には白濁した暗黒褐色土層、中央部に地山の白色粘土層と上部の黒褐色土層が混在したブロックがみられる。

Fig.18-5, 6 はSD-01, 02の合流部分のセクション図である。5はSD-01の2, 3区のセクション北側の断面図である。SD-01, 02の間には切り合いは認められない。水路SD-01の堆積は第5層が黒褐色粘質土層でSD-02の第4層と同じである。第6層は第5層同様に黒褐色粘質土層であるが、上層に比較して褐色度が強い。第7層は黒褐色粘質土層の堆積で厚さ20cm、白色粘質土粒が混入している。6はSD-01の2区南側、SD-02の1, 2区の分断セクションの南側断面図である。SD-01とSD-02の間に前後関係を読みとることができる。すなわちSD-02の下層部分がある程度堆積した後にSD-01が掘り込まれ、一時期、同時

3. 遺 構

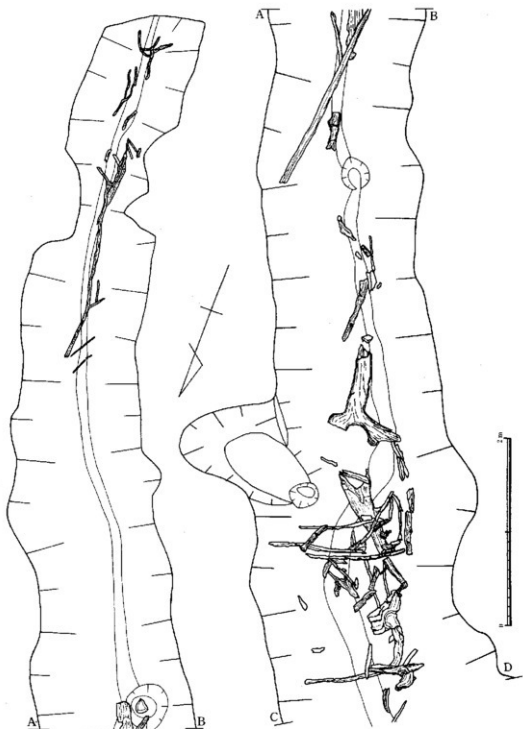


Fig.7 SD-01 木材出土状況実測図 I

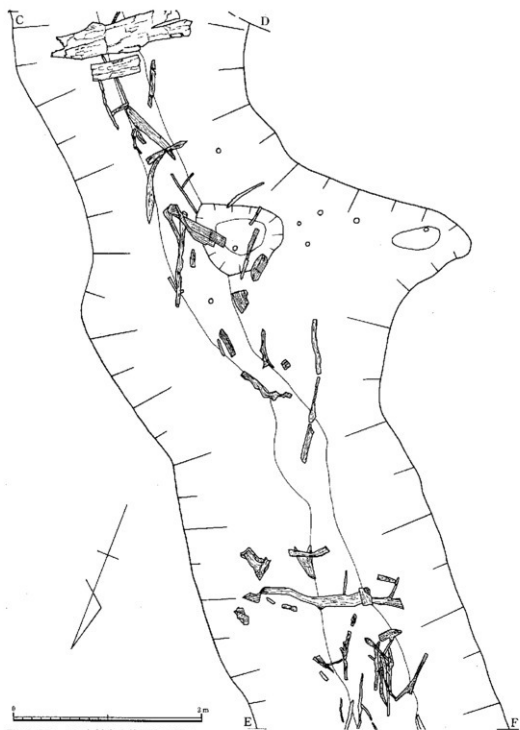


Fig.8 SD-01 木材出土状況実測図Ⅱ

3. 遺構

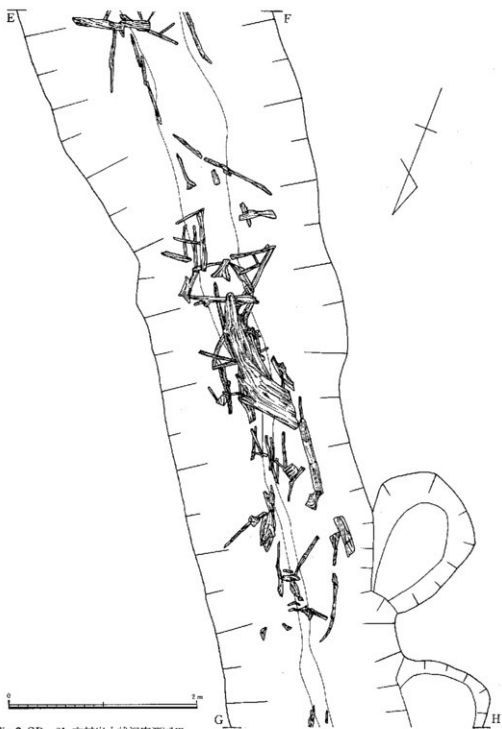


Fig.9 SD-01 木材出土状況実測圖Ⅲ

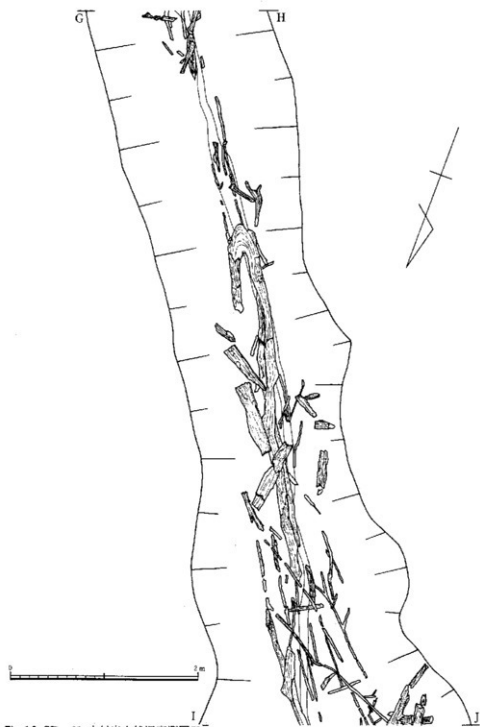


Fig.10 SD-01 木材出土状況実測図Ⅳ

3. 遺 構

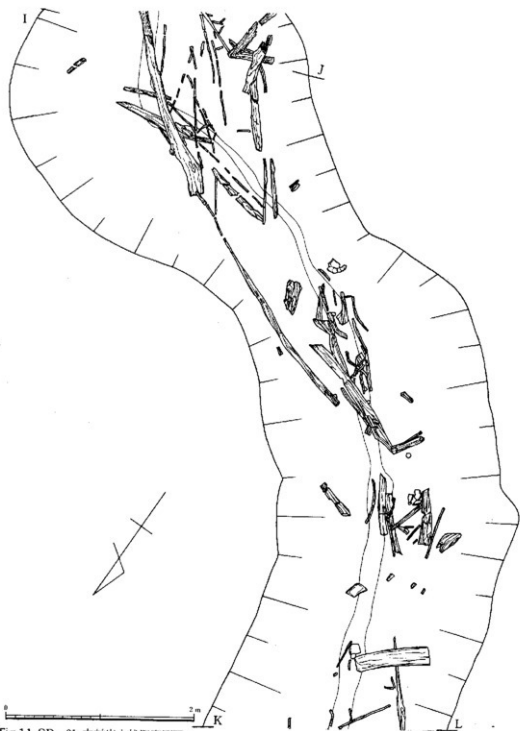


Fig.11 SD-01 木材出土状況実測図 V

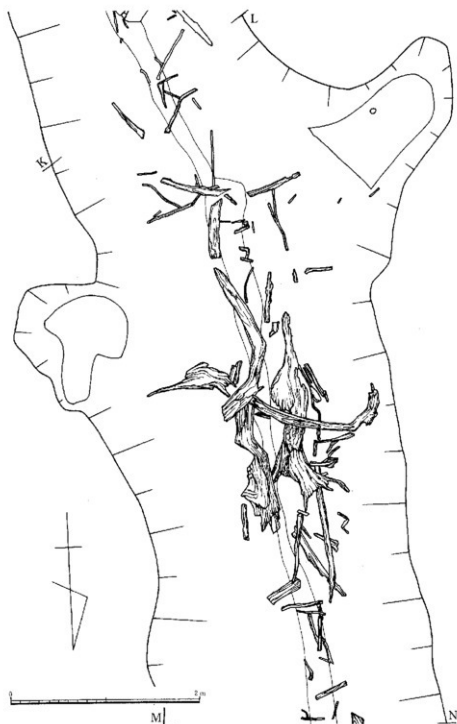


Fig.12 SD-01 木材出土状況実測図Ⅵ

3. 遺構

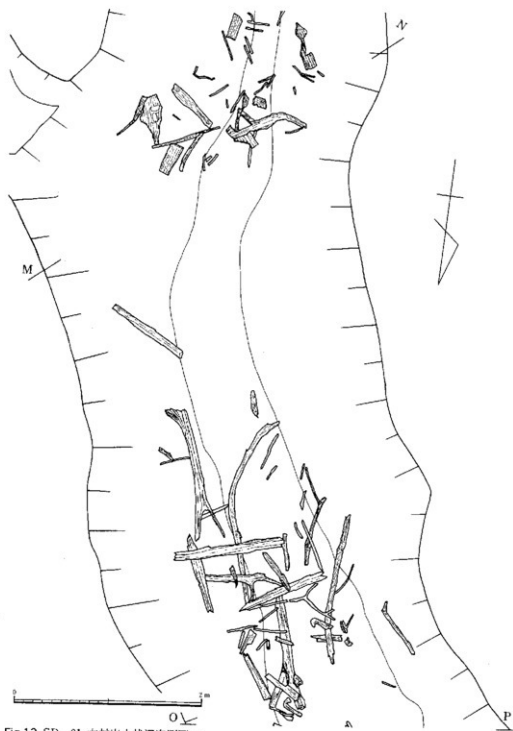


Fig.13 SD-01 木材出土状況実測図



Fig.14 SD-01 木材出土状況実測図

3. 遺構



Fig.15 SD-01 木材出土状況実測図Ⅸ



Fig.16 SD-01 木材出土状況実測図X

に使用されており、その後SD-01もSD-02も第5層の堆積によって埋没していることがわかる。SD-01の基本層位は各セクションと同様で、第5層が黒褐色粘質土層、第6層が上層よりやや褐色度の強い黒褐色土層の堆積、第7層が白色粘土粒の混入した黒褐色土層の堆積である。SD-02との境はやや複雑になるがこの部分についてはSD-02の説明でふれる。第5層下部～第6層にかけて流木等の木材が多い。

以上、SD-01の各セクションについてみてきたが、各土層の厚さには変化がみられるが、

3. 遺構

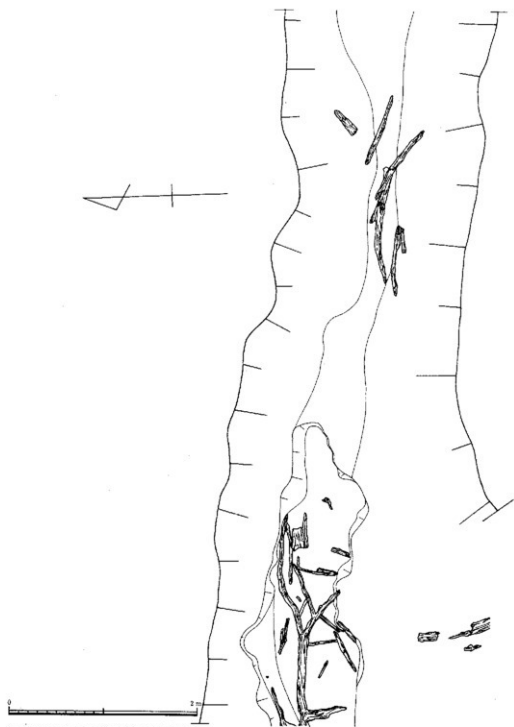


Fig.17 SD-01 木材出土状況実測図

第4章 弥生時代開始期の遺構と遺物

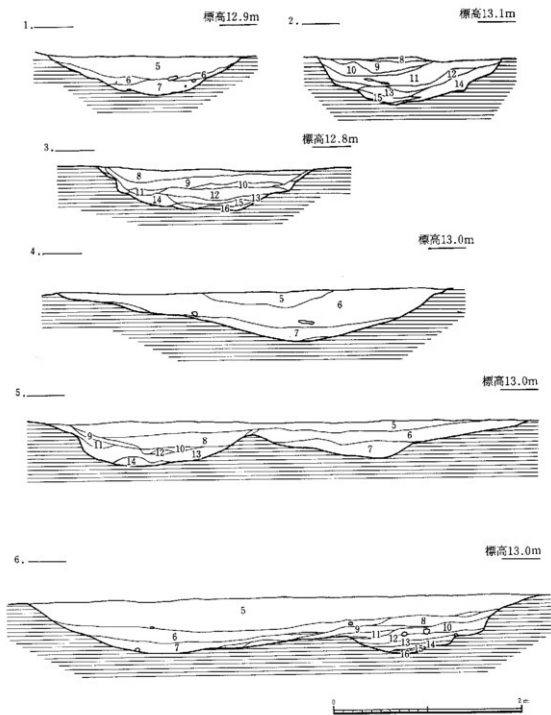


Fig.18 SD-01, 02断面実測図

各層位の基本的な堆積状況は同じであることがわかる。また、SD-01の第4層下部には流木、割材等多量の木材が堆積している。この木材の出土状況はFig. 7～17にかけて示した。溝部に重なりあって存在する。加工痕のある木材は少く、流木、割材が多い。これら流木の堆積は井堰、水路の機能を著しく低下させるものであることはいままでもなく、この流木の堆積が、この水田の廃棄に大きく関わっていることが感知できる。

(2) 水路2. (SD-02) (Fig. 6, 17, 18)

SD-02は発掘区中央部に検出した。すなわちD-17, 18, E-17, F-16, 17, G-15, 16, H-14～16, I-13～15, J-12～14, K-12, 13, L-11, 12, M-10～12, N-9～11, O-8～10, P-5～8, Q-4～7グリットに検出した水田給水用の幹線水路である。全体に北西に向ってゆるやかな円弧を描いて北流している。水路幅は発掘区内ではほぼ一定しているが、発掘区南端、SD-02の延長線に拡張したグリットでは極端に狭くなり消滅してしまう。これは先のSD-01において指摘したように削平による現象と思われる。

水路は発掘区内で約70mを検出した。水路幅は発掘区南端で70cm、深さ4cm、5、6区の境では幅1.9m、深さ50cm、3、4区の境で幅2.5m、深さ50cm、中央部セクションベルト部分では幅2.7m、深さ70cmを測る。SD-01との合流部よりやゝ上流では幅2.8m深さ60cmで、断面形は浅いU字形をなす。

水路内の堆積土は大きく上、下二層に分離できる。以下、各セクションによって堆積土の状況をみてみよう。

Fig. 18-2はSD-02の上流部にあたる5、6区の境のセクションベルトの北側断面図である。水田遺構を覆う第4層以下の溝の堆積土はレンズ状の自然堆積の状況を示している。上層より、第8層、暗褐色粘質土層で厚さ5cm、第9層、黒褐色粘質土層で厚さ10cm前後、第10層は暗褐色粘質土層で水路東側のみ認められ、厚さ4～10cm、第11層、黒色粘質土層で部分的に褐色土のブロックを含む。以上第8～11層がSD-01の第5～7層に相当する。第12層は黒灰色粘質土層と砂層の互層で厚さ6cm前後、第13層は暗灰色の細砂層で厚さ10cm前後、第14層は白灰色の微砂層で厚さ10cm前後、水路西側に堆積が多い。第15層は灰色の粗砂層で厚さ6cm前後である。第12層以下は上層が粘質土の堆積で水がよどんでいたと考えられるのに対し砂層が主体となり水流があったことを示している。

Fig. 18-3は3、4区の境のベルト北側断面面である。基本層位は大きな変化はない。上層より第8層、暗褐色粘質土層、厚さ4～10cm、第9層が黒褐色粘質土層で厚さ10cm前後、第10層が灰黒色粗砂混入の粘質土層、第11層が明黒褐色粘質土層である。第8～11層がSD-01の堆積土に対比される。第12層は灰白色粗砂層で厚さ10cm、第13層、暗灰色粗砂質土層で厚さ5cm

前後、第14層、淡灰色砂質土層で、水路東側に片寄って堆積している。第15層は灰白色粗砂層、第16層は黒灰混茶色砂質粘土層となっている。水路西部には壁の崩れがブロック状に認められる。

中央ベルトの断面 (Fig. 4) では、第4層以下の水路の堆積は以下のごとくである。第8層は黒褐色粘質土層 (灰色味がかかる) で厚さ20cm前後、第9層が黒褐色粘質土層で厚さ10~20cm。以上の層位がSD-01の堆積に対比される。下層は層位的には小ブロックで、明灰色細砂層、明灰色粗砂層、暗灰色細砂層、黒灰色土層の互層となっている。

Fig. 18-5は2、3区境のベルト西側断面図である。第8層は黒褐色粘質土層で厚さ15cm前後、第9層は褐色が強い黒褐色粘質土層、厚さ15~20cm、第10層は灰黄褐色粘質土層で厚さ5cm前後、第11層は灰黒褐色粘質土層、厚さ10cm前後、水路東側にみられる堆積である。以上の層位がSD-01の堆積に対比される。第12層は灰白色砂質土層でブロック状に堆積する。第13層は灰白色細砂層、厚さ10~15cm、第14層は黄褐色粗砂層で厚さ10cm、溝底に堆積している。

Fig. 18-6はSD-01, 02の合流部断面図である。本水路上部の堆積土はSD-01と同じである。第5層、黒褐色粘質土層で厚さ20~30cm、SD-01に向って堆積土は厚くなる。第5層の下部に灰褐色粘質土層がブロック状にはいつている。第8層は灰白色砂層で厚さ10cm前後、SD-02の西側部から堆積し、SD-01の第6層の下位にもぐる。第9層は暗灰色砂層で厚さ6cm前後、SD-01の第6、7層の下位に潜る。第10層は灰黄色粗砂層で厚さ10cm前後、第11層は灰白色粗砂層、厚さ5cm前後、第12層、黒灰色粘質土層、厚さ5cm前後、第13層、灰白色粗砂層、厚さ4cm前後、第14層、黒灰色粘質土層、厚さ5cm前後、第15層、黄灰色粗砂層、厚さ2cm前後、第16層、黒灰色粘質土層、厚さ3cm前後となっている。ここで注意しておきたいのがSD-01の堆積土に対比される土層以前の層位の状態である。その下位は比較的安定しているが、上層部ではSD-01に向って流れ込んだような状態を示し、特にSD-01の第6層下部や第7層の下部にSD-02からの流れ込んだ土層堆積がみられる。このことはSD-01と02の間の時間的関係を如実に示すものである。すなわち、SD-01はSD-02の下層部が堆積した直後に掘削され、水路の機能を果す初段階にSD-02の堆積物がSD-01に流れ込んだとみることができよう。

(3) 水路3 (SD-03) (Fig. 6, 19)

SD-01, 02の合流する水路部分 (グリットで示せばP-2, 3, Q-1, 2にあたる部分に検出した。)の西に幹線水路と平行して地山を掘削してつくられた水路である。SD-03は発掘区内での長さは10mで北側はさらに発掘区外に延びている。水路幅はその開始地点が排水口と水口7とが微妙に重複しているために、やや幅広くなり1.9~2.5mを測るが他の部分は

3. 遺 構

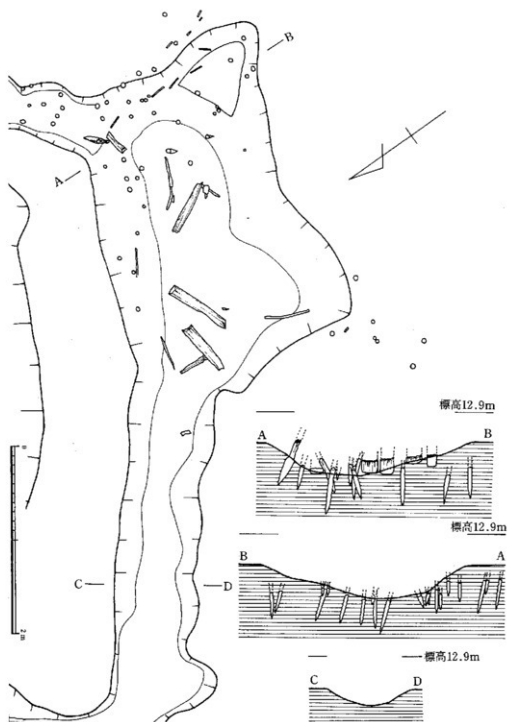


Fig.19 SD-03 実測圖

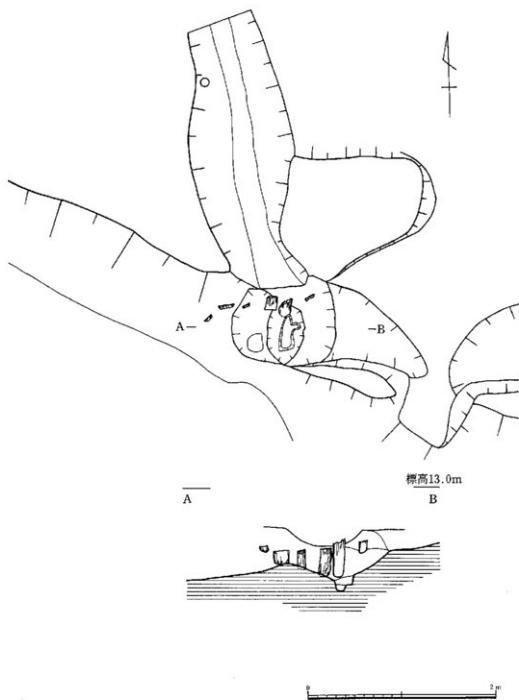


Fig.20 支線水路(SD-04)・堰実測図

3. 遺 構

0.8～1.0mを測る。深さは開始が水口、排水口が重複しているために深くなり40cmを測るが、発掘所見では、いずれの作用によるものかは明らかにできなかった。おそらく両者の相互作用によるものであろう。他の部分は深さ30cm前後で断面U字形をなし、南から北に向ってゆるやかな傾斜がついている。水路は黒褐色粘質土によって埋っている。溝底部に若干の粗砂層の堆積が認められる。水口7、水口8とは重複し、その前後関係が考えられるが、発掘調査の土層関係からは把握することはできなかった。しかし、水口7の部分に打ち込まれた杭、矢板からその前後関係は明らかにできる。その証明は水口7の項においてのべ、結論のみを記せば、水口8が最も早くつくられ、SD-01の新設に伴い水口8を廃棄し水口7を新設している。その後、水口7を廃棄し、排水施設であるSD-03をつくり出していると考えられる。

(4) 水路4 (SD-04) (Fig. 6, 20)

SD-01, 02の合流する水路部分の右岸から引き込んだ支線水路と考えられる溝である。Q-3, R-3グリットに検出された。ほぼ南北方向に走る水路で地山を掘削してつくられている。発掘区内で約3.7mを確認したが、その続きは発掘区外にでる。水路幅67～111cm, 深さ20cm前後で断面U字形をしている。溝底部は全体としてゆるやかに南から北に向って傾斜しているが、部分的に凹凸がある。水は北流していたものと思われるが、検出部が短いので即断できない。

水口部分には水量調整のための小規模な堰が設置されている。堰は水路肩部よりやや下った水路壁に打ち込まれた矢板列で形成されている。検出した矢板は6枚で、いずれもその痕跡程度のもので保存状態は悪い。矢板先端の形状は尖ったものでなく、やや丸味を加えた程度である。矢板の遺存部分の大きさは西から①幅8cm, 長さ6cm, ②幅16cm, 長さ15cm, ③幅9cm, 長さ21cm, ④幅12cm, 長さ30cm, ⑤幅12cm, 長さ40cm, ⑥幅9cm, 長さ12cmである。いずれの矢板も実際の長さは不明であるが、SD-04との関係でみれば、少なくとも60cm以上の長さが必要である。矢板列は密接したところとやや空間があいている部分がある。埋没時あるいはそれ以前に抜けたものか、あるいは上部に横木を渡すような構造のために空間が必要であったかは判断できないが、空間部分に矢板穴等は検出できなかった。

矢板の打ち込まれた水口部分は長径1.1m×短径0.8m, 深さ50～70cmの凹みができていて、矢板はその凹みが黒褐色粘質土によって埋った以後に打ち込まれていて、先端部は凹みの底に接する形でとまっている。水口の凹みがいかなる理由によって形成されたかは判断に苦しむが、この水路の水尻(排水口)であった場合はこのような凹みのできる可能性は大きい。全体の地形、水の流れからすれば水尻としての機能は希薄であったことが考えられるが、矢板がこの凹みの埋った以後に打ち込まれている点を考慮すれば、その時々に応じて給水用の水路、排水用の水路の使い分けがあった可能性がある。

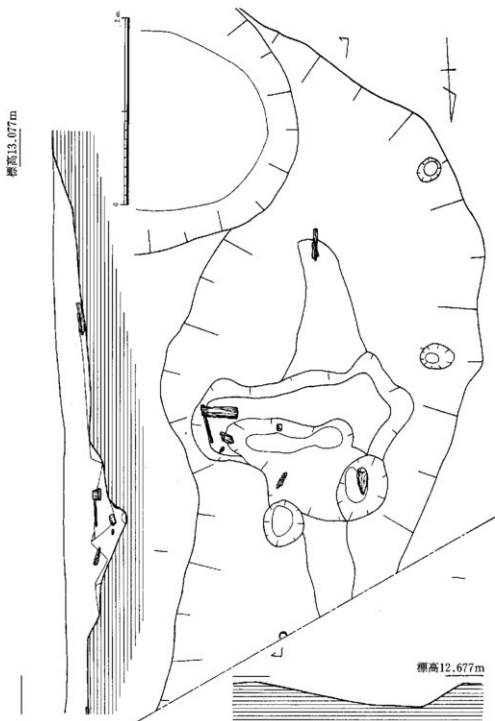


Fig.21 SD-05 実測図

(5) 水路5 (SD-05) (Fig. 6, 21)

単独に存在する水路でR-6, S-6, T-6グリットに検出した。発掘区内で6mを確認し、延長部は発掘区外にでる。土壌である可能性もあるが、SD-03の開始部と共通した部分があるので一応水路として取扱う。水路幅2~3mで水路の開始部が広く、深さも最も深く50cmを測る。それから徐々に浅くなり、深さは20cmで断面は皿状をなしている。凹部から移行する両側部に杭穴二個が検出されたが、この部分に堰が設置された可能性もある。溝内は黒褐色粘質土で埋まっている。埋土中より突帯文土器が単純に出土しているがその量は多くない。性格を明らかにできないが、水路とした場合は排水路の始点とみることができる。その他水田に設置された水溜(置賣)と考えることもできるが、未発掘部分の発掘によって決定されるべきであろう。

(6) 1号井堰 (Fig. 22)

1号井堰は本遺跡で最も古い井堰で、SD-02の中央付近に検出した。グリットではM-10, 11, N-10, 11グリットにあたる。井堰に使用された杭の残存状態が悪く、溝底に残る水路を横断するように打ち込まれた杭穴からかろうじて井堰として確認できる。水路内を埋める堆積土中からは杭穴は確認できなかった。杭穴は計21個を検出した。そのうち11個にはその先端部に杭が残存していた。杭穴からみた杭は径6~15cmで、杭穴は水路中央部には少く、東西の水路壁に集中して打ち込まれている。東側壁に11本、西側壁に10本が存在し、東西共に約4mの範囲にわたって打ち込まれている。1つの堰の杭穴にしては、その範囲が広すぎるきらいがある。このことは井堰の補強改築による結果とみることができないであろうか。杭を詳細に検討すると、4ヶ所の集中部があることがわかる。第1群は水路の最も上流に位置する杭穴群である。約1mの範囲で東壁に5本、相対する西壁に3本の杭が存在する。第2群は第1群より0.5~0.8m離れた下流の位置に集中する杭穴群である。東壁に4本の杭穴が水路を横断するように1列に打ち込まれ、西岸の相対する部分にも1列に3本の杭が打ち込まれている。第3群は第2群の下流0.3~0.4mのところの位置する杭穴群で、東岸に並列して2本、相対する西岸に3本の杭穴が存在する。第4群は第3群の下流に0.8~1m離れた所にある杭で東西の相対する岸に水路中央部を向いた斜方向に各1本が存在する。この杭の周辺には杭穴ともとれる浅い穴状の落ち込みも観察できる。井堰の上部構造が不明なために、これら各杭(穴)群が井堰に対応するとは即断できないが、杭穴からみた井堰の復原からすればその可能性は大きい。仮に各杭穴群が井堰に対応するものとすれば、各杭穴群の前後関係が問題となろう。杭穴の前後関係を決定することは、きわめて困難であるが、ある程度の推測は可能である。検討材料の一

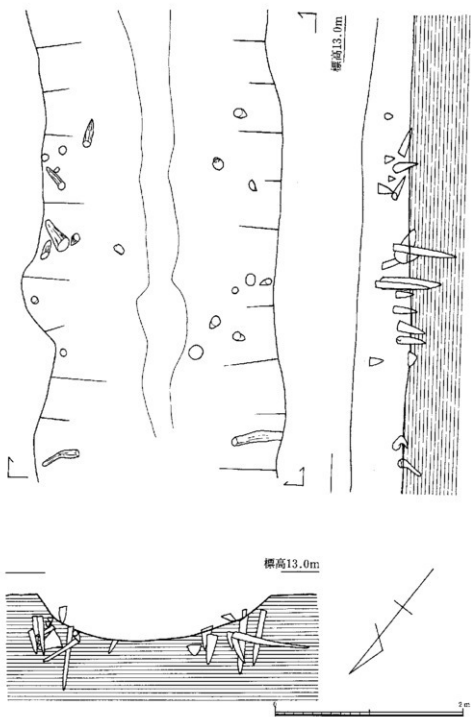


Fig.22 1号井堀実測図

つは杭先端部の位置の問題である。一般的には、井堰、畦畔の構築にあたっては杭はあらかじめ多数用意してあったものと考えられ、同一時期に構築される構築物であった場合は杭先端部がそろそろ傾向にある。また、溝における土層堆積を考えれば、より古い杭列が最も深く位置する。(このことはあくまで一般的な状況のもとで考えられることであり、溝底(土地)の削平等の改変、杭の長短によって逆転する。)以上を根拠とすれば第1号井堰の各杭穴群は2群→4群→3群→1群の序列が考えられる。

井堰の上部構造は杭の残存状態が不良であるために不明である。ただし、いずれの杭穴群も水路中央部には遺存せず、水路両側の壁部に集することからみれば、両端部を杭でとめ、それに横木を幾重にも渡して井堰とする比較的簡単な構造を想定することができる。杭の長さは水路の深さ、水田耕作土との関係から120cm以上が考えられる。

この井堰の貯水によって給水が可能になる水口は約33m上流の右岸にある水口1のみを確認したにとどまる。

(7) 2号井堰 (Fig. 23)

2号井堰はSD-01の南半部に構築されている。設置場所を調査グリットの区画で示せばF-10、11グリットにあたる。井堰に使用された杭の残存状態が悪く、溝底に残る杭先端部、杭穴によって、その存在を知ることができた。水路内を埋める堆積土中に杭穴の存在は認められなかったので、この井堰は比較的早い段階に破壊された可能性がある。水路内に存在する流木、木材の堆積とは無関係ではなかろう。堰の破壊度からみても肯定できる。

井堰は水路を横断するように打ち込まれた6本の杭、杭穴よりなっている。設置場所はSD-01とSD-02の合流地点より上流47mのところ、下流に設置された3号井堰との距離は約30mである。井堰上流の水路幅は2mであるが、井堰設置部分は水口3と重複するために水路幅は約4mと広がる。水口との先後関係は不明であるが、水口部分にも杭が打ち込まれていることからすれば、井堰の方が後出する可能性もあるが、井堰と水口が同時併存し、水口部分が水口と水尻の両者の役割を果たしていた可能性も否定できない。

杭は水路左岸、水口設置部分に片寄って残存していて、水路右岸部には杭の残存はみられない。杭の間隔はまばらで、20~80cmである。杭は径6cm前後であり大きくはない。長さは水路の深さ、水田畦畔の高さからみて110cm以上があったと思われる。

井堰の上部構造は杭上部が残存していないために判明しないが、杭の状態がまばらに打ち込まれていることから想定すれば、ある間隔で杭を打ち込み、その間に横木を渡した比較的簡単な構造が考えられる。

なお、井堰の設置されている部分の水路中央よりやや西に片寄って長径0.9m×短径0.7m、

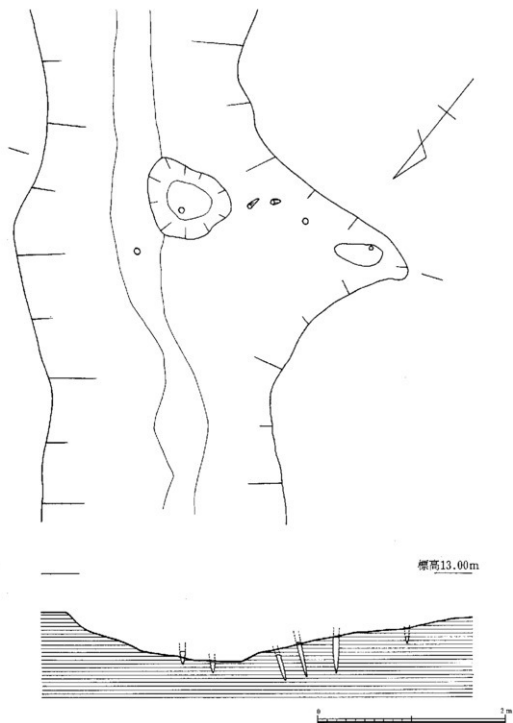


Fig.23 2号井堰・水口3実測図

深さ4~10cmの不整形の土壌が存在する。井堰と何らかの関係が考えられたが明らかにすることはできなかった。

この井堰の貯水によって水田に給水するための施設として、約6m上流の右岸に水口2、左岸に水口3（水尻と併用）が存在する。

(8) 3号井堰 (Fig. 24)

3号井堰はSD-01の中央部よりやや北に片寄って設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せばL-5、6グリットにあたる。SD-01とSD-02の合流点から約20m、2号井堰の下流約30mである。3号井堰の上流部は水路がいったん西に蛇行し、次に反転して北に向っているが、3号井堰はこの反転して水路方向を変える直後の所に設置されている。このことは、水路が人工的に掘削され蛇行は自然にできたものではなく、この水路の掘削時にすでにとりこまれていたことが想定されることなどを考慮し、井堰と水路の蛇行には何らかの相関関係があったことが想像される。流路の蛇行が人工的に作り出されたとすれば、考えられる要素として次のようなことがあげられよう。①前段階の水田区画によって水路の蛇行を余儀なくされた場合、②水路を蛇行させることによって流路の長さを増加させ、流水の温度を高める効果を意図した場合、③水路を蛇行させることによって流水の速度緩和を意図した場合等が考えられる。井堰との関連で考えれば③の場合が妥当であるが、他の意味も同時に含んでいたと考える方が自然であろう。

井堰は水路を横断する形で6枚の矢板が打ち込まれている。矢板列は水路の溝底を埋める堆積土中にその上端部を確認したので、時期的には他の井堰より若干おくれる可能性もある。溝の中央部の矢板はその先端部が溝底部でとまっているか、わずかに溝底下の地山にはいり込んだ状態を示しているので、この矢板が打ち込まれた時期は、SD-01にある程度の堆積土層が形成された以降とみることができよう。

井堰に打ち込まれた矢板の遺存状況は西より、①幅14cm、長さ5cm、②幅8cm、長さ13cm、③幅12cm、長さ3cm、④幅9cm、長さ3cm、⑤幅12cm、長さ12cm、⑥幅10cm、長さ3cmと非常に悪い。矢板①~⑤の間は25cmのほぼ等間隔で打ち込まれている。⑥がやや離れていて60cmの間隔を有しており、⑤、⑥の間および⑥より東に数枚の矢板が存在した可能性があるが、基本的には当時の位置関係を良く示していると考えられる。矢板の長さは井堰としての使用目的を達成するために、水路の深さ、水田耕作土、畦畔からみても少くとも80cm以上の長さが必要である。

井堰の上部構造については矢板の遺存状況が悪いために不明である。弥生時代開始期における矢板使用の井堰はきわめて珍しい。矢板がほぼ等間隔を保つことからみて、水路部に出る下端および上端部に横木を渡し、固定していたものと考えられ、矢板間は小枝や草で水の遺漏を

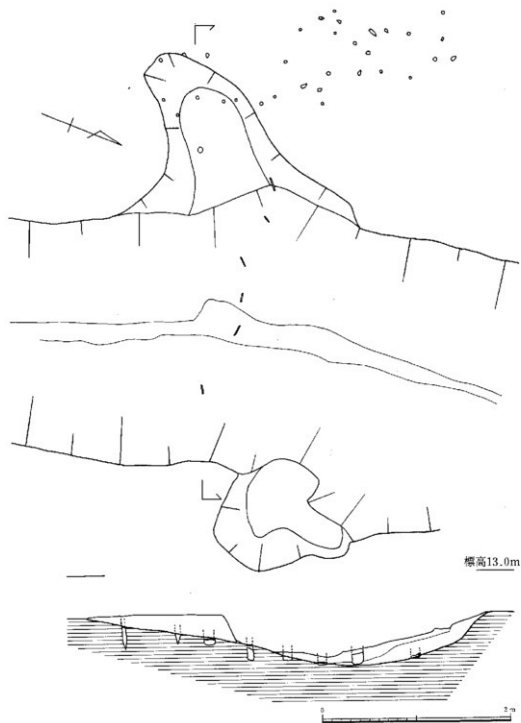


Fig.24 3号井塚・水口4.5米剖面

3. 遺 構

防いだものと考えられる。

この井堰の貯水を給水する施設として水路左岸のすぐ上流に水口4が設置されている。また、この井堰には直接関係ないが右岸のすぐ下流にはSD-01右岸の水田から水を落すための水口(水尻)5が設置されている。

(9) 水口1 (Fig. 25)

水口1はSD-02の南端部近くの右岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せばG-16グリットにあたる。この水口から給水するための貯水用の井堰は水口1の下流約34mのところ存在する。

水口1はSD-02の流路に直交な形で掘り込まれた溝状の遺構で、水路肩部から深さ約45cm程度に掘り込まれ最初わずかな平坦部分をつくり出し、それから水田に向って序々にのぼり平面は先端部が尖る三角形をなしている。水口は長さ1.8m、水路肩部での幅1.3mを測る。水路肩部から水田側に約1.3mはいり込んでいるが、この長さは水田畦畔の幅より長いことはいうまでもない。通常の例からすれば水田畦畔幅とほぼ一致しており、水口1をはさむ畦畔、すなわちSD-02の右岸に平行する畦畔は1.3mより小さく、概略1m前後の幅をもっていたことがわかる。このことは先に示した土層断面図で左岸の肩部にみられた土層の高まりとほぼ一致している。よって、SD-02の両岸には幅1m前後の畦畔が設置されていたことが想定できよう。

水口1には他の水口にみられるような水量調整のための小規模な堰の存在はなく、またその痕跡を示すような杭穴等もなく、必要に応じて石、あるいは土砂で塞いでいたものであろう。

(10) 水口2. (Fig. 26)

水口2はSD-01の南端部近くの右岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せばE-12グリットにあたる。この水口から水田へ給水するための貯水用の2号井堰はこの水口の下流約5mに位置している。

水口2はSD-01の流路に直交して掘り込まれた溝状の遺構で形態的には水口1と大差ない。長さ1.58m、水路肩部での幅は1.1mである。掘り込みの深さは約30cmで、水田部分に向って序々に浅くなるのは水口1と同様である。水路肩部より水田に約0.9mはいりこんでいる。このことからSD-01の右岸の畦畔のある程度の推測は可能である。

水口の出入口部に径20cmのピット状のおちこみがあり、機能との関連性も考えられるが不明。水口1同様に水量調整のための小規模な堰あるいはその痕跡を示す杭穴等は検出できなかった。石、土砂で必要に応じて塞いだものであろう。

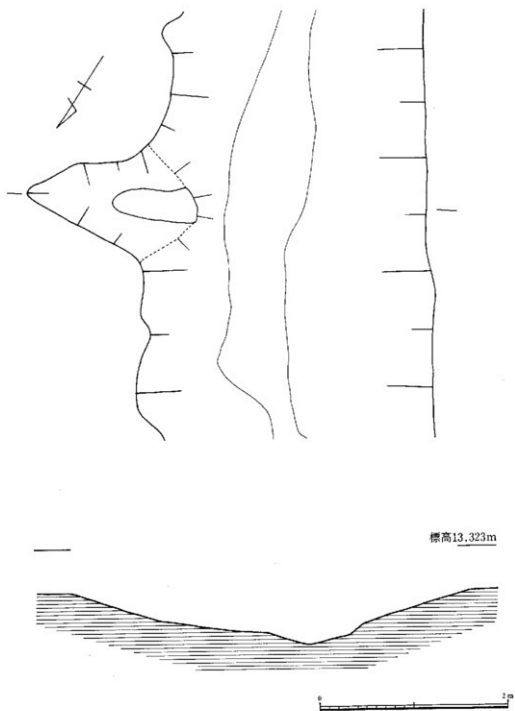


Fig.25 水口1実測図

3. 遺 構

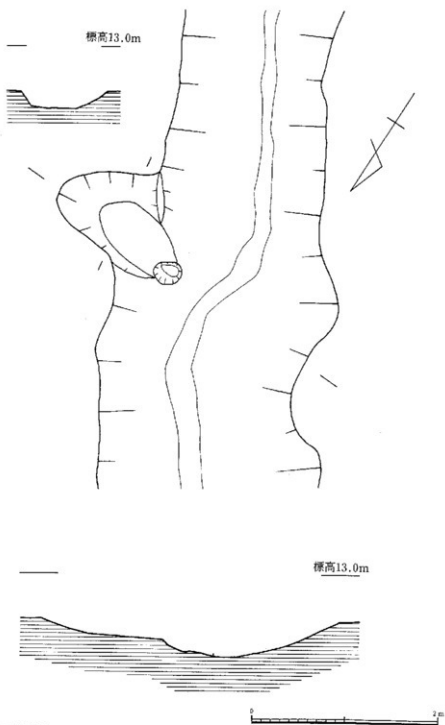


Fig.26 水口 2 築測図



Fig.27 水口7実湖図

(1) 水口 3 (Fig. 23)

水口 3 は S D-01 の南半部近くの左岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば F-10 グリットにあたる。この水口から水田へ給水するための貯水用の 2 号井堰とは重複関係にある。しかし、水口部分の溝中にも井堰のための杭が打ち込まれているので、水口 3 がやや先行して設置されたものと考えられる。井堰設置後は水口、水尻と両者の併用機能が考えられる。

水口 3 は S D-01 の流路にほぼ直交するように掘り込まれた三角状をした溝である。前二者の水口の形状と大差ない。水口は水路底からゆるやかな傾斜でたちあがり水田へ引き込まれている。水口は長さ 1.5m、水路肩部での幅 2.7m を測る。S D-01 の肩部に構築された畦畔幅は水口 3 の長さを越えるものではなく、土層観察でみた水路肩部の高まりの幅 1.1m がほぼ畦畔に相当することが推定される。

この水口にも水量調整用の小規模な堰の存在、あるいはその痕跡は検出できなかった。前二者の水口同様に、石や土砂が必要に応じて塞がれたものであろう。

(2) 水口 4 (Fig. 24)

水口 4 は S D-01 の中央部近くの左岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば K-5、L-5 グリットにあたる。3 号井堰のすぐ上流に設置されていてその機能効果は大きいものであったことが推測される。

水口は長さ約 1.8m、水路肩部での幅 2.5m、井堰と水路肩部での幅 1.1m で溝状に掘り込まれたもので、水路底からゆるやかな傾斜でたちあがりながら水田にいたっている。形状的には他の水口と同様である。畦畔幅は前述したように 1.1m 前後であると推定されるが、水口より下流部（北側）では徐々に広さを増していることが、畦畔に打ち込まれた杭から判明する。水口部には畦畔に接して二列にならぶ杭が打ち込まれていて、小規模な堰が構築されていたことがわかる。堰は水口先端部に 3 本の杭が 20cm 間隔で一列に打ち込まれ、さらに約 50cm 離れた水路側に 10~30cm の間隔で 5 本の杭が一行に打ち込まれている。同方の杭列は共に下流の畦畔に打ち込まれた杭列と続いている。この畦畔に打ち込まれた杭列は、この畦畔では後でのべる水口 7 の部分と水口 4 の部分に限られていて、畦畔の大部分が土盛り畦畔と考えられるところから、この畦畔水口部分に打ち込まれた杭列は水口の変動によって改築された結果とみることができると考えられる。そうすれば、この水口に設置された堰の杭列も 2 列の杭列をもって 1 時期の堰とするよりも、堰は 1 列の杭列でつくられ、各列はそれぞれ異なった時期の堰とみることができると考えられる。この場合、水口の変動からみて水路側の杭列が古く、先端部の杭列が新しくなる。しかし、水口先

第4章 弥生時代開始期の遺構と遺物

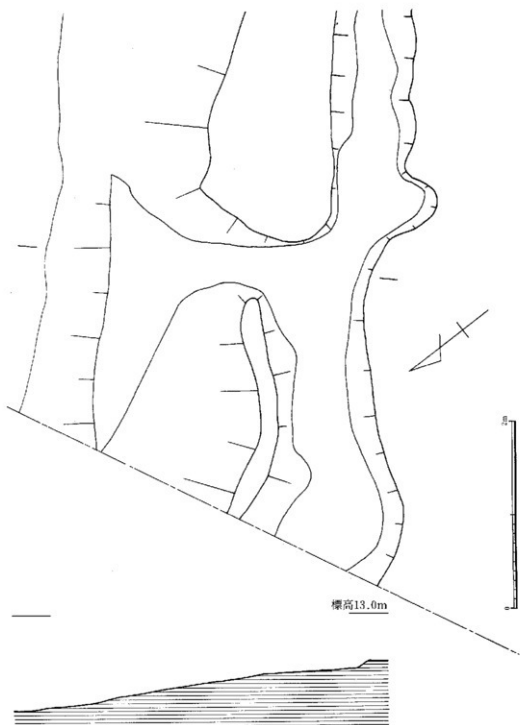


Fig.28 水口8実高図

3. 遺 構

端部の杭列は溝をはずれる部分にあたること、さらに、畦畔杭列とやや離れていることなどを加味し、水口から水と共に流入する土砂を防ぐための杭列とも考えることができる。

(13) 水口 5 (Fig. 24)

水口 5 は S D-01 の中央部近くの右岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば、L-6 グリットにあたる。3号井堰のすぐ下流にあたり水田へ給水するための水口とは考え難く、水田から排水するための水尻と考えることができる。この水口 5 が設置されている部分は S D-01 と S D-02 に囲まれた中ノ島状をなして、水田区画の想定は比較的容易である。水口 2 を水口とし、水口 5 を水尻とする 1 枚の水田を想定することができる。

水口（水尻）の形状は他と同じである。溝の長さ 0.9m で、水路肩部での幅は 1.4m を測る。排水の水量調整等を行う覆はその痕跡を含めて検出できない。必要に応じて石や土砂で塞いでいたと考えられる。

(14) 水口 6 (Fig. 20)

水口 6 は S D-01 と S D-02 の合流部分の右岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば Q-3 グリットにあたる。合流点から約 5m 下流にあたる。水口 6 構造については支線水路 S D-04 の項で詳述したのでここでは省略する。

(15) 水口 7 (Fig. 27)

水口 7 は S D-01, 02 の合流点より約 2m 下流の左岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば、P-3, 4 グリットにあたる。水口 7 の上流約 19m に 3号井堰が位置し、水口 7 の下流約 6m に水口 8 が存在する。3号井堰の位置や水口 6～8 の存在からみて、S D-01, 02 の合流する水路の下流部の延長にあたる発掘区外の比較的近いところに井堰の存在が予想される。また水口 7, 8 は比較的接近して存在するが、これは時間的な違いと理解することができる。S D-01, 02 には明らかに時間的な前後関係を示し、合流部における S D-02 の元々の姿を復原すれば、S D-02 は合流部の西側に片寄って水口 8 と接する流路となる。このことは合流部水路の土層堆積からも背首できることである。水口 7 は S D-01 の掘削によっちはじめて水路と接することになり、水口 8 より後出であることは明らかであろう。

水口 7 はその保存状態も良好で溝状を呈している。排水路 S D-03 と重複している。水口は幅 45～60cm、長さ 1.2m + α 、深さ約 25cm で浅い皿状をしている。水口の途中には杭 3本を 20cm

間隔で打ち込み小規模な堰がつけられている。ここで水量調整がおこなわれていたと思われる。

水口7と排水溝SD-04との関係については土層の切り合い関係では把握できなかったが畦畔に沿って打ち込まれた杭列や水口入口部、すなわち水路肩部に打ち込まれた杭からその新旧関係を知ることができる。水路肩部に打ち込まれた杭は規則性がなく、水口に付属する堰等の杭とは明らかに区別され、水口を埋めて廃棄した以後に水口の掘削で弱くなった水路肩部の補強と考えられる。また水口部分の畦畔に打ち込まれた杭、矢板列は水口部に無関係に打ち込まれ、むしろ水口を塞ぐように打ち込まれている。特に水口部分から、排水溝の入口にかけては矢板が打ち込まれ、丁寧である。この矢板も水口部分を塞いでいる。以上のように、水口7部分に打ち込まれた杭、矢板列は水口とは無関係で、水口を塞いだ後の補強のためのものであることがわかる。水口7、8、SD-03の時間関係は水口8→水口7→SD-03となる。

(16) 水口8 (Fig. 28)

水口8はSD-01、12の合流点より約9m下流の左岸に設置されている。設置場所を調査グリットの区画で示せば、P-2、Q-2グリットにあたる。水口8の上流約6mに水口7があり、さらに上流19mに3号井堰が設置されている。排水溝SD-03と重複関係にあるが、先後関係は前述したとおりである。

水口8は水路に直交して掘り込まれた細長い溝状をなすもので他の水口の形状とは若干異なっている。溝の中ほどをSD-03によって切られている。長さ2.8m、幅0.6~0.7m、深さ10~25cm程度である。水口内には木片1点がみられた以外は出土遺物はない。水口には水量調整のための堰あるいはその痕跡は確認できなかった。必要に応じて石や土砂で塞いだものと考えられる。

(17) 土壌 (SK-01~05)

① 1号土壌 (SK-01)

SD-01とSD-02の合流点近くのSD-01西岸に水路と平行してQ-4~51グリットに掘り込まれた土壌である。長軸5.04m、短軸0.6~1.08m、深さ30~50cmの細長い溝状の土壌で北側がゆるやかに落ち込むのに対し、南側は垂直に近い落ち込みである。黒褐色粘質土によって埋まっている。出土遺物はない。水田遺構に関係するか否かは明らかにできなかった。

② 2号土壌 (SK-02)

SK-01と平行して存在する土壌でQ-4、5、R-4、5にかけて検出した土壌である。長軸3.95m、短軸0.8~1.15m、深さ30~53cmの細長い溝状の土壌である。壁は南側はゆるやかな傾斜でたちあがるのに対し、北側は垂直に近いたちあがりみせる。黒褐色粘質土によって埋まっている。出土遺物はない。SK-01と形状も類似している。使用目的については明らかに

3. 遺 構

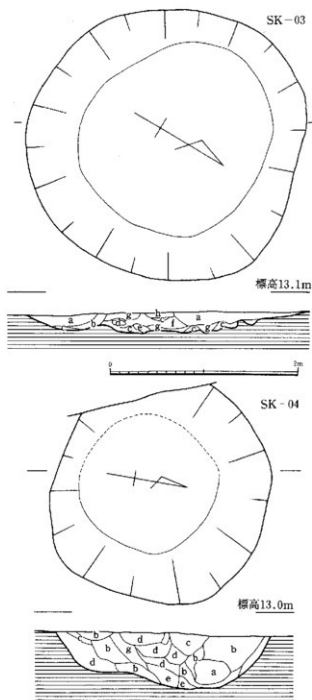


Fig.29 土壇(SK-03, 04)実測図

できない。

③ 3号土壇 (SK-03) (Fig. 29)

SD-05に接して存在する土壇でR-6, 7, S-6, 7グリットに検出した。径2.9~3mの円形プランで深さ21cmで浅い皿状をしている。土壇底は凹凸が著しい。土壇内を埋める土はa. 黒色粘質土, b. 暗褐色粘質土, c. 暗褐色粘質土に白色粘質土が混じる。d. 淡黄褐色粘質土, 黄色粘質土層, e. 白色粘質土, f. 黒色土に暗褐色粘質土を混入, g. 黒灰褐色粘質土で、その状態は自然堆積の状態は示さず、きわめて不規則である。いわゆる風倒木といわれる遺構に近い。埋土内より遺物は出土していない。

④ 4号土壇 (SK-04) (Fig. 29)

発掘区東北部のW-12, 13, X-12, 13グリットに検出した土壇である。径2.25~2.35mの円形プランで深さは約60cmである。土壇底はほぼ平坦である。土壇内を埋める土はa. 黒色粘質土, b. 黒茶色粘質土, c. 灰茶褐色土, d. 黄茶色粘質土, e. 灰黄茶色粘質土, f. 灰黄色砂質土で、その状態は自然の堆積でなく、モザイク状を呈している。この土壇もいわゆる風倒木といわれている遺構に近い。埋土内から遺物の出土はない。

⑤ 5号土壇 (SK-05) (Fig. 30)

発掘区の東北部SK-04の北3m

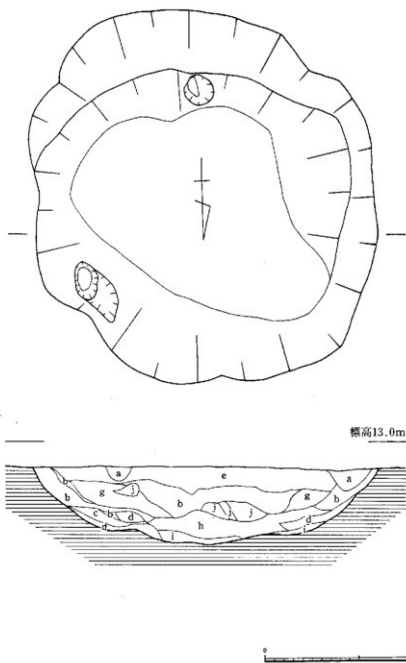


Fig.30 土坑(SK-05) 実測図

3. 遺 構

のところ存在する土塙で、X-13, 14, Y-13, 14グリットに検出した。長径3.95m, 短径3.55mのほぼ円形プランで、深さは約85cmを測る。土塙底は比較的平坦である。土塙を埋める土は、a. 黒色土, b. 暗灰茶褐色粘質土, c. 暗灰茶褐色粘質土に地山の白色粘質土が混入した土, d. 暗黄茶褐色粘質土, e. 淡灰茶褐色粘質土, f. 暗黄茶色粘質土, g. 明黄茶褐色粘質土, h. 黄茶色粘質土, i. 黄茶色砂質粘土である。一部モザイク状になる部分もあるが、全体に流れこんだ状態の自然堆積状をなしている。土塙内から遺物の出土はない。

この他、発掘全体に水田耕作土下に風倒木状の落ち込みがみられる。水田開発のために同地内に植っていた樹木を除いた痕跡とみることもできるが、確定するにはいたらなかった。

(10) 畦畔

水田区画のための畦畔は後世の削平によって保存状態はきわめて不良である。ただし、土層断面の観察、水口周辺に打ち込まれた杭、水口よりある程度の復原は可能である。畦畔は発掘区北西部では水口の補強等で杭、矢板が多用されているが、全体的にみた場合はその大部分が土盛り畦畔と考えられる。

S D-02に沿う畦畔は先述したように幅1m前後の土盛り畦畔であったと想定される。S D-01に沿う畦畔は右岸では水口2の長さ0.9mを越えるものではなく、0.9m以下、大略0.8m前後の土盛り畦畔と考えられる。ここで注意しておきたいのは水口（水尻）5の存在である。その位置関係からS D-01, 02にはさまれた合流点付近の三角形の部分は開田されずに幅広い畦畔状の高まりとして残存していた可能性が高い。S D-01の左岸は先述したように幅1.1mの土盛り畦畔で、川にそっていたことが想定できる。水口4より下流域については水口付近に打ち込まれた杭、矢板列から畦畔が判別できる。杭、矢板列は水口4から水口7に向う畦畔の水口4の北側と水口8の南、北側、および、水口4のすぐ北に存在する東西の杭列である。水口4の北側の杭列は東西の2列が存在し、時間差を示すことは先にのべた。また、水口7の周囲に打ち込まれた杭列はFig. 27にみるように大略2列が存在することがわかる。杭の先端部の位置関係でも大きく二つに分かれる。この部分でも水口、排水路の変動によって畦畔が若干変動していることがわかる。水口4の部位と同様に水路側が古く、西側がより新しいものである。これから水口4と水口7の間の畦畔を復原すると水跡とは無関係に水口4と水口7を直線的に結んだ線が水田側の畦畔線になり、水路側は水路が蛇行しているためにふくらみ三日月状と呈し、畦畔幅は広いところで3~4.5mを測る。水口7より下流はS D-04とS D-01, 02合流部の間、幅10~20cmとS D-04と水田の間に幅20~30cmの畦畔が想定できる。S D-04の掘削前は他の水路際と同様幅1m前後の畦畔が存在したと思われる。水口4近くの東西に並ぶ杭列は幅約1m, 長さ3mの範囲で打ち込まれている。水田から水田へ通じる水口部分の補強の

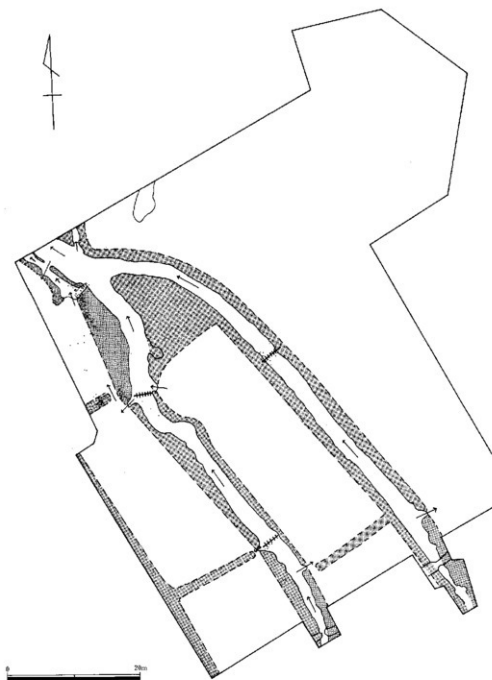


Fig.31 水田区画想定図

ための杭列と考えられるが、ここに東西方向の畦畔があったことは明白であろう。畦畔幅は1m前後と考えられる。杭の先端部の位置関係から他の杭列同様に2時期の杭列の存在が考えられる。

⑨ 水田区画 (Fig. 31)

以上のべた井堰、水口、畦畔から水田区画を想定すると次のようになろう。

SD-02より東側は水口1が存在するのみで水田区画は明らかにできないが、少なくとも1区画以上の水田が想定される。SD-01, 02に囲まれた地域は、水口2, 5が存在し、水口2を水口、水口5を水尻とする略長方形の水田区画が考えられる。規模は長さ45m前後、幅15m、面積475㎡(畦畔を含む)と推定される。SD-01の西側の水田は、比較的良好な状態で水田区画が判別できる。水口3は2号井堰と重複しているために理解できない部分もあるが、水口が堰を境にして異なる水田の水口と水尻の両者を兼ねていたと考えた場合、ここに東西の畦畔が想定できる。また、水口4のやや下流に存在する東西の畦畔が存在する。この畦畔と水路側畦畔との間には杭のない部分があり、南側水田から北側水田への水尻(水口)と考えることができる。以上からSD-01の西側には3区画の水田が想定できる。これら3区画の水田の西側を限る畦畔は明らかにできなかったが、水田基盤面が西に向って高くなり、水路肩部と発掘区西端で20cmの高低差が存在し、他の要素を加味した場合、西側の畦畔は発掘区内におさまる土盛りの畦畔である可能性が高い。SD-01の西側水田はいずれも長方形プランを有し、おおよその規模は、両側水田より15m×17m以上、面積225㎡以上、11m×30m、面積330㎡、5m以上×24m以上、面積170㎡以上が考えられる。水田耕作土は黒褐色土層で、鉄、マンガンの集積層は認められなかった。

4. 遺物

(1) 水路2 (SD-02) 下層出土の土器

SD-02の下層には多量の突帯文土器をはじめ石器、土製品が含まれている。縄文時代晩期後半期の単純層であるが、一部それ以前の縄文式土器が流れこみの状態で混在している。なお、突帯文土器の基本的セット関係は甕、壺、鉢、高杯であり、その中でさらに細分できる。

① 突帯文土器以前の縄文土器 (Fig.32)

細片が多く、全形を知ることのできるものは少ない。いずれも突帯文土器と比較して磨滅が

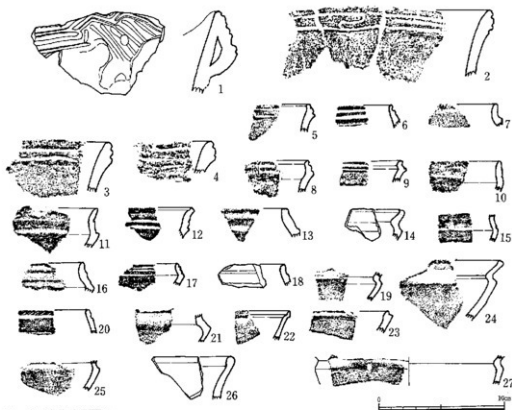


Fig.32 遺物実測図 I

著しく判別は容易である。

1～4は同一個体と考えられる深鉢の口縁部である。口縁部を三角形に肥厚させ肥厚部に沈線2、3条で文様をめぐる。沈線間には縄文、疑似縄文はない。1の破片は山形突起部で、逆W字形の粘土紐のハリつけがある。突起部の下には橋状把手がつけられている。把手の上に径5mmの刺突が加えられている。2の破片には入組状の曲線がみられる。胎土中には多量の砂粒（石英、長石、金雲母、赤色鉱物）を含み精良でない。焼成は良好、黒褐色をなす。後期中葉、北久根山式土器である。5、8は口縁部がくの字をなす。口縁に2条の沈線をめぐらしている。深鉢形土器で三万田式土器の古段階に相当する。5は胎土は精良で焼成は良好。色調は灰褐色をなす。8は胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色をなす。7、13、16、18は浅鉢の口縁部破片である。口縁部はくの字に屈曲シタガ状をなす。口縁部に2～3条の平行する凹線文を施文する。共に胎土に細い砂粒を含むが精良である。焼成は良好で黄褐色～黒褐色をなす。三万田式土器の新段階に相当する。6、9も浅鉢の口縁部でくの字に屈曲する。口縁に沈線2条をめぐらしている。胎土には細い砂粒を含んでいるが精良である。焼成は良好。黒褐色

をなす。御領式土器に相当する。10, 17, 20は浅鉢の口縁部破片、口縁部はやや内傾する。口縁に沈線2, 3条をめぐらす。20は口縁に細沈線の斜線文がある。胎土は精良で焼成は良好、17が黒褐色、10, 20が黄褐色をなす。三万田式中段階に相当する。11, 12浅鉢の口縁部、口縁はくの字形に屈曲し、口縁端が外反する。口縁に2条の沈線をめぐらす。12は口縁内側にも1条の浅い沈線をめぐらす。共に胎土に砂粒を含んでいる。焼成は良好で11は黒褐色、12は褐色をなす。三万田式新段階に相当する。14, 24は浅鉢形土器、頸部が短く、くの字に屈曲し、口縁端がわずかにたちあがり、内側に1条の沈線をめぐらす。19, 21, 25, 27も上記同様の器形をなす、浅鉢の胴部破片である。共に胎土には砂粒を含む、焼成は良好で黒褐色をなす。晩期の突帯土器以前の土器である。15はくの字に屈曲する胴部破片で屈曲部に沈線1条をめぐらす。胎に砂粒を多く含む、焼成は良好、黒褐色をなす。後期後半の土器である。22, 23は浅鉢の口縁部破片である。23は口縁がわずかに屈曲し、内側沈線1条がめぐる。23は口縁が肥厚し、1条の沈線がめぐる。26は頸部はゆるやかに外反し、口縁内部に1条の沈線がめぐる。22, 26は晩期中頃、23は後期後半に相当する。共に胎土には砂粒を含む。焼成は良好で22, 26が黒褐色、23が白黄色をなす。

② 甕形土器 I 類 (Fig.33~35)

底部から内傾しながらたちあがる甕形の器形をなし、口縁部に1条(まれに2条)の刻目突帯をめぐらした土器の一群である。出土土器の中では最も個体数が多い。

Fig. 33の28は内外面共板条痕調整、突帯はAで刻目は指で軽く押えたもので爪形が残る。29は外面は貝殻条痕調整、内面はかるい板ナデ、粘土帯の痕跡が明瞭に残る。突帯はBで刻目はヘラ刻み。30は外面が貝殻条痕、内面は一部板による調整、粘土帯の痕跡が明瞭に残る。突帯はBでヘラ刻み。31は内外面共貝殻条痕調整、内面は条痕の上にナデを加えている。突帯はBで棒状工具の刻み。32は外面が板条痕調整、内面は削り調整、突帯はBで指刻みで爪形が残る。33は外面は貝殻条痕の上にヘラナデを加える。内面は板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。34は内外面共に貝殻条痕調整、突帯はAでヘラ刻み。35は内外面共板ナデ調整、突帯はAで、棒状工具の刻み。35は内外面共板ナデ調整、突帯はAで、棒状工具の刻み。36は外面が貝殻条痕調整、内面が板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。37は内外面共板条痕調整、突帯はAで貝殻による刻み。38は外面が板条痕調整、内面は貝殻条痕調整、突帯はAで棒状工具の刻み。39は外面が板条痕調整、内面ナデ調整、突帯はAでヘラ刻み。40は内外面共板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。

以上いずれも胎土に石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は28が白黄色、36, 37が黒灰色、他が黄褐色をなす。28は除いて他は突帯以下にススの付着が著しい。29, 34には内面にもススの付着がみられる。

Fig.34の41は内外面共板ナデ調整、突帯はBでヘラ刻み、42は外面ヘラ削り調整、内面は板

ナデ調整、突帯はAでへら刻み。43は内外面共板条痕調整、突帯はBで棒状工具の刻み。44は内外面共板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。45は外面が板ナデ調整、内面が板条痕調整、突帯はBでへら刻み。46は内外面共へら削り調整、突帯はBで棒状工具の刻み。47は外面がナデ調整、内面板ナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。48は外面が板条痕調整、内面は板ナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。49は内外面ともへらナデ調整、突帯はBでへら刻み。50は内外面板条痕調整、突帯はBでへら刻み。51は内外面共にナデ調整、突帯はAでへら刻み。52は外面が板条痕調整、内面はへら削り調整、突帯はBでへら刻み。53は外面は板条痕調整、内面は板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。54は外面が板ナデ調整、内面が板条痕調整、突帯はBでへら刻み。55は外面が板ナデ調整、内面が板条痕調整、突帯はAで棒状工具の刻み。56は外面が板ナデ調整、内面は板条痕調整、突帯はBで貝殻刻み。57は内外面共にナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。58は外面が板条痕調整、内面が貝殻条痕調整、突帯はBで棒状工具の刻み。59は内外面共板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。60は外面がナデ調整、内面は貝殻条痕の上をナデ調整、粘土帯の痕跡が明瞭に残る。突帯はBで棒状工具の刻み。61は内外面共ナデ調整、突帯はAでへら刻み。

以上の土器で41, 42, 45, 49, 54~57, 60, 61は胎土に石英, 長石, 金雲母, 黒雲母, 赤色鉱物の砂粒を含んでいる。他の土器の胎土に金雲母を含んでいない。焼成は良好で色調は白黄色~黒褐色をなす。47, 49, 以外は外面の突帯以下にススの付着が著しい。

Fig.35の62は板条痕の上にナデ調整、内面は板条痕調整、突帯はAで棒状工具の刻み。63は外面が板ナデ調整、内面はナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。64は内外面共板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。66は外面がナデ調整、板条痕調整、突帯はBで棒状工具の刻み。67は内外面共にナデ調整、突帯はBでへら刻み、外面に赤色の化粧土がみられる。68は内外面共にへら削り調整、突帯はBでへら刻み。69は内外面共板条痕調整、突帯はBでへら刻み。70は外面がナデ調整、内面は板条痕調整、突帯はAでへら刻み。71は外面がナデ、内面が板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。72は外面が板ナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。73は内外面共に板条痕調整、突帯はBで棒状工具の刻み。74は磨滅し調整は不明、突帯はAでへら刻み。75は内外面共ナデ調整、突帯はAでへら刻み。76は外面がナデ、内面が板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。77は内外面ともナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。78は外面が板条痕調整、内面板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。79は外面が貝殻条痕の上に板条痕調整、内面が板条痕調整、突帯はBで指による刻みで爪影が残る。80は74と同一個体で接合する。81は内外面共ナデ調整、突帯はAで貝殻の刻み。82は内外面共にナデ調整、突帯はAでへら刻み。83は外面板条痕調整、内面がナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。84は内外面共に板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。85は内外面共にナデ調整、突帯はAで巻貝(?)刻み。86は内外面共板ナデ調整、突帯はBでへら刻み。87は外面が板条痕調整、内面はへら削り調整、突帯はAで指による刻み

4. 遺物



Fig.33 遺物実測図II



Fig.34 遺物実測図Ⅲ

4. 遺 物



Fig.35 遺物実測図Ⅳ

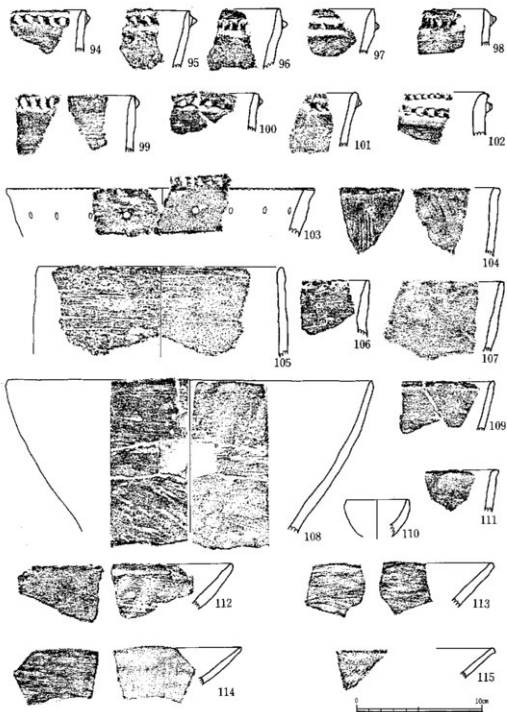


Fig.36 遺物実測図 V

4. 遺 物

で爪形が残る。88は内外面共板条痕調整、突帯はAでへら刻み。89は外面が貝殻条痕の上に板条痕調整、内面はナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。90は外面が板条痕調整、内面剥離のため不明、突帯はBでへら刻み。91は外面が板条痕調整後、ナデ調整、内面が貝殻条痕後ナデ調整、突帯はAでへら刻み。92は外面板ナデ調整、内面がナデ調整、突帯はAでへら刻み。93は内外面共板ナデ調整、突帯はBでへら刻み。以上の土器で65, 69, 74~76, 79, 80, 82, 83, 87, 89は胎土に石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物を含み、他の土器には金雲母を含まない。焼成は良好で褐色~黒色をなす。64, 67, 70, 74, 75, 80, 84を除いた他は突帯下にススの付着が顕著である。

Fig.36の94は外面が板ナデ調整、内面はナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。95は外面は板条痕調整、内面は貝殻条痕後、板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。96は外面がナデ、内面が貝殻条痕の上をナデ調整、突帯はAでへら刻み。97は内外面共に板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。98は内外面共に板ナデ調整、突帯はBでへら刻み。99は外面が板ナデ調整、内面は貝殻条痕の上をナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。100は内外面共板ナデ調整、突帯はAでへら刻み。101は外面板ナデ調整、内面は不明、突帯Aでへら刻み。102は口唇部が外反し口唇部と突帯に刻目を施す。外面は板ナデ、内面はナデ調整、突帯はAで両者共へら刻み。以上の土器で96, 98, 100, 101の胎土には石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含み、他には金雲母を含んでいない。焼成は良好、色調は黄白色~黒褐色をなす。98, 102を除いた他は突帯以下にススの付着が顕著である。

③ 壺形土器Ⅱ類 (Fig. 37, 38)

I類と同様の器形。口縁部に突帯の貼り付けはなく口唇部に直接刻みを入れる。

Fig.37の116は外面がナデ、内は指と板ナデ調整、口唇部はへら刻み。117は内外面共にハケ目調整、口唇部は棒状工具の刻み。118は外面が板条痕調整、内面が貝殻条痕の上に板ナデ、口唇部は板の刻み。119は内外面共に板条痕調整、口唇部はへら刻み。120は内外面共ナデ調整、口唇部はへら刻み。121は外面は板条痕調整、内面はナデ調整、口唇部はへら刻み。122は外面は剥離し不明、内面は貝殻条痕、口唇部はへら刻み。123は外面が板条痕調整、内面はナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。124は内外面共ナデ調整、口唇部はへら刻み。125は124と同様である。126は外面が貝殻条痕の上を板ナデ、内面は貝殻条痕の上をナデ調整、口唇部はへら刻み。127は内外面共にナデ調整、口唇部はへら刻み。128は内外面共に板条痕調整、口唇部はへら刻み。129は外面が板条痕調整、内面がナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み、口唇下に二次穿孔がある。130は外面が板条痕調整、内面が板条痕調整の上をナデ調整、口唇部は板刻み。131は外面が板条痕の上をナデ調整、内面が貝殻条痕の上を指調整、口唇部は板刻み。132は内外面共に貝殻条痕の上を指ナデ調整、口唇部は貝殻刻み。133は外面がハケ目調整、内面がナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。134は外面がハケ目の上をナデ調整、内面がハケ目調整、口唇部

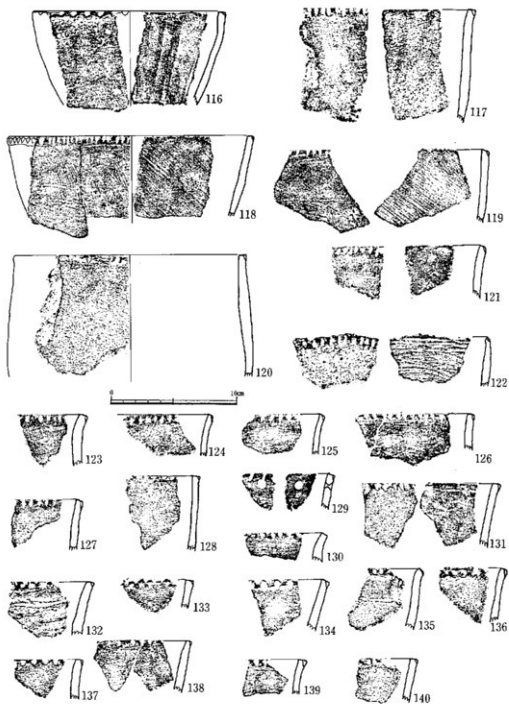


Fig.37 遺物実測図VI

4. 遺物

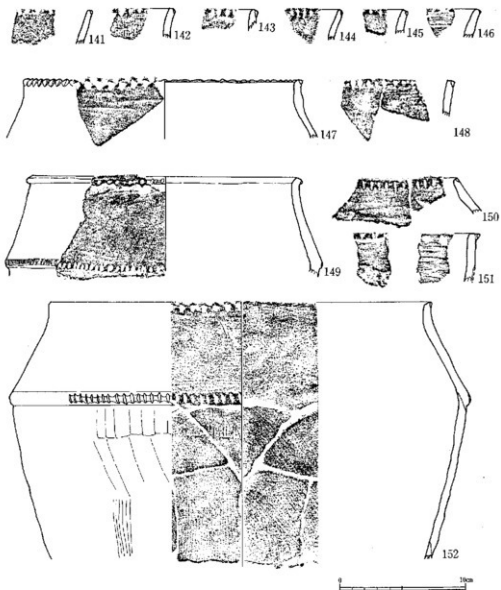


Fig.3B 遺物実測図Ⅶ

は棒状工具の刻み。136は内外面共板ナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。137は内外面共にナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。138は内外面共に板条痕調整の上にナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。139は外面が板ナデ、内面が指による調整、口唇部はヘラ刻み。140は外面が板ナデ調整、内面はナデ調整、口唇部はヘラ刻み。Fig.38の141は外面が板条痕調整、内面がナデ調整、口唇部は棒状工具の刻み。142は外面ハケ目調整、内面ナデ調整、口唇部は板刻み。143は内外面共にナデ調整、口唇部はヘラ刻み。144は内外面共にナデ調整、口唇部はヘラ刻み。145は内外面共にナデ調整、口唇部は板刻み。146は外面がハケ目調整、内面が板ナデ調整、口唇部はヘラ刻み。148は外面が板ナデ調整、内面はナデ調整、口唇部はヘラ刻み。126と同一個体である。151は外面が板条痕、内面が貝殻条痕調整、口唇部は上からの押さえで突帯状にはみ出し、刻みは板刻みである。120, 132, 136, 142, 146, 151を除いて他の土器には外面にススの付着が著しい。以上の土器で118, 119, 121~125, 127, 128, 130, 131, 135, 138, 140, 143~145, 151は胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含み、他は金雲母を含んでいない。焼成は良好で、色調は赤褐色~黒褐色をなす。120, 122, 128, 132, 136, 141, 142を除いた他の土器にはススの付着が著しい。

④ 変形土器Ⅲ類 (Fig. 36)

I, II類と同様の器形をもち、口縁部に刻目突帯、あるいは口唇部に直接の刻みをもたないものである。

Fig.36の103は口縁下に円孔文をめぐらした土器で特異な例であるが一応この類として扱う。口唇部上面に貝殻による刻みをめぐらす。内外面の調整は保存状態が悪く明らかでないが、外面は板条痕調整と考えられる。104は内外面共に板条痕調整、外面にススが付着する。106は内外面共に板条痕の上にナデ調整を加える。107は内外面とも磨滅しているが、内面は板条痕調整と思われる。108は内外面共板条痕調整で、内面は一部ケズリ状になる。109は内外共ナデ調整で、口縁下に浅い沈線がめぐる。111も内外面共にナデ調整である。103, 105, 107~109は胎土に石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。104, 106, 111は金雲母を含まない。焼成は良好で色調は黄褐色~黒褐色をなす。

⑤ 変形土器Ⅳ類 (Fig. 38~40)

胴部上半部でくの字に内側に屈曲する変形の土器で、口縁部と胴部に刻目突帯（直接刻み）をめぐらす。口縁部に直接刻みを施すA類と刻目突帯をめぐらすB類が存在する。

A類 4個体がある。Fig.38の147は、内外面共に丁寧な板条痕調整で内面上からナデ調整を加える。口唇部は板の刻みで、胴部屈曲部の刻目突帯は不明。外面にススが付着する。149は口唇部を折り曲げて一見突帯状で、口唇外側に棒状工具の刻み、屈曲部は外傾の接合で、突帯状にした上に棒状工具の刻みを施す。外面は丁寧な板条痕調整で研磨状になる。内面は凹凸があり、一部ハケ目調整。150は口縁部破片で、内外面共にヘラナデ調整、口唇部はヘラ刻み。屈曲

4. 遺物

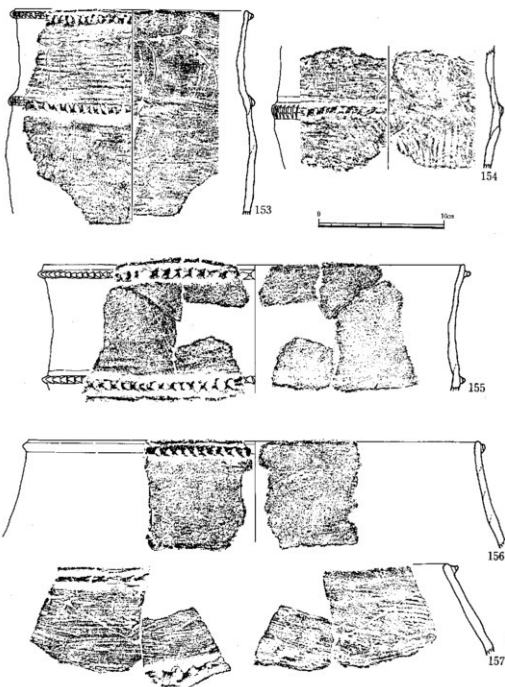


Fig.39 遺物実測図Ⅶ

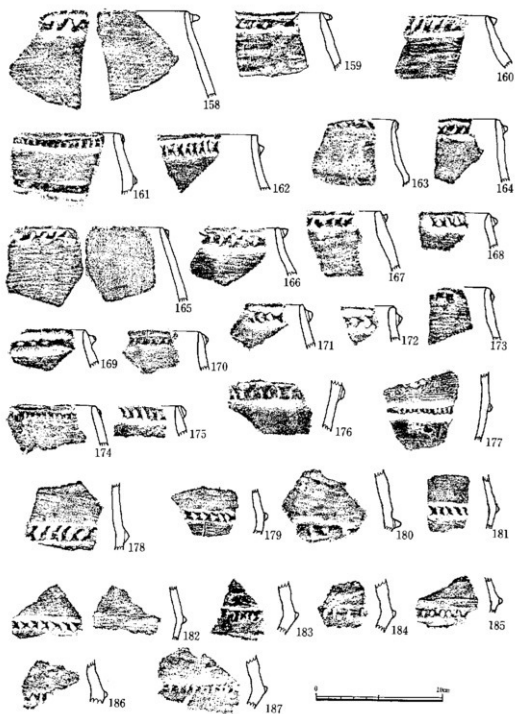


Fig.40 遺物実測図Ⅸ

4. 遺物

の突帯は不明。152は大型品である。内外面は丁寧な板条痕調整。胴下半が縦位、屈曲上半部が横位で異なる。屈曲部の接合は外傾で樋口縁をなし、屈曲部は突帯状をなす。口唇部はヘラ刻みで、屈曲部は板条痕原体で刻んでいる。外面にスガが付着する。以上の土器は152を除いて、胎土には石英、長石、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。152はこれに金雲母の砂粒が加わる。焼成は良好で黄褐色～黒褐色をなす。

B類 A類に比較しその数は多い。Fig.39の153は外面下半は横位の板条痕調整後、縦位の板ナデ調整、上半部は貝殻条痕調整、内面は貝殻条痕後、板ナデ調整、口縁部の突帯はBで口縁、胴部の刻みはヘラによる。154は外面下半が貝殻条痕、上半は貝殻条痕の上を板ナデ調整、内面は貝殻条痕調整、屈曲部突帯はヘラ刻み。155は大型品。内外面共、板条痕調整、口縁部の突帯はAで口縁、胴部突帯の刻みはヘラによる。156も大型品。内外面は板ナデ調整、口縁部突帯はAでヘラ刻み。内面に粘土帯の痕跡が観察できる。157も大型品である。外面は板条痕調整、内面は貝殻条痕調整、口縁の突帯はAで、口縁部、胴部の突帯は板による刻みである。以上の土器の胎土は石英、長石、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄白色～黒褐色をなす。すべての土器の外面にスガが付着している。

Fig.40の160は外面が板条痕調整、内面は一部ヘラ削り調整、口縁部突帯はBでヘラ刻み。161は外面は磨減が著しい。内面は板ナデ調整、口縁部の突帯はBで、胴部の突帯共に棒状工具の刻み。162は外面が板条痕調整、内面は板条痕調整の上をナデ調整、口縁部の突帯はAでヘラ刻み。163は磨減が著しく調整痕は不明、口縁部の突帯はBである。胴部は突帯はない。164は内外面ともナデ調整、口縁部の突帯はAでヘラ刻み。165は外面が貝殻条痕調整、内面が貝殻条痕の上をナデ調整、口縁部の突帯はBで棒状工具の刻み。166は外面が板条痕調整、内面がナデ調整、口縁部突帯はBでヘラ刻み。167は磨減し調整痕は不明、口縁部の刻みはAでヘラ刻み。168は外面は板条痕の上をナデ調整、内面はナデ調整、口縁部の突帯はBで棒状工具の刻み。169は内外面共ナデ調整、口縁部の突帯はAで棒状工具の刻み。170は内外面共ナデ調整、口縁部突帯はBでヘラ刻み。171は内外面共にナデ調整、口縁部の突帯はAで板刻み。172は外面がナデ、内面が貝殻条痕の上をナデ調整、口縁部の突帯はAで貝殻刻み。173は内外面共に貝殻条痕で内面はその上をナデ調整、口縁部の突帯はAでヘラ刻み。174は内外面共ナデ調整、口縁部の突帯はAでヘラ刻み。175は内外面共板ナデ調整、口縁部の突帯はCで板刻み。176は内外面共ナデ調整、胴部の突帯はヘラ刻み。177は胴下半がナデ、上半部が板条痕調整、内面はナデ調整、胴部の突帯はヘラ刻み。178は内外面共板条痕後ナデ調整、胴部の突帯はヘラ刻み。179は外面が板ナデ調整、内面がナデ調整、胴部突帯はヘラ刻み。180は磨減して調整痕は不明。胴部突帯はヘラ刻み。181は外面下半が板ナデ、上半がナデ調整、内面は貝殻条痕調整、胴部突帯はヘラ刻り。182は外面がナデ調整、内面が板ナデ調整、胴部突帯はヘラ刻み。183, 184, 186, 187は同一個体の可能性がある。外面は貝殻条痕の上をナデ調整、内面はナデ調整、胴部突帯はヘラ刻

み。185は内外面共ナデ調整、胴部突帯は棒状工具の刻み。Fig.35の65は内外面共に板ナデの上をナデ調整、胴部突帯は棒状工具の刻み。以上の土器で、162, 163, 166, 167, 173, 180, 183~187を除いた他の土器は外面にススが付着する。160~162, 165~168, 170~173, 175~178, 182, 183の胎土には石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含み、他の土器には金雲母が含まれていない。焼成は良好で色調は黄褐色~黒褐色をなす。

⑥ 浅鉢形土器 (Fig. 36. 41. 42)

浅鉢は量的には少なく、小破片が多い。A類、皿状をなすもの、B類、口縁部近くでくの字に屈曲するもの、C類、その他に大別できる。

A類, fig. 36の112は粗製品、外面は板条痕調整、内面ヘラ削り状の調整、外面にはススの付着が著しい。113は内外面共に条痕後にヘラ研磨を加えているがあまり丁寧ではない。114は外面は板ナデ調整、内面はナデ調整で一部研磨痕がみられる。115は磨滅し、調整痕は不明、口縁部がやや肥厚する、113~115は精製品になる。112~114は胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。115は金雲母を含まない。焼成は良好、115は黄褐色、他は黒褐色をなす。

B類, fig.41の189は体部上半でくの字に屈曲し、口縁はやや立ちあがる。外面下半分は貝殻条痕調整、上半部と内面は貝殻条痕の上を丁寧にヘラ研磨する。190は口縁部が外反し、口唇部に刻目を施す。全体に横方向の丁寧なヘラ研磨。191は屈曲部が鋭くなく丸味をもつ。口縁端は垂直にたちあがる。内外面共丁寧なヘラ研磨。192は屈曲部は鋭く、口縁部は垂直にたちあがり端部を肥厚させている。内外面共丁寧なヘラ研磨。193, 194は屈曲部からゆるやかなカーブをもち口縁部がやや外反する。時期的にやや後出のものである。内外面とも横方向のヘラ研磨。195, 196, 209は屈曲部で極端に内傾し、口縁は垂直にたちあがり、口縁端部がやや外反する。内外面共横方向のヘラ研磨、195と196は同一個体の可能性もある。197は小破片で口縁端部がややたちあがり、肥厚する。口縁下に沈線を入れる。口縁部外面は丹塗りされている。内外面共丁寧なヘラ研磨、198は屈曲部からゆるやかにたちあがり口縁端部がやや外反する。屈曲部から口縁端部の高さが他と比較が高い、外面は条痕の上をヘラ研磨、内面も横方向の丁寧なヘラ研磨、199は小破片で、屈曲部は鋭い。口縁下に沈線を入れる。200は屈曲部破片である。屈曲部直上に浅い沈線をめぐらす。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨、時期的に先行するものである。201は口縁部がたちあがり、口縁下に沈線を入れる。202は屈曲部分の破片で器形的には198と類似している。203は口縁端部が屈曲して垂直にたちあがり、肥厚するもので、192の器形とよく似ている。204は屈曲部は鋭くなく丸味をもち、口縁端部がたちあがる。器形は195等と類似している。外面は剝離しているが、貝殻条痕調整がみられる。内外面ともヘラ研磨仕上げである。205は口縁端を失うが192, 193と同様の器形をなす。内外面共ヘラ研磨調整。206は205と同様の器形、口縁はカーブせず直線的である。207はやや磨滅している。口縁端部がやや外反する。内外面ともヘラ研磨、208は194と同様の器形をなし、内外面共ヘラ研磨調整。以上で200, 209を

4. 遺物

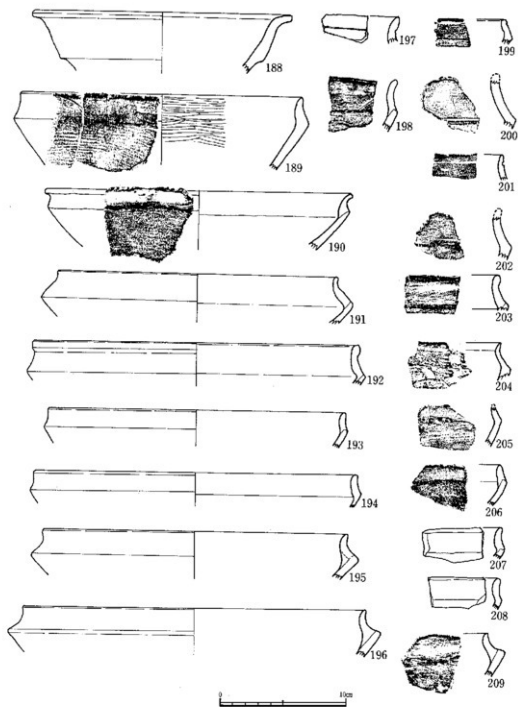


Fig.41 遺物実測圖 X

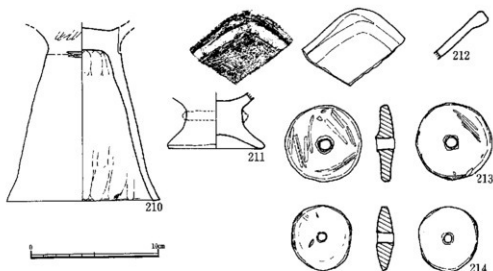


Fig.42 遺物実測図X

除いた土器は胎土に石英、長石、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含んでいる。200, 209はこれに金雲母の砂粒が加わる。焼成は良好で、色調は黄褐色～黒褐色で、大部分はいわゆる黒色磨研の土器である。

C類、如意形の口縁をなすものと、波状口縁をなす2点がある。Fig.41の188は口縁部が如意形をなし、端部を丸くおさめている。口縁下に粘土貼り付けの段を有する。内外面共横方向のヘラ研磨調整、Fig.42の212は波状口縁をなす浅鉢で口縁部が肥厚して段をなす。外面は貝殻条痕の上をヘラ研磨調整、内面は丁寧なヘラ研磨調整である。両者共、胎土には石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は188が褐色、212が黒色をなす。

⑦ 高坏 (Fig.42)

量的に少ないが高坏脚部2点がある。坏部は浅鉢との区別が困難である。210は脚部で、脚端径12cm、脚高13.5cm、脚端部は平坦に面とりがある。外面は横方向のヘラ研磨、内面は縦位の板ナデ後端部はナデ調整、坏部内面はヘラ研磨調整、胎土に石英、長石、金雲母、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含む、焼成良好、色調は黄褐色～黒褐色をなす、211は脚台状の低い脚部で脚端は大きく外へ開く。脚端径7.8cm、脚上部に突帯があったと思われるが剝離している。内外面共丁寧なヘラ研磨調整、胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含むが精良。焼成は良好で黒褐色をなす。

⑧ 壺形土器 (Fig. 43. 44)

大型、中型、小型の三種類があるが、ここでは一括して取扱う。破片、個体数はきわめて多いが、図化できるのは少ない。仕上げの状態で丹塗り磨研のものと黒色磨研のもの二種類に大別できる。

Fig.43 の215は中型壺の口縁部、口縁端部は大きく外反しない。外面は斜位方向のヘラ研磨調整で一部縦位のヘラ研磨痕がみられる。内面は口縁下1.5cmの範囲を帯状に横研磨し、それより以下はナデ調整のままである。216は器形的には210と同様である。外面口縁下1.5cmの間は横方向のヘラ研磨で黒色顔料が残存し、その上に一部ではあるが赤色顔料が遺存している。それより以下の頸部は縦方向のヘラ研磨で部分的に黒色顔料が遺存している。口縁内面で1.7cmの帯状の横方向のヘラ研磨があり、黒色顔料の上に赤色顔料がみられる。口縁以下は指圧とナデによる調整で、頸部と胴部境はヘラ削りによって薄くなる。この土器は顔料の使いわけからすると全体に黒色顔料を塗布し、口縁部内外をベルト状に赤色顔料で彩文したものと考えられる。このような例は他に1点存在する。217は頸部破片である。外面は丹塗り磨研、内面は粘土帯の痕跡が明瞭に残る。粘土帯は5段認められ、幅1~2cmの間である。いずれも内傾接合である。粘土帯の上はわずかにヘラ削りが認められる。218はほぼ全形を知ることでできる中型の壺である。口縁部は強く外反し、頸部は内傾し短い。肩部が張り体部は長胴である。底部を失うが丸底になると思われる。外面と口縁部内側は丹塗り磨研である。頸部内面は指圧とナデ調整、肩部はヘラ削りでそれ以下は板ナデ調整である。219は中型壺で口縁部はやや外反しわずかに丸味をもって肥厚する。頸部と胴部の境は浅い凹線をめぐらしている。肩部は張る。外面と口縁部内側は横方向のヘラ研磨調整、頸部は貝殻条痕で上半分はその上にナデ調整を加える。胴部も貝殻条痕調整、粘土帯の痕跡が明瞭で幅1.5cm前後である。いわゆる黒色磨研の壺である。220は壺頸部破片、頸部と胴部境に貼り付け突帯一条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨、内面は貝殻条痕調整、頸部と体部は外傾接合である。220~224と同様の破片であるが小破片のため器形は不明、内外面の調整は220と同様である。225も同様の破片であるがやや大型品と考えられる。内面は板条痕調整、fig.44 の226は大型壺、口縁は大きく外反する。外面と口縁内側は丹塗り磨研、他は剥離が著しく不明。227は中型壺でやや頸部が長い、肩が張る器形をなし、外面と口縁部内側は丹塗り磨研、頸部内側は指頭圧痕が顕著にみられる。228は中型壺、口縁部はわずかに外反し丸くおさめる。外面と口縁部内側は丹塗り磨研、内側の下半は板ナデ調整、229も中型壺、頸部と体部の境に部分的に浅い沈線がめぐる。外面は横方向のヘラ研磨、内面は貝殻条痕調整で口縁部付近はその上にヘラ研磨を施す。230は大型壺、口縁部が幅2cmぐらいで大きく外にくの字に折れ、口縁帯をつくり出している。外面と口縁部内側は丹塗り磨研、頸部には指頭圧痕が残る。231は大型壺、口縁部が外反し、頸部は内傾している。頸部と体部の境には凹線がめぐる。外面と口縁部内側は丹塗り磨研、頸部に指頭圧痕が顕著である。体部は刷毛調整である。以上の土器は胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む、焼成は良好、丹塗り磨研土器は胎土は白黄色、黒色磨研土器は黒褐色~黒色をなす。

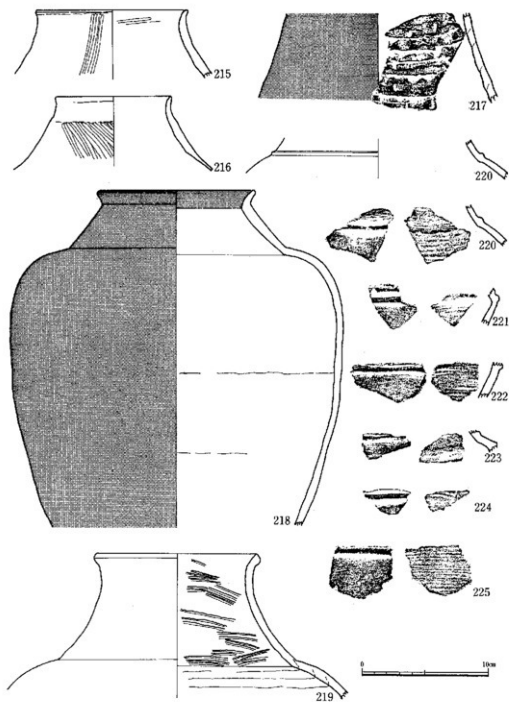


Fig.43 遺物実測図

4. 遺物

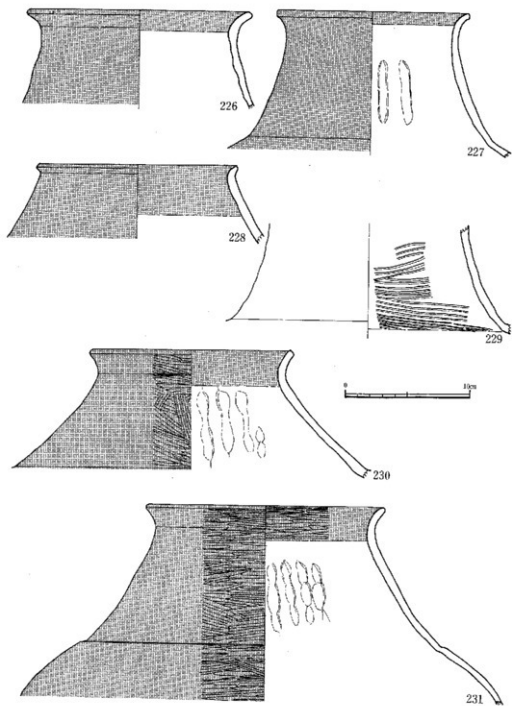


Fig.44 遺物実測図 XIII

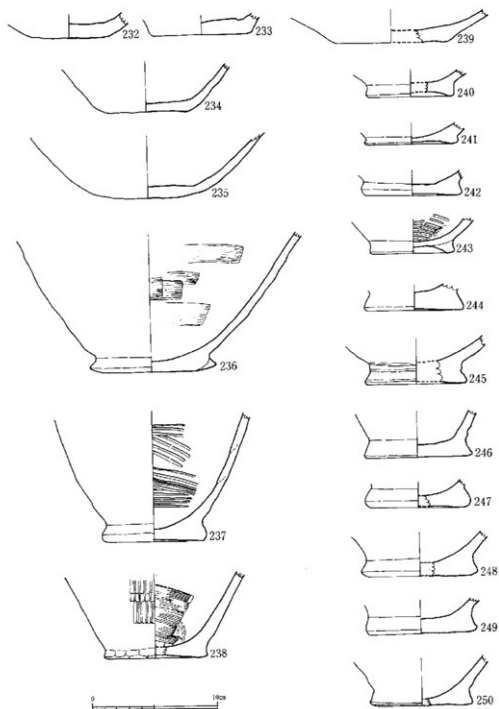


Fig.45 遺物実測図 XIV

4. 遺物

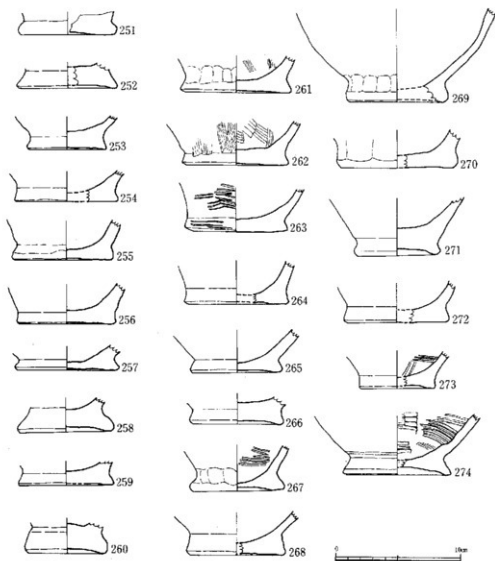


Fig.46 遺物実測図 XV

⑨ 土製品 (Fig. 42)

紡錘車2個がある。いずれも完形品である。213は径6cm, 孔径0.9cm, 中央部が厚く, 周縁部は薄くなる。厚さ0.7~1.2cm, 孔の部分は両面共粘土が隆起し高くなる。表面は指, 板条痕調整, 重さ38.5gである。214は径4.6~5.1cmでやや楕円形をなす。孔径0.7cm, 周辺が薄く中央部が厚いのは同じである。213に比べてやや荒い仕上げである。重さ29.3g, 両者共胎土には石英, 長石, 雲母, 赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で230は褐色~黒褐色, 231は黄白色をなす。

⑩ 底部 (Fig. 45, 46)

底部は比較的残存状態が良好でその数は多く, 図示していないものも多い。壺, 浅鉢, 甕の底部であるが明確には分類できないものもある。232, 234, 235は平底に近い丸底で壺の底部である。内外面共へら研磨, 233は平底であるが保存状態が悪く不明, 236は壺あるいは変形土器IV類の底部か。237, 244, 246~253, 260, 266~269, 271, 272, 274は底部が厚く, 脚端部が外に張り出し断面台形をなすもので, 平底ないしはややあげ底状にケズリを加えたものがある。体部は貝殻条痕, 板条痕調整が多く, 変形土器の底部である。238は底部端がわずかに外に張る底部で, 外面は縦の板ナデ, 内面は横の板ナデ調整, 変形土器II類の底部か, 239は平底で壺の底部と考えられる。240~243は浅鉢の底部と考えられる。低く外に張り出す底部で, 242を除いて他はケズリが加えられ, あげ底状をなす。器面は内外面共へら研磨, 243は条痕の上に板ナデ, へら研磨が加えられている。245は底部端が外へ開き途中が円筒状になり特異な例である。変形土器の底部で内面にススが付着する。250, 257, 265は底部端が外へ張り出すが低い。甕の底部と考えられる。257は端部が張らず円筒状をなす。259は浅鉢の底部でややあげ底状になる。外底部に木葉痕がある。内外面共へら研磨調整。263は底部端が張らず円筒状をなす。外面は貝殻条痕, 内面はナデ調整で, 内面にススが付着する。264はさらに円筒状の底部になる。268は底部端が外方の張り出しが多く, 円筒状をなす。ややあげ底で内外面共へら研磨調整, 浅鉢の底部。270, 273は円筒状の底を有する。いずれも胎土には石英, 長石, 雲母, 赤色鉱物の砂粒を含む。焼成良好で色調は黄褐色~黒褐色をなす。

(2) 水路1 (SD-01) と水路2 (SD-02) 上層出土の土器 (Fig. 47~52)

SD-01およびSD-02の上層はその埋土も同じ状態で, 遺構としても同時併存が考えられる。出土土器にも大きな差はなく, 単一時期の土器群として把握することができる。ただし, 一部には上層土器が混入している可能性もあるがその量は少ないと考えられる。

① 変形土器I類

器形, その他は下層土器と大きな差はない。Fig. 47の275は外面が貝殻条痕, 内面も貝殻条痕

4. 遺物

調整で上半部はナデ消す。突帯はBでヘラ刻み。276は外面が貝殻条痕でその上に板条痕を施す。内面は貝殻条痕でその上にナデを加え消している。突帯はBで刻みはヘラか(?)。277は276と調整その他は同じで、器形に若干の差があるが同一個体である可能性が高い。突帯はBでヘラ刻み。278は外面が貝殻条痕の上をナデ調整、内面は板条痕調整、突帯はBで棒状に工具の刻み。280は外面が板状痕の上をナデ調整、内面が貝殻条痕の土を板条痕調整、突帯はAで貝殻による刻み。281は内外面共ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。282は内外面共板ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。284は内外面共にナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。285は外面がナデ調整、内面がヘラ削り、突帯はAでヘラ刻み。286は外面に鉄分が付着し、内面は剝離して調整痕は不明、突帯はBで棒状工具の刻み。287は外面が板条痕調整、内面がナデ調整、突帯はBでヘラ刻み。288は外面が板条痕調整、内面がナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。Fig.48の289は外面が貝殻条痕で、その上にナデ調整、内面はナデ調整、突帯はAでヘラ刻み。290は内外面共に板条痕調整後ナデ調整、突帯はAで棒状工具の刻み。291は290と同様で同一個体の可能性もある。Fig.49の300は内外面共ナデ調整、突帯はBで板刻み。下層土器である。301は外面が貝殻条痕の上を板ナデ調整、内面はナデ調整、突帯はBで棒状工具の刻み。Fig.49の311は内外面共板条痕調整、突帯はAで棒状工具の刻み。以上の土器は胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で色調は褐色～黒色をなす。278, 281を除いた他の土器には突帯以下にススの付着が著しい。

② 甕形土器Ⅱ類

器形、特徴は下層土器と同様である。器形に若干の変化がみられ、2種類に大別できる。A類は下層土器と同様に口縁が直口するもの、B類は口縁部がくの字形に外反し、より如意形口縁に近くなるものである。

A類、2点が存在する。Fig.37の135は内外面共にナデ調整で、口唇部外面に棒状工具の刻みがある。Fig.48の298は外面はナデ調整、内面は指頭押斥痕が著しく、その上にハケ目調整、口唇部外側は棒状工具の刻み。外面にススの付着が著しい。Fig.49の312は内外面共にナデ調整で口唇部外面に棒状工具の刻みがある。外面にススの付着が著しい。両者共胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好、色調は黄褐色をなす。

B類 量的には比較的多い。口縁部の形態はそれぞれ若干異なる。292は口縁部の内側上方より押しなでることによって口縁がくの字状に外反する。体部は直線的に底部にいたる。外面はナデ調整、内面は貝殻条痕後ナデ調整、外反した口唇部全面にヘラ刻みがある。293は口縁がわずかに外反する。口唇部の刻みは剝離するため不明。内外共ナデ調整。294は口縁部がわずかに外反し、A類と大差ない。外面はハケ目調整後、ナデ調整、内面はナデ調整、口唇外反に棒状工具の刻み。295は内外面共ナデ調整、口縁部がゆるやかに外反し、口唇部全面に棒状工具の刻みを入れる。296はほぼ完形で全形を知ることができる。底部は端部が外に張り出した断面台形

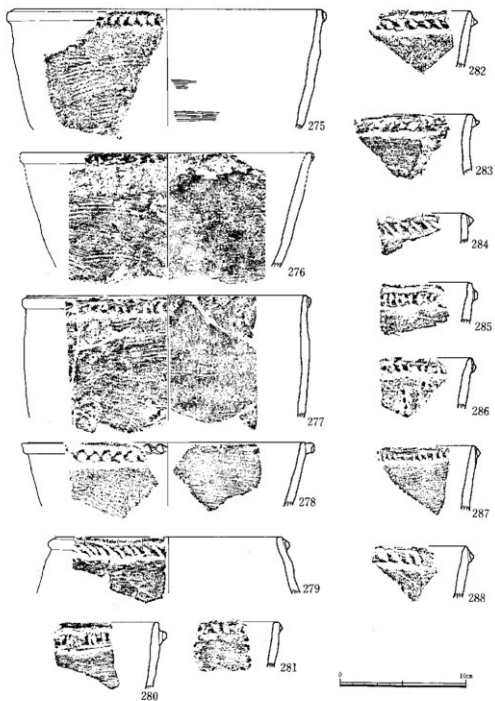


Fig.47 遺物実測図 XVI

4. 遺物

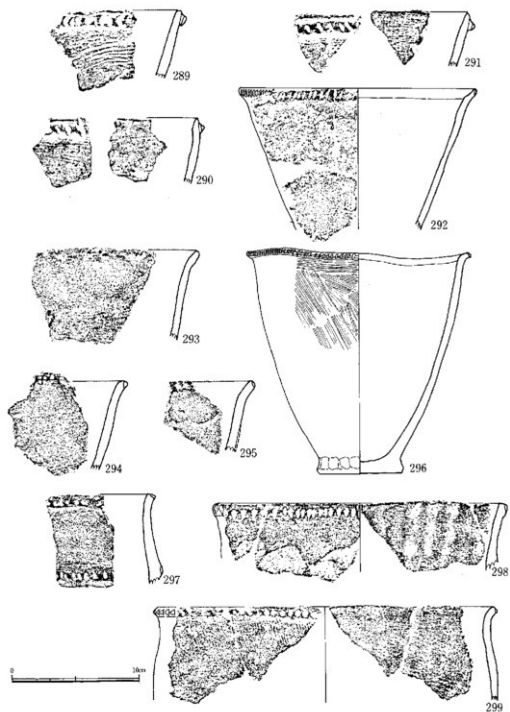


Fig.48 遺物実測図 XVII

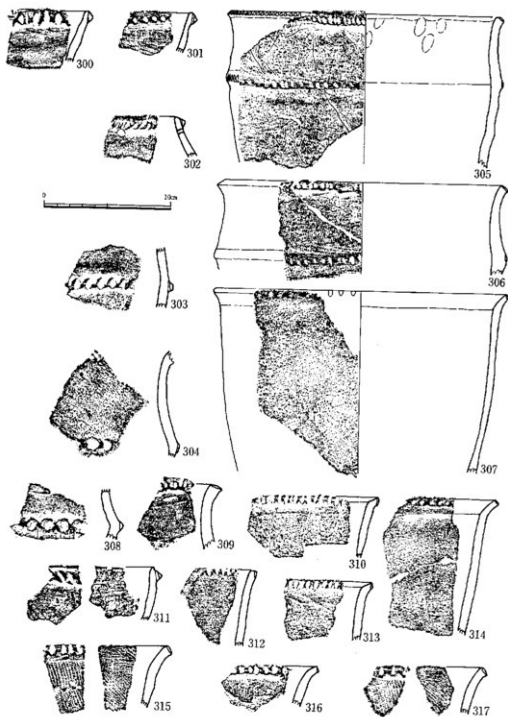


Fig.49 遺物実測図 XVII

4. 遺物

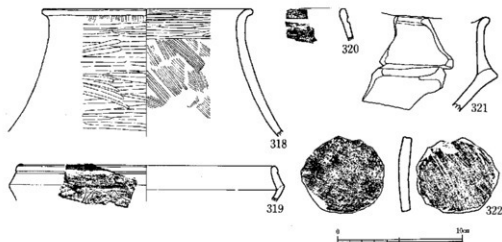


Fig.50 遺物実測図 XIX

をなし、体部は外傾して直線的にのびる。口縁部は内側上方から押えられ屈曲する。口唇部全面にヘラ刻みを施す。外面は板ナデ後ナデ調整、内面はナデ調整。口径18cm、器高17.6cm。299は他とやや異なる器形をなす。口縁部はわずかに外反し、体部はややふくらみをもって下方へ下る。外面は板条痕調整で、内面は板条痕の上にナデ調整を加える。口唇部外面に棒状工具による刻みを施す。Fig.49の307は口縁部がくの字形に外反し、体部は直線的にのびる。内外面は磨滅し、調整が不明であるが、ナデ調整らしい。口唇部外面から全面に棒状工具の刻みがある。310は292と同様の器形をなす。外面はナデ調整、内面は不明。口縁部は内側上方から押えられ短く屈曲する。口唇部全面にヘラ刻み。313は310と同一個体の可能性もある。314は口縁部がくの字に屈曲し、体部は直線的にのびる。内外面は丁寧なナデ（研磨？）調整、口唇部外面にヘラ刻みを施す。315は口縁部がわずかに外反する。内外面ハケ目調整、口唇部全面に棒状工具による刻みがある。317も同様で同一個体の可能性もある。316は外面が細かいハケ目調整、内面はナデ調整、口唇部はわずかに外反し、口唇部全面に棒状工具の刻みを入れる。以上の土器は胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は褐色～黒褐色をなす。すべての外面にはススの付着が顕著である。

③ 甕形土器Ⅳ類

器形、特徴は下層土器と同様である。口縁部直接刻みのA類と刻目突帯をめぐらすB類に分類できる。

A類 4点がある。Fig.48の297は外面に縦位のハケ目調整、内面はナデ調整、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部の刻みは口唇部の約半分に、ハケ目原体で刻まれる。胴屈曲部は貼り付け突帯ではなく直接ハケ目原体で刻む。Fig.49の305は口唇部がわずかに外反し、胴部屈曲は

大きくない。口唇部と胴屈曲部の刻みはハケ目原体によるもので、口縁の刻みは口唇部上面の約 $\frac{1}{3}$ に刻んでいる。外面は縦位のハケ目調整、内面はナデ調整。306は305とほぼ同様の特徴を持つ。胴上半が305より長く別個体であるがよく類似している。309も同様の特徴を持っている。以上の土器は胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色をなす。外面にはススの付着が著しい。

B類 Fig.47の279は外面が板ナデ調整、内面は貝殻条痕の上をナデ調整、口縁部突帯はBで棒状工具の刻み。283は外面が板ナデ調整、内面が板条痕調整の上をナデ調整、突帯はAでヘラ刻み。Fig.49の302は内外面共にナデ調整、口縁部突帯はBでヘラ刻み。突帯下に二次穿孔がある。303は外面の胴下半は板ナデ調整、胴上半部と内面はナデ調整、胴部突帯はヘラ刻み。304は外面は板ナデ調整、内面はナデ調整、胴上半部はゆるやかなカーブを描いてたちあがる。胴部突帯の刻みは棒状工具の刻みであるが大きい。308は外面がナデ調整、内面が貝殻条痕の上にナデ調整、胴部突帯の刻みは棒状工具の刻みであるが大きい。以上の土器は胎土に石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含み、焼成は良好、色調は黄褐色～黒褐色をなす。279、283、302、303は外面にススが付着する。

④ 浅鉢形土器

3点がある。Fig.50の319は口縁部が短くたちあがり、口縁下に沈線をめぐらす。内外面共丁寧な横方向のヘラ研磨、320は口縁下に1条の沈線をめぐらす。321は大型品で屈曲部は鋭く、口縁部は外反する。波状口縁をなすと考えられる。内外面共ヘラ研磨、319は胎土は精良、他は石英、長石、金雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は褐色～黒



Fig.51 遺物実測図 XX

褐色をなす。

⑤ 壺形土器

大型、中型、小型の3種があるが量的には少ない。Fig.50の318は中型壺で口縁部は外反し、やや折りかえしがみられる。頸部は丸くおさめる。外面は縦位のハケ目調整後、横方向のヘラ研磨、内部はハケ目調整で口縁部はその上から横方向のヘラ研磨を加えている。Fig.51の323は小型壺ではほぼ完形である。底部は外形が円盤貼り付状をなすが、端部が張り出し、薄い。胴部は肩が張り、胴部最大径は上位にある。胴部と頸部の境は明瞭である。頸部はやや長く口縁は外反し、端部は丸くおさめる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は胴部が板条直調整、頸部は指頭押圧痕が残る、その上をナデ調整する。口縁部は横方向のヘラ研磨。この土器は文様が都合3回にわたって施文されている。①最初は胴部上半部に細いヘラ描き沈線で重弧文が描かれているが、ヘラ研磨で消され部分的に残存している。②次に前段階と同様にヘラ描き沈線で施文したもので、頸部は対する2ヶ所に孤線を縦位に組み合わせ、頸部と胴部の境には3本沈線をめぐらし、さらに胴上位に文様帯を区画する沈線をめぐらしている。区画された文様帯には複線山形文をめぐらしている。③次には、沈線の文様を無視する形で彩文が施文される。先ず地文を黒色に塗り、その上に赤色顔料で彩文するものである。彩文文様は口縁部から約1.3cmの幅で帯状に面的に彩色し、その下に鋸歯文をめぐらす。鋸歯文の下には2条の細線をめぐらす。頸部と胴部の境に2条の細線をめぐらし、その間をくの字の細線で埋めている。この2条の細線にはさまれた部分が頸部文様帯となる。頸部文様帯は2本の縦線で6等分されている。この区画には上下から線で描かれた波文状の文様が描かれている。さらに胴上半部は下方に向けた鋸歯文が配され、鋸歯間には2本の細線が描かれている。Fig.52の324は小型壺である。内外面とも保存状態が悪く、調整等は不明であるが、胴上半部に2本のヘラ描き沈線をめぐらす。325は中型壺で外面は横方向のヘラ研磨、内面はナデ調整。頸部には二本の斜位のヘラ描き沈線で文様が施文される。頸と胴部の境にも2本の沈線がめぐらされ、その下に複線山形文が施文されている。318、323、325の胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を含み、324には金雲母を含まず赤色鉱物の砂粒が加わる。焼成は良好で、色調は黄褐色をなす。

⑥ 底部 (Fig. 52)

326は中型壺の底部で内外面共ヘラ研磨調整。327は大型壺の底部で、底部端が張り出すが円筒状をなす。外面は縦方向のヘラ研磨、内面はナデ調整。壺形土器の底部は前段階の底部端が外方へ張り出し、断面形が台形をなすもの。334、336、342と、底部端の張り出しが小さく、円筒状をなすもので以降に引き継がれる。328、331～333、335、337、339～341がそれである。あげ底状に削りとられるものもある。壺の器面は貝殻条痕が少なくなり、板ナデ、ナデ調整が多い。329は脚台状に底部が高くなる。内面にスガが付着する。338は円盤貼り付け状をなす底部で、内外面共にヘラ研磨、浅鉢の底部である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成

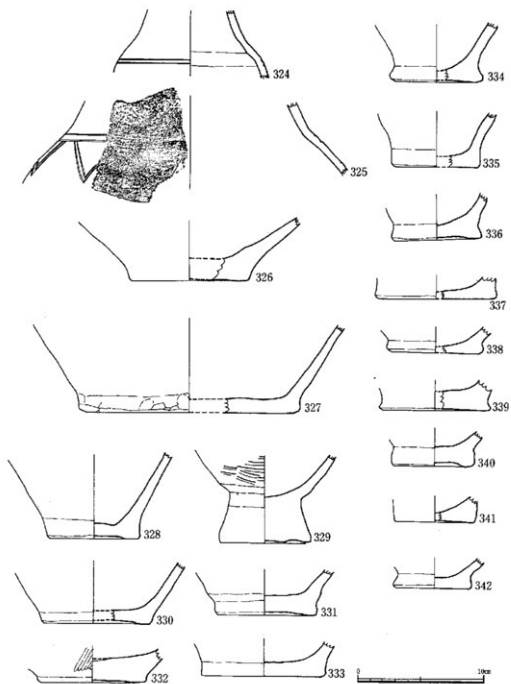


Fig.52 遺物実測図 XXI

4. 遺物

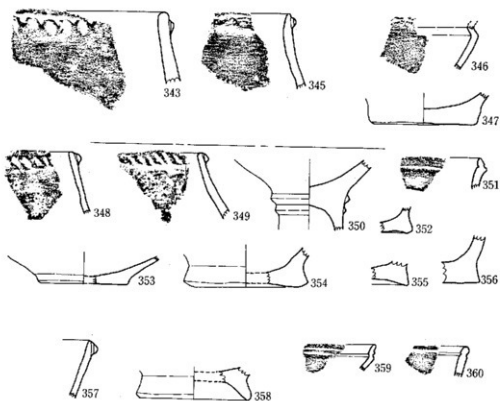


Fig.53 遺物実測図 XⅢ

は良好で、色調は黄白色～黒褐色をなす。

⑦ 土製品 (Fig. 50)

322は壺胴部破片を利用した円盤形製品である。周縁部を丹念に打欠き成形している。径6.4cm前後、内外面とも板ナデ調整である。厚さ0.8cm,である。

(3) 水路5 (SD-05) 出土の土器 (Fig. 53)

遺物の出土量は少ない。すべて突帯文土器以前の土器でこの遺構も水田遺構の一部と考えられる。Fig.53の343, 345は共に壺形土器IV類である。343は内外面共ナデ調整、口縁部の突帯はAで指による太い刻みを施す。刻目には爪形が残る。外面にはススが付着している。345は内外面共ナデ調整、突帯はAで刻目は不明瞭。346は浅鉢形土器、内外面共へら研磨調整。347は底部、磨滅が著しく表面の調整は不明、底部端は外方へ張らず円筒状をなす。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好。色調は346が黒褐色、他は黄褐色である。この他壺形土器II類Bや浅鉢形土器、底部、胴部破片があるが、小破片で図示できない。

(4) その他の土器 (Fig.53)

以上が各遺構出土の土器であるが、その他に中世遺構(溝)から若干の突帯文土器以前の土器がある。

348, 349は壺形土器Ⅰ類である。共に内外面は磨滅し調整痕は不明。突帯はBで、348がヘラ刻み、349が棒状工具の刻みである。350は高坏で坏部と脚部の境に断面三角形の突帯二条をめぐる。坏部は外傾しながらちあがる。内外面共ヘラ研磨調整。351は突帯文土器以前の浅鉢口縁部。352~356は底部で、353は浅鉢の底部、他は壺形土器の底部で、底部端が張り出すものと、円筒状をなすものがある。以上はSD-06の出土である。

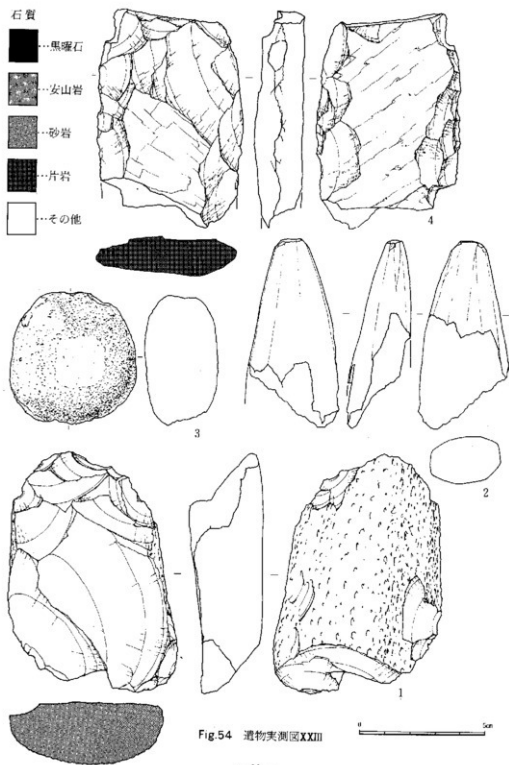
357は壺形土器Ⅰ類、突帯はBで棒状工具で刻む。358は底部で底部端が外方へ張る。あげ底である。359, 360は浅鉢で共に突帯文土器以前のものである。以上はSD-07出土である。その他、阿高系土器や壺形土器Ⅰ類、Ⅳ類があるが、いずれも小破片で図示できない。

(5) 野多目遺跡出土の石器

石器の大部分が水路SD-01, 02, 03, 05よりの出土である。石器には磨製石斧、打製石斧、敲石、スクレイパー、石砲丁、石鎌、不明磨製石器、Uフレイク等がある。石器ではないが、黒曜石の石核、フレイクの量はパンケース1箱もあり、その量の多さには注目すべきであろう。以下、各石器についてみてみよう。

Fig. 54の1は太形始刃石斧と考えられる。頭部と刃部を欠損する。幅6.5cm断面楕円形の大型品で、全面に敲打痕がある。研磨は施されていない。刃部のみを研磨したものか、あるいは未製品の可能性もある。石材は玄武岩。SD-01出土。2は小型の磨製石斧で刃部を欠損する。頭部は尖り気味になる。現存長7.5cm, 幅1.5~3.0cm, 厚さ0.6~2.5cmである。全体によく研磨されている。片岩を利用している。この他に磨製石斧片2点がある。SD-06出土。4.11~14は打製石斧である。共に扁平な片岩系の石材を利用している。4は厚さ1.8cm, SD-05出土。14はほぼ完形である。小型で長さ8.7cm, 幅3.5~4.2cm, 厚さ1.5cm。周辺は両面からの剝離で整形している。刃部は使用により磨耗している。SD-02下層出土。12はさらに小型で刃部を欠損する。現存長6.0cm, 幅3.1cm, 厚さ2.3cm, 側面は両面からの剝離で整形されるが、さらに敲打を加えて整えている。SD-02上層出土。13は12とほぼ同じ大きさで現存長6.0cm, 幅1.5~3.2cm, 厚さ1.0cm, 刃部を欠損する。側面は両面からの剝離で整形している。SD-07(中世溝)の出土。6, 7はスクレイパーである。7は横割ぎのフレイクのエッジに両面から剝離を加えて刃部を形成する。打面には自然面を残している。6はフレイクの周辺に片面加工したラウンド、スクレイパーである。6, 7は銅輝石安山岩を利用する。7はSD-02上層、6は

4. 遺物



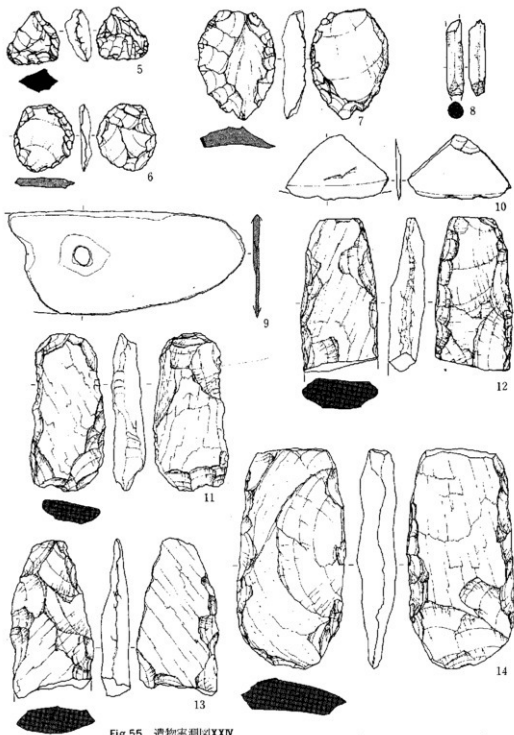


Fig.55 遺物実測図XXV

0 5cm

4. 遺物

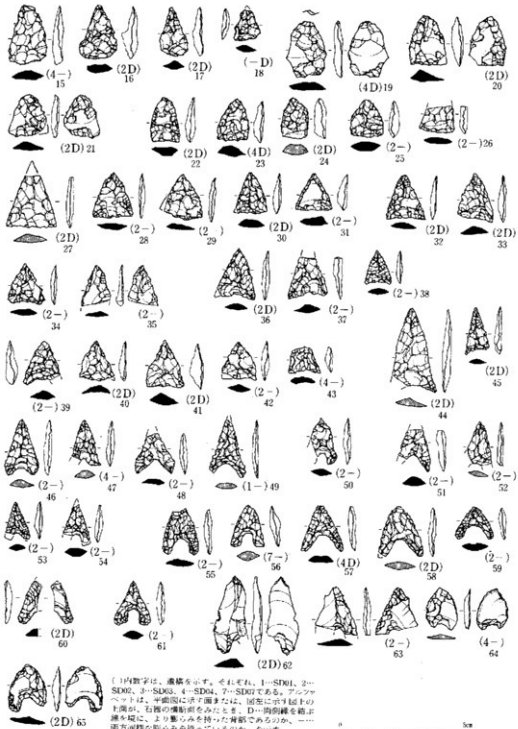


Fig.56 遺物実測図XXV



SD-02下層出土。9は外湾刃石庖丁，頁岩を素材とする。半折している。孔は2孔である。表面は剥離して残存しない。現存長9.2cm，幅4.1cm。3は敲石，周縁部に敲打痕が顕著である。安山岩礫を使用する。15～65は石鏃である。鋏形鏃，剝片鏃があるが，これは混入した可能性が強い。8は小型の磨製石器，径0.6cmの棒状をなしている。両端を欠いているため全形は明らかでない。

第5章 中世の遺構と遺物

1. 遺構

中世遺構は発掘区の東北部に検出した。柱穴、溝等がある。遺構の主体は未発掘区の東北部に拡がると考えられる。発掘区内の遺構は溝2条、掘立柱建物1棟である。この他、近世の溝

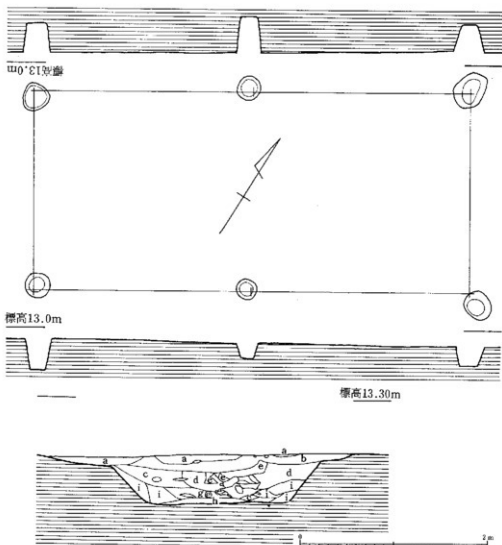


Fig.57 掘立柱建物(SB-01)と溝7(SD-07)断面実測図



Fig.58 中世遺物実測図

3条があるが、これは水田に関連するものと考えられる。

(1) 溝 (SD-06, 07) (Fig. 57)

SD-06は東西に走る不整形の浅い溝である。埋土中より縄文式土器、石器、土師器小片が出土している。溝の性格については不明。

SD-07は発掘区東端に検出した溝である。二段掘りになっていて一段目幅3.2m、二段目掘り幅2.2m、溝の深さ54cmを測る。埋土は自然堆積の状態を示しているが、地山のブロックが多い。a層は灰褐色粘質土、b層、暗灰茶褐色粘質土、c層、暗灰褐色粘質土、d層 暗灰褐色粘質土（地山ブロックを多量に含む）e層、茶褐色粘質土、f層 黒色粘質土、g層灰混茶色粘質土、h層灰色シルト、i層暗灰黒色粘質土となっている。

(2) 掘立柱建物 (Fig. 57)

SD-06の南側に検出した建物(SB-01)である。桁行2間、梁行1間の東西棟で主軸をN-58°-Eにとる。桁行4.6m、柱間2.3m、梁行2.1m、柱穴は径30cm程度で深さ30~40cmである。

小さな柱穴は多数検出したが、建物になるのは上記のSB-01のみである。

2. 遺物 (Fig. 58)

中世の遺物はきわめて少ない。表土層から青磁片若干が出土している他、SD-07より青磁1点が出土している。

1はSD-07出土の青磁碗である。内面に草花文が描かれている。釉色は灰青色を示す。2は小破片、壺の口縁部あるいは脚部になると思われる。淡い青色をなす。3は白磁合子の底部である。4は須恵器甕の口縁部である。

第6章 総括

1. 水田遺構の復原と他遺跡との比較

野多目遺跡における今回（第4次）の調査は弥生時代開始期の水田遺構を検出し、数少ない初期水田の構造を明らかにした意義は大きい。以下、野多目遺跡の水田遺構の概要をまとめ、他遺跡の水田構造と比較・検討してみよう。

野多目遺跡の水田構造の想定図は第 Fig.31 図に示したとおりであるが、この図は野多目遺跡の最終的な姿である。時期ごとには若干の差異がある。

(1) 開田地の問題

本遺跡が那珂川の左岸に形成された中位段丘Ⅱ面に立地していることは先に指摘した。この中位段丘Ⅱ面は基盤層に八女粘土層、烏栖ローム層、新期ローム層、沖積層が堆積している。段丘面は削平されているが元々平坦であったことはいうまでもない。標高約12～13mで那珂川によって形成された沖積地との比高差は約1.5mである。この段丘面は検出した水田耕作土の状況、あるいは水路の堆積土層からみて出水（洪水）のない安定した場所であったことがわかる。このことは、逆に開田に際して、灌漑用の水路等の設置がなければ水田の造営は困難であったことを示している。従来から初期水田は自然の低湿地を利用した湿田であったと説かれてきたが、この野多目遺跡の開田地の選択はこの説を真向から否定するものである。後にのべるように水田構造もこの立地にあわせ灌漑設備を整えている。板付遺跡の場合も本遺跡ほど明確ではないが中位段丘Ⅱ面の下に発達した低位段丘上に水田地が求められており、初期水田はその開田地の選択においてより安定した条件の場所を求めていることがわかる。

灌漑用の水路をどこから引き込んでくるのかは、今回の調査で解明できなかった。水路の始点が削平のために失われていたのはつくづく残念である。現在までの調査では、この段丘面にはいたるところに自然流路が存在することが確認されている。この水田の用水もこれら自然水路の一つにもとめていたことは疑いないが、開田にあたっては幹線水路の掘削に大きな労力をさいたことは想像に難くない。

(2) 水田構造

野多目遺跡の水田遺構は突帯土器単純期の段階から板付Ⅰ式土器の段階まで継続、発展し

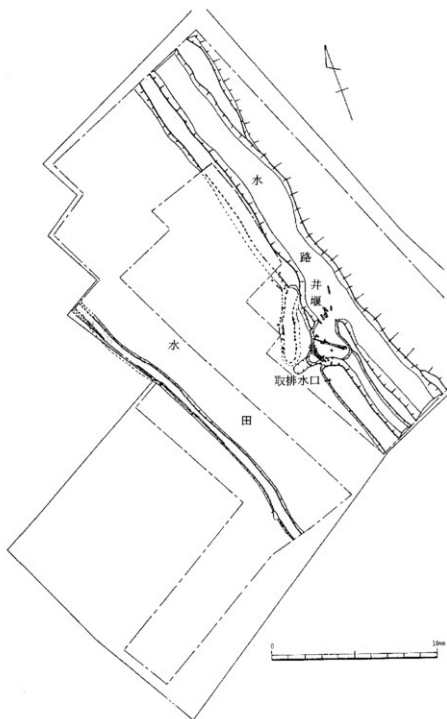


Fig.59 板付遺跡 G-7a 調査区水田 (夜白I式期)

1. 水田遺構の復原と他遺跡との比較

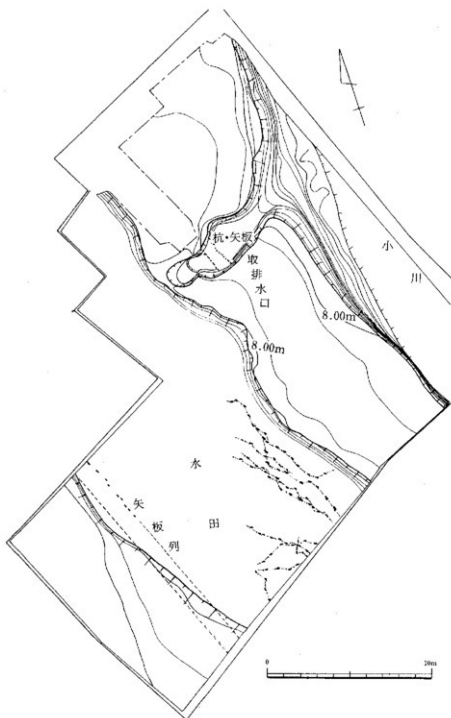


Fig.60 板付遺跡 G-7a 調査区水田 (板付Ⅰ時期)

てきたもので、その姿は一樣でない。この地に水田が開かれた当初は、灌漑用の水路はSD-02のみで、水田はこの水路SD-02の両側に存在したと考えられる。水路には井堰が設置され、井堰に貯水された水を水路わきに設置された水口から水田へ導入し、水口部の開閉によって水田の水量調整をおこなっていたことが推測できる。次の段階は水路(SD-01)の増設によって、水田面の拡大をみる。SD-01はSD-02の西側に掘削され、発掘区北側でSD-02と合流する。この水路の増設によってSD-02の西側に新しい水田が造営されている。SD-01には井堰2ヶ所が設置され、灌漑施設の充実をはかっている。井堰間は約30mで水口の関係からすれば、水田1～2筆に対して井堰が設置されていた可能性が強い。水口6～7の存在からみれば発掘区外の北側未調査の地点にも井堰が存在する可能性が強く、この考え方を強く支持するものであろう。また、これら幹線水路に対して支線水路の設置もみられる。SD-04が支線水路にあたる。幹線水路に比べて規模は小さいが各水田に対する補助的な水路と考えられ、我々が考えている以上に水田の水がかりの設備を整えていることがわかる。この支線水路の水口には矢板を打ち込み水量調整のための小規模な堰がつくられている。発掘区西北部で検出した幹線水路に平行して北流する水路SD-03は水田から排水するための水路と考えられる。このように野多目遺跡で検出した水田遺構は灌漑施設の充実した完成された水田であることが把握できる。しかし、調査区が限定されていたために不明な点も多くない。支線水路と各水田との関係や排水路SD-03の幹線水路との関係があげられる。これらについては、他の遺跡における水田遺構との比較検討から明らかにする必要がある。

(3) 他遺跡水田址との比較

Fig. 59. 60は板付遺跡G-7 a調査区における水田遺構である。Fig. 59は突帯文土器単純期(夜白I式土器の段階)の水田でFig. 60は板付I式土器の段階の水田である。両者共にその構造は同じであるが、規模的には板付I式土器の段階が大きく、その発展をみせる。Fig. 59の突帯文土器単純期(夜白I式土器)の水田は人工的に掘削された水路に井堰を設置し、井堰の上流には水田水口がとりつけられ、水口には水量調整のための小規模な堰が存在している。規模、水田構造共に野多目遺跡の水田構造と強い類似性を示している。ここで注意しておきたいのが水口部の上流に存在する水路である。幹線水路と水田畦畔の間に設置され、幹線水路と平行して北流し、水口部分に合流することが、ここに杭、横木の小規模な井堰が設置され、この水路からの水を貯水できるようにしている。板付遺跡の発掘ではこの水路が何の目的で設置されたのかを解明できなかった。しかし、今回の野多目遺跡の調査でこの構造が解明できた。すなわち、野多目遺跡で検出したSD-03と板付遺跡のこの水路を合成することで、この水路の完全な姿を理解することができる。野多目遺跡では水田から排水するための水路として設置

1. 水田遺構の復原と他遺跡との比較

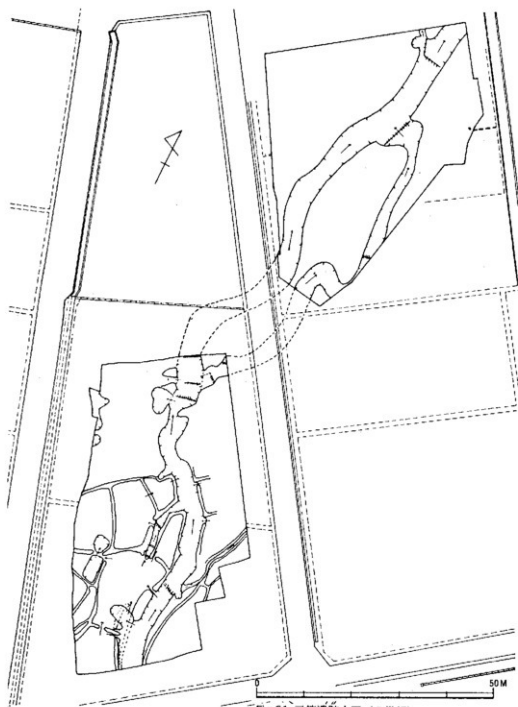


Fig.61 三筑遺跡水田 (5世紀)

されている水路の始点部分が判明し、板付遺跡では幹線水路との合流部の構造が判明したことになる。よってこの水路は上流部の水田から排水するために設置される水路であるが、単に排水を目的としたものでなく、下流では貯水施設の堰を設け、次の水田への給水も兼ね備えていることがわかる。

Fig. 61 は三筑遺跡の水田遺構である。この水田遺構は出土土器より5世紀代の水田であることは明らかであるが、野多目遺跡や板付遺跡の初期水田遺構と類似点が多い。幹線水路はやや蛇行して北流している。この水路には約40mの間隔で井堰が設置されていて、5～10筆の水田の給水を果している。このような井堰の設置は野多目遺跡の幹線水路の井堰との強い類似性が指摘できる。また、水田5に設置されている排水溝は水尻部に杭で堰が設置され、排水量の調整を行っているが、排水路の途中には井堰が設置されていて、この井堰で貯水された水は水田8に給水できるようになっている。この構造は野多目遺跡のSD-03や板付遺跡の水路に平行する排水路の構造と完全に一致していて、その類似性にはおどろくばかりである。三筑遺跡の水田は現代の水田と比較してもその完成度の高いことはすでに指摘したことがある。野多目遺跡や板付遺跡にみられる水田遺構が三筑遺跡の水田遺構とほとんど変わらないことは、日本における水稲農耕の開始期段階から高度の完成された水田が存在することであり、その水稲農業の技術体系は完全な形で日本にもたらされたことを意味している。また、水田構造や立地はこれら初期水田が灌漑施設を完備した半乾田ないしは乾田であったことが推測でき、従来からいわれてきた図式的な水田の発展段階は再考する必要がある。

(4) 水田の廃棄

野多目遺跡の水田遺構は、その開始期から完成した姿で登場し、突帯文土器単純期から板付I式土器の頃まで継続している。内容的にも、時期が下るにつれて水路の増設、水田面積の拡大を積極的に進め発展的であるが、突如として水田が廃棄され、弥生時代に継続されていない。このことが何を意味するのか現時点では判断材料がない。遺跡自体が削平され、上部の堆積が明らかでないが、この水田が次の時期に継承されていないことは、水路の土層堆積などからもその痕が見出せないことから明らかであろう。

SD-02の下層の土層堆積が砂が多く水路の水の流れがあったと考えられるのに対し、上層では黒褐色の粘質土が堆積し、水の流れが悪くよどんでいた状態が感知される。このことも水田の廃棄と大きくかかわっているとみることができよう。SD-01に多量に存在する木材との関連でも上層水田の経営がうまくいっていなかったことが推測できる。遺跡の土層堆積には水害等の痕跡は全く見られず、水田自体への直接的な働きかけによる廃棄とは考え難い。自然的現象によるものであった場合は灌漑施設の崩壊、特に自然流路から幹線水路へ給水するため

の施設が修復不可能なまで崩壊してしまったことが考えられるが、考古学的それを証明することはできない。今後、他遺跡との関連で検討を加えていきたいと思う。

2. 出土遺物に関する諸問題

今回の調査で出土した遺物には土器、石器、木材等がある。木材については本報告ではふれられていないが、樹種同定の結果をまっけて改めて報告することにする。石器の種類には打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、石庖丁等がある。初期水稲農耕の石庖丁の例の追加は貴重である。保存状態が不良であったことが残念である。打製石斧の存在は縄文時代後期以来の伝統を示すもので、水稲農耕の開始による生産形態の大変革の中にあつて打製石斧の存在意義は大きい。佐賀県葉畑遺跡、福岡市有田七田前遺跡に例をもとめることができる。打製石鏃は量的に多く注目する必要がある。石鏃製作のための石核、剥片の量は前時代と比較し急激な量の増加が認められる。このような状況は特に弥生時代の開始期、突帯文土器～板付Ⅰ式土器の段階に顕著に認められ、以後には継続しない。今後充分なる検討が必要である。

土器の問題については注目する成果を得ることができた。主に水路を中心に出土したもので量的には多い。単に水田祭祀に関する遺物だけでなく、日常的な土器類も多く含まれており、水田水路の性格を考えればやや異常であるが、集落が近くに存在していることを暗示しているようである。流れ込みの滞りた状態で出土した縄文式土器の存在は周辺に縄文時代遺跡存在を示唆している。野多目括渡遺跡では後期前半のドングリ・ピットが多数検出されており、野多目段丘面における縄文式土器の散布範囲は広く、さらに有望な縄文時代遺跡が存在することが考えられる。SD-02下層では突帯文土器単純期の土器群が出土し、SD-02上層、SD-01ではその発展段階の土器の1群が出土している。

下層土器は壺形土器Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類、浅鉢、鉢、高坏、壺形土器Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類がセット関係として存在する。特に壺形土器Ⅱ類が量的に増加していて、以後の土器の展開との関連で注目される。壺形土器Ⅳ類では、口縁部に直接刻みを施すものと(A類)2条突帯を施す(B類)2種が存在する。口縁部に直接刻みを入れる土器の接合は外傾接合になっている点は注目する必要がある。壺形土器Ⅱ類および壺形土器Ⅳ-A類の口縁部刻みは口唇部の外面側に刻みを入れることで統一されている。壺形土器には長胴形のものが含まれている。全体的にみた場合、福岡平野の土器としての位置づけが可能であるが、板付遺跡を中心とする諸岡川水系の土器群とは若干の差異を指摘することができる。時期的には夜臼Ⅰ式、Ⅱa式に比定できる。

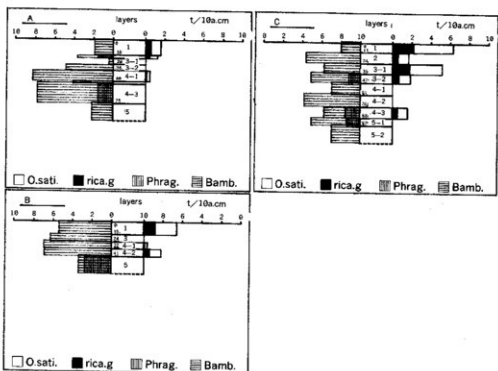
上層土器は量的に少ないが注目される土器群である。報告では板付Ⅰ式土器の範疇に含めて説明したが、典型的な板付Ⅰ式土器は皆無である。残存形態として突帯文土器の共伴は認められるが、一つの特徴ある土器のセット関係を抽出することができる。壺形土器Ⅱ類では前段階

の土器の形態を示すものは少なくなる。かわって、器形的に口縁部が内側上方からの押えで、くの字形に外反し、体部は直線的に底部にいたる。底部は完形品でみる限りは底部端が外方へ張り出す断面台形をなす（破片としては底部端の張出しの小さい円筒状をなすものも多い。）土器の量の増加がみられる。口唇部の刻みは前段階の口唇部外面刻みも存在するが、口唇部全面に刻みを入れる傾向が強くなる。ハケ目調整の土器が目立ってくるのも一つの特徴としてあげられる。甕形土器Ⅳ-A類はⅡ類と同様に口縁部が外反する傾向にあり、口唇部刻みも口唇部全面におよぶものである。壺形土器は量的に少ない。口縁部を肥厚させ段をつくり出す典型的な板付Ⅰ式土器の壺は1点も存在しない。器形的には夜臼式土器に含まれるものである。ただし、小型の彩文土器は特異な例をあげることができる。文様の3回におよぶ施文は文様施文の意味を考える上でも示唆を与えてくれるが、最終的に施文された彩文は口縁部を帯状に塗り、板付Ⅰ式土器の口縁部段と相通じる要素が読みとれる。下層出土の壺形土器にも口縁部を帯状に彩文する例が2例ある。これらの壺は、器形的にも出土の壺形土器にも夜臼式土器と板付Ⅰ式土器の中間形態を示している。また、ヘラ描き状線で描かれた複線山形文を有する壺も板付Ⅰ式土器に先行するものである。以上のように、上層出土土器は甕、壺のセットの中で、夜臼式土器から板付Ⅰ式土器へ移行する中間的な存在を示していることが指摘できる。しかし、これらをもって板付Ⅰ式土器の祖形とするには今後の検討が必要である。ここでは、板付Ⅰ式土器の祖形的要素を指摘するにとどめ、板付Ⅰ式土器の生成については別稿にゆずりたいと思う。

第7章 プラント・オパール分析

資料の採集地点はAがSD-02, 中央セクション断面, BがSD-01とSD-02間の水田面と考えられる中央セクション断面, CがSD-01北壁断面から採取したものである。宮崎大学, 藤原宏志先生から以下のような分析結果のコメントをいただいた。分析表は藤原先生によるものである。

「B地点は水田面とみられる地点である。表層から24cmしかないが, 3層でイネが検出されず, 4層でイネのピークが出ているところから水田面とみてよいものと判断される。ただし, 水田上面はカッピングされている可能性大」



フクオカ オオハシナミ 3/8'84

圖 版

PLATE



(1) 調査区全景 (南から)



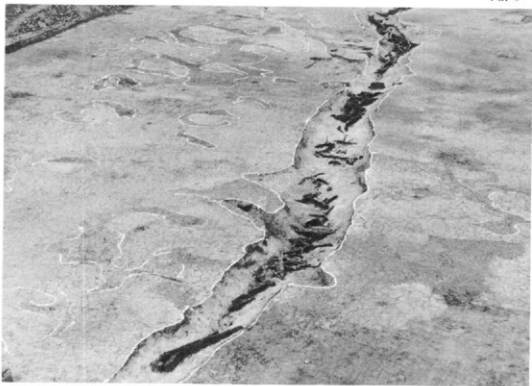
(2) SD-02全景 (南西から)



(1) SD-01全景 (南から)



(2) SD-01 (南から)



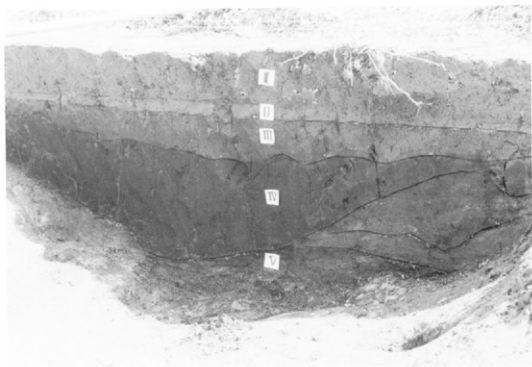
(1) SD-01近景 (南から)



(2) SD-01、03近景 (西から)



(1) SD-02断面 (北から)



(2) SD-01断面 (南から)



(1) SD-01プラント・オパール分析資料採取



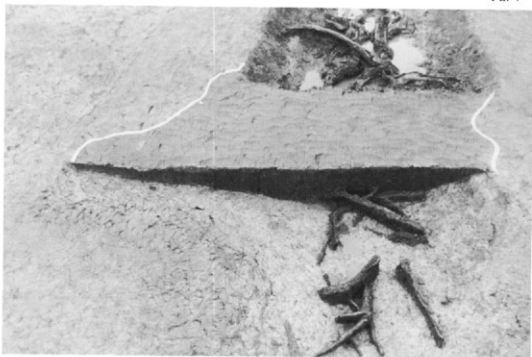
(2) SD-01断面 (南から)



(1) SD-01木材出土状況



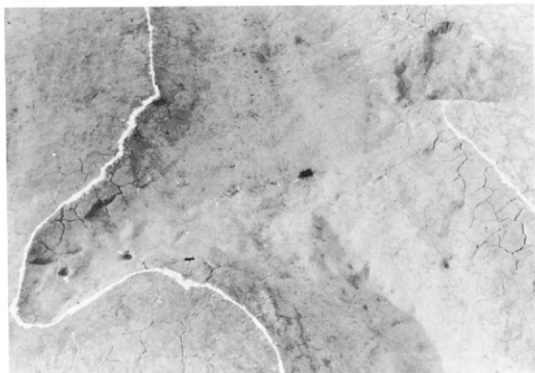
(2) SD-03杭列



(1) SD-01、水口3近景 (南から)



(2) SD-01、水口4、5近景 (西から)



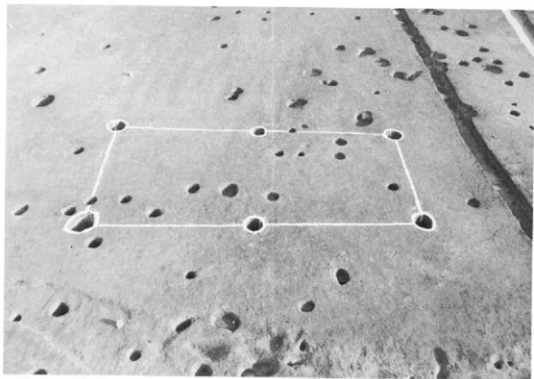
(1) SD-01、3号井堰と水口4、5近景（南から）



(2)水口7近景（西から）



(1) 中世遺構全景（西から）



(2) SB-01近景（北から）



(1) 中世溝 (SD-07) 近景 (西から)



(2) 中世溝 (SD-07) 断面 (北から)



(1) SD-04眼近景 (南から)



(2) SD-02下層出土石器



(1) SD-02下層遺物出土状況（東から）



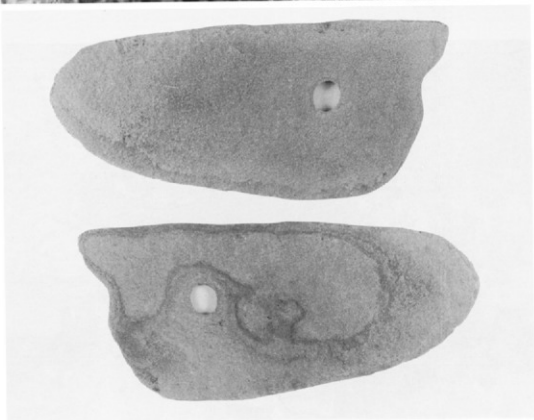
(2) SD-02下層遺物出土状況（南から）



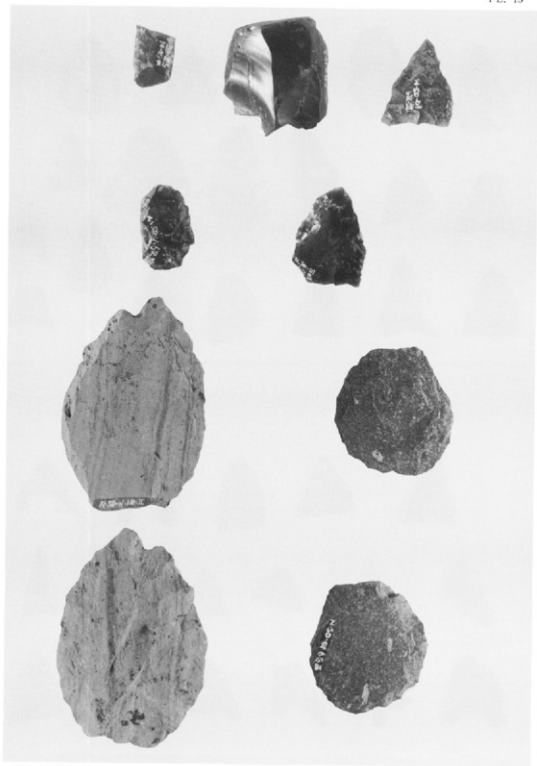
(1) SD-02下層遺物出土狀況



(2) SD-02下層遺物出土狀況



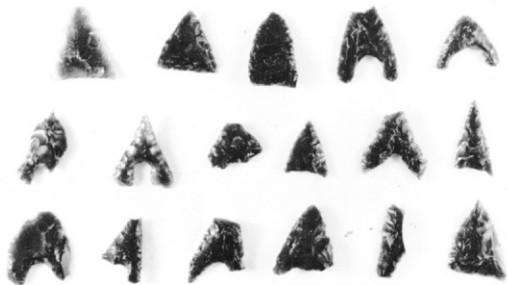
石包丁出土状況と石包丁



下層出土石器



(1) 石鏃 I (a面)



(2) 石鏃 II (a面)



(1) 石鏃 I (b面)



(2) 石鏃 II (b面)



打製石斧・磨製石斧



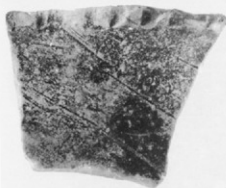
縄文式土器



34



33



48



35

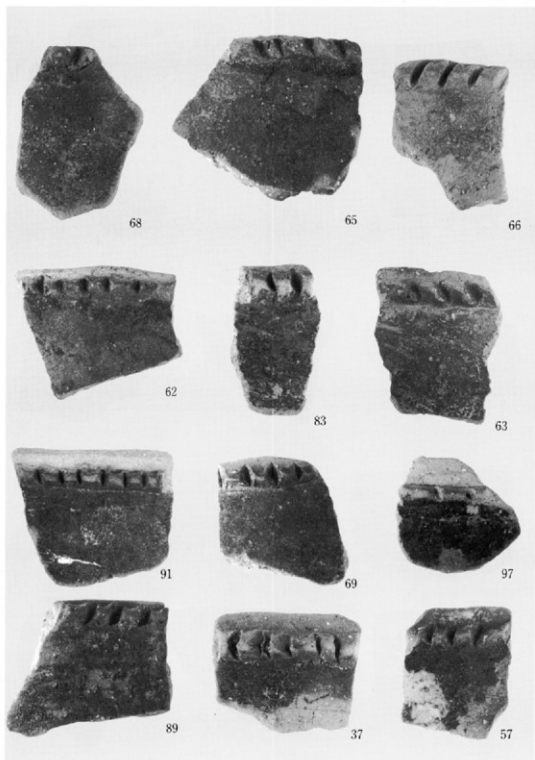


28

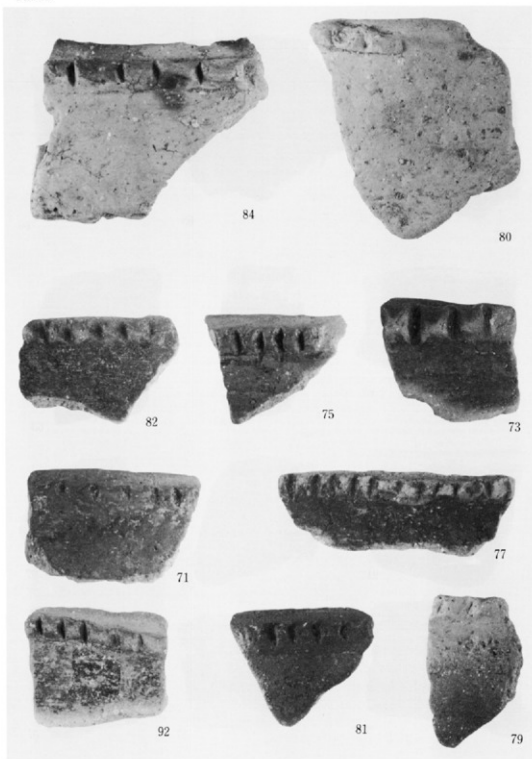


41

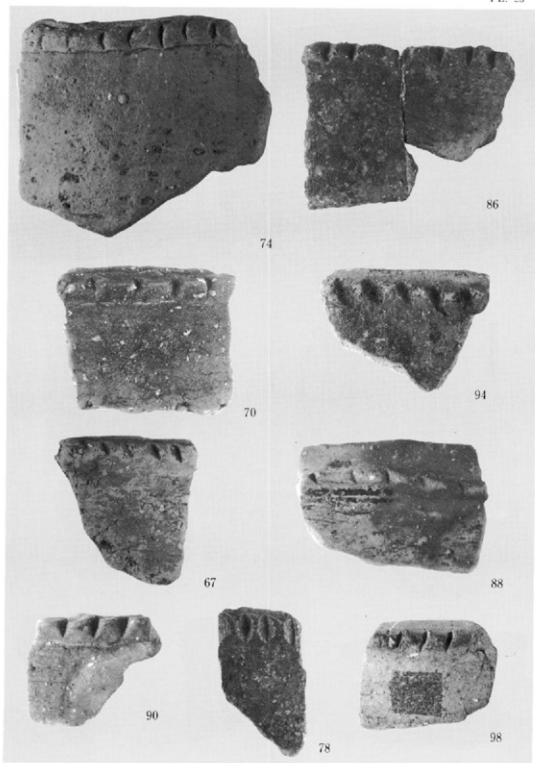
下層出土土器 I



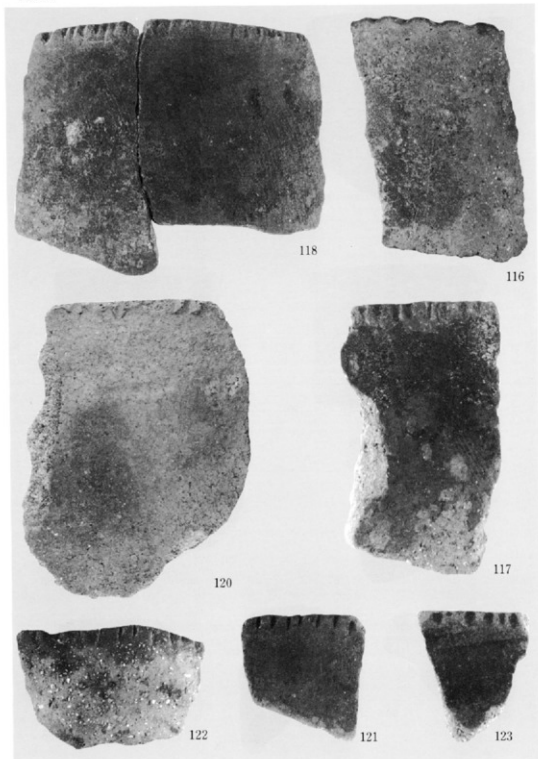
下層出土土器Ⅱ



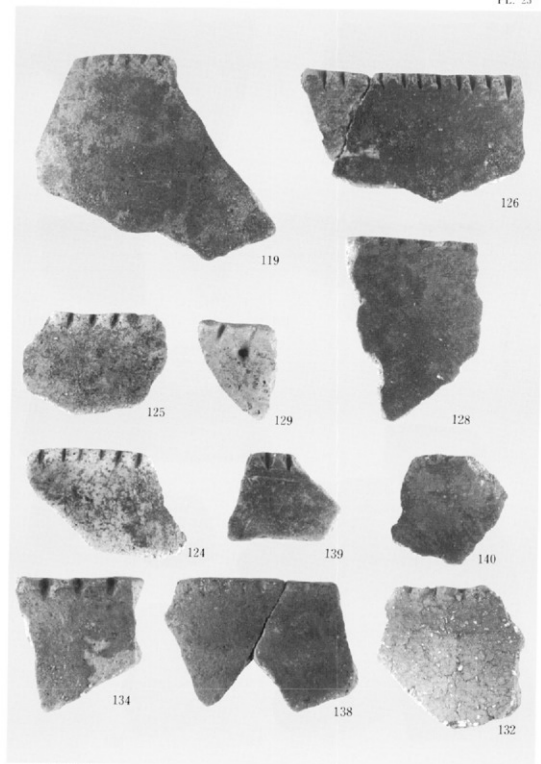
下層出土土器Ⅲ



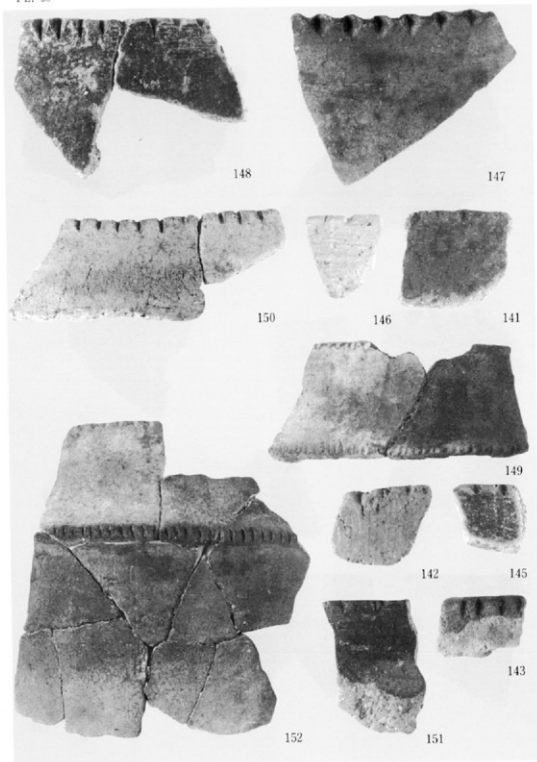
下層出土土器Ⅳ



下層出土土器Ⅴ



下層出土土器Ⅵ



下層出土土器Ⅶ



下層出土土器Ⅷ



159



161



158



165

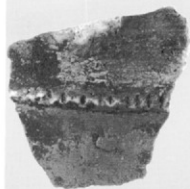


170



76

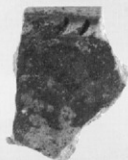
下層出土土器Ⅸ



177



178



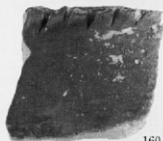
164



173



166



160



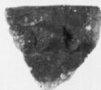
187



181



162



172

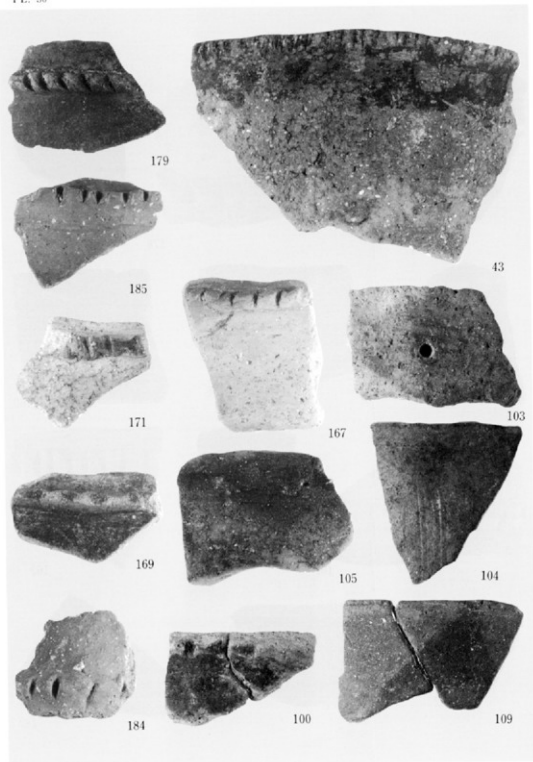


174

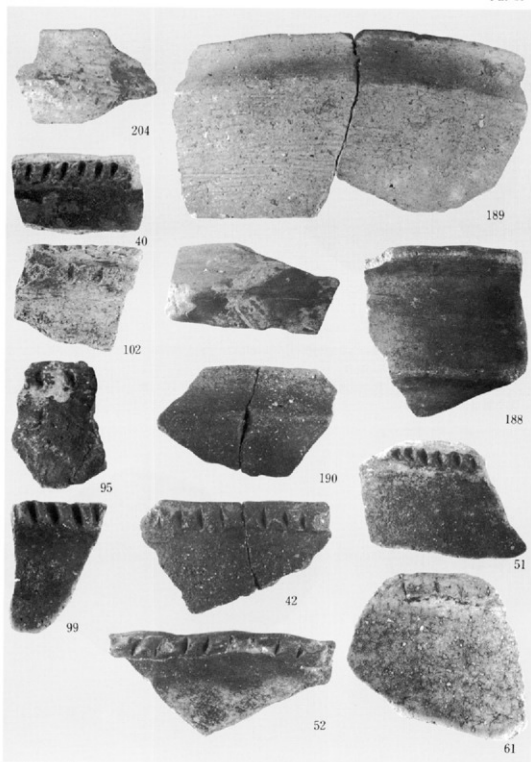


182

下層出土土器 X



下層出土土器Ⅺ



下層出土土器Ⅱ

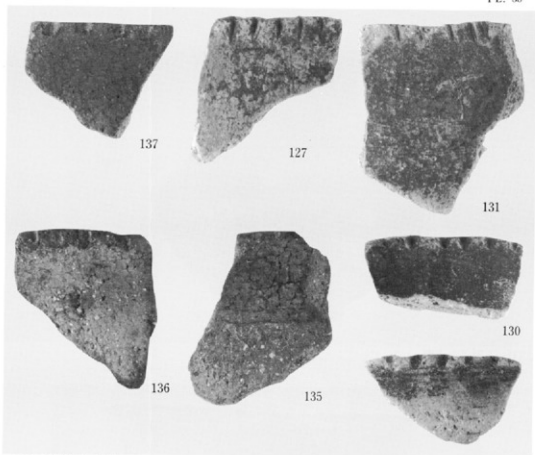


(1) 下層出土紡錘車



(2) 下層出土高杯、淺鉢





(1) 下層出土土器 XIII



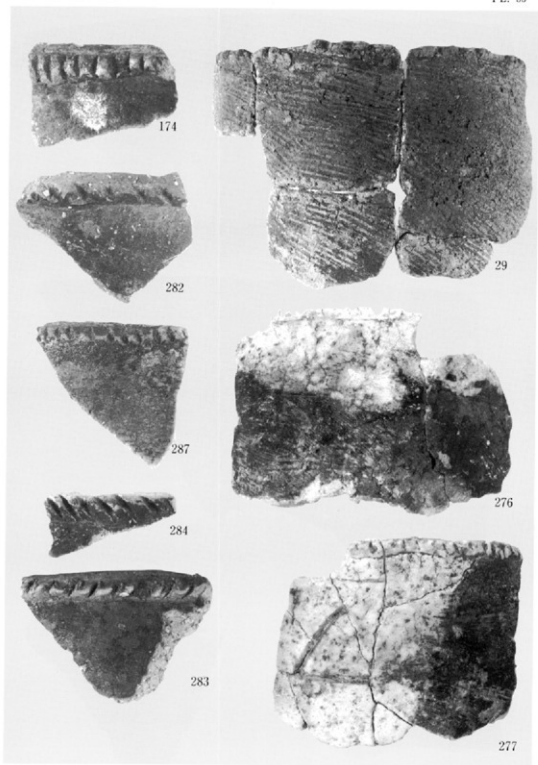
(2) 上層出土土器 I



(1) 上層出土小壺



(2) 上層出土甕



上層出土土器Ⅱ（一部下層出土土器）



298



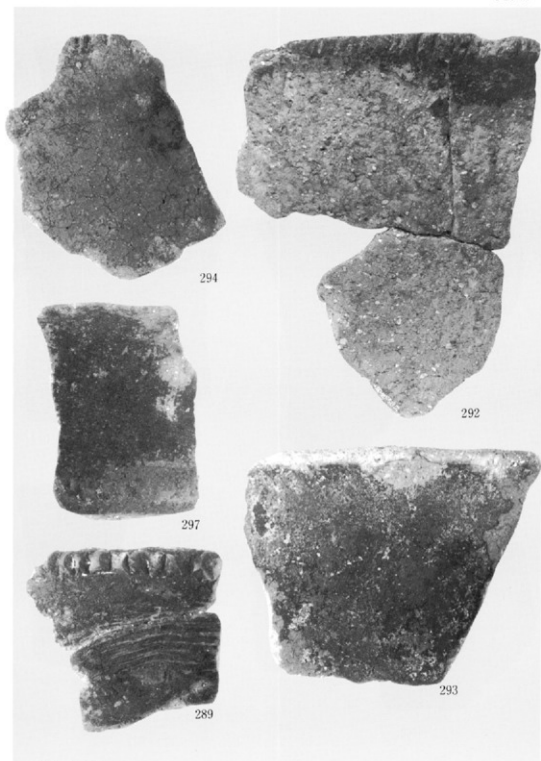
299



302



291



上層出土土器Ⅳ



307



314

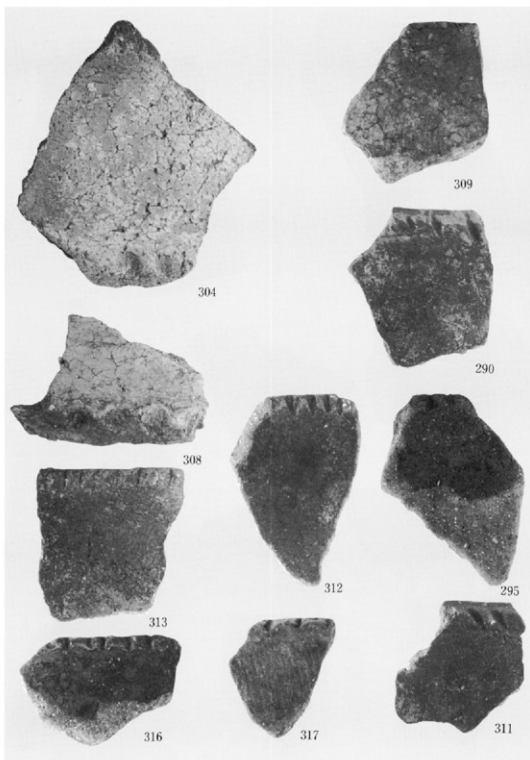


310

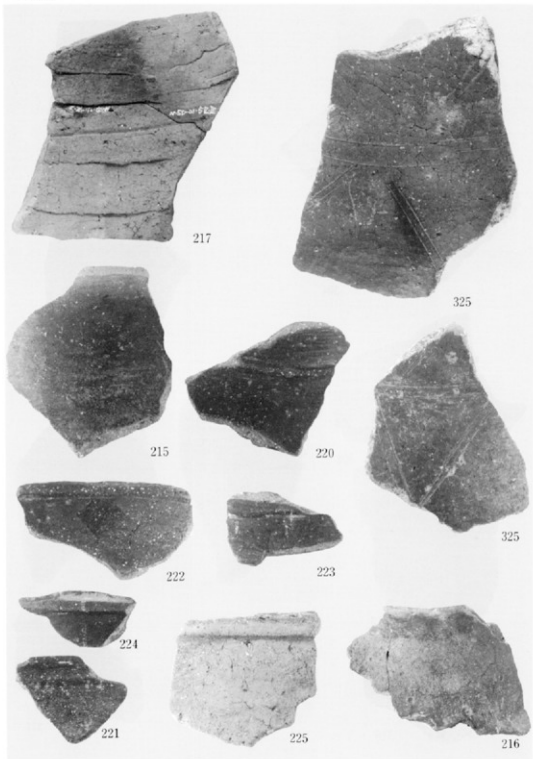


315

上層出土土器 V



上層出土土器Ⅵ



下層、上層出土壺

野 多 目 遺 跡 群

— 稲作開始期の水田遺跡の調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第159集

1987年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10番29号
印 刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800
